は不意に立停つて這入つて行かうと決心した。イヴンが其處に居るかも知れないと思つたからで有る。呼鈴を鳴らして、階段を上つて行く時、一人の男が降りて來るのに出會つた。イヴンがカテリイナの許から出て來たので有る。

「あゝお前か」と、イヴンは冷やかに言つた。「左樣なら、カテリイナに會ひに行くのかい。」

「左樣です。」

「あの女は今むしやくしやして居るから、成るだけなら會はない方が可いよ。」

不意に上の戸が開いて、中から聲がした。「いえ〳〵、アリヨウシヤ、貴方はあの人の許から來たのですが。」

「左樣です、兄に會つて來ました。」

「あの人から言傳が有りませんか。まアお上りなさい。イヴン、貴方も戻つて來なくちや成りませんよ、好う御座んすか。」

イヴンは一寸思案したが、又決心して、アリヨウシヤと一緒に上つて行つた。

「御免なさい、私は外套を着て居ますよ」と、客間に通りながら言つた。「私は永く居られませんからね。」

「お掛けなさい、アリヨウシヤ」と、カテリイナは椅子を勸めた。彼女の姿は以前と別段變らない。「あの人は何と言ひました？」

「只一つですが」と、アリヨウシヤは相手の顏を見返しながら言つた。「兄は明日法廷で何にも仰有らないやうに……最初貴方がたの間に……彼方で起つたことも默つて居て下さるやうに賴んで呉れと言つたのですよ。」

「あゝ、私があの金子のために床に跪づいたことでせう」と、彼女は急に苦笑ひをした。「何うして、あの人は私の爲に心配して呉れるのか、それとも自分自身の爲に？一體誰の爲なんですよ。アリヨウシヤさん、判然言つて下さい。」

アリヨウシヤは相手の心を讀まうとして、凝乎と見詰めて居た。「貴方の爲にも、自分の爲にも、兩方でせう？」

「それ聞いて安心しました」と、カテリイナは相手の言葉を引ッたくるやうに言つた。

が、直に又顔を赫らめた。「貴方には未だ私といふものが解らない。自分でも解らないのですものね。恐らく明日私の申立を聽いたら、貴方は私を踏み躙つても飽き足らない女だと思ふでせうよ。」

「貴方は只眞直に貴方の見るところを仰有つたら可いでせう」と、アリヨウシヤが言つた。「それだけで可いんですよ。」

「女は時々不正直なものですよ」と、カテリイナは旋毛(つむじ)を曲げた。「はんの一時間前には、私はあの獣物(けだもの)に手を觸れるのも可厭なやうな氣がして居ましたがね……矢張あの人は私の爲には人間ですよ。一體あの人の仕業でせうか。あの人は人殺しでせうか」と、彼女は不意にイヴンの方へ向直りながら、ヒステリイのやうに叫んだ。恐らく彼女はアリヨウシヤが此處へ這入つて來る前に百遍も同じ質問を繰返したので有らう。そして二人は喧嘩して別れたものらしい。

「私はスメルヂヤコフに會ひに行つたのですよ……ミチヤが阿父さんを殺したと、私に說得したのは貴方でした。えゝ、貴方でした。貴方が言つたから私も信じたので

すよ」と、彼女は猶イヴンに向つて續けた。彼は只苦笑ひをして聞いて居た。

「兎も角、最う澤山ですよ」と、イヴンは會話を打切つた。「私は歸りますよ。又明日來ますからね。」かう言つて、彼は直に部屋を出て、階段の方へ下りて行つた。

カテリイナは一生懸命にアリヨウシヤの手を摑んだ。

「直に追駈けて下さい。一人ぢや打捨つて置かれないのですよ」と、相手の耳に囁いた。「あの人は狂人です、氣が狂つたのですよ。お醫者さんも左樣言ひました。直に追駈けて下さい。」

アリヨウシヤは飛上つて、五十步程前に行くイヴンの後を追駈けた。

「何が用だい」と、彼はアリヨウシヤが追駈けて來のを見て、急に振向いた。「あの女は私が狂人だから捕まへて呉れと言つたのだらう。私はちやんと知つて居るよ。」

「勿論あの人は間違つてま居す。だが、貴方が病氣だといふのは眞實ですよ」と、アリヨウシヤは言つた。「私も今貴方の顏を見て居ましたが、大變お惡いに違ひない。」

イヴンは立停まりもせずに步いて行つた。アリヨウシヤは後から續いた。

「アリョウシヤ、お前は人間が何んな風にして狂人になるものだか知つて居るかい」と、イヴンは不意に落着いた聲で訊いた。

「知りません。が、狂人もいろ〳〵有るでせうね。」

「で、人間は自分で狂氣になるのを觀察することが出來るだらうか。」

「何うもそりや出來ないでせうね」と、アリョウシヤは吃驚して答へた。

イヴンは少時默つて居た。

「お前も私に話をするなら、題目を變へて呉れろよ」と、不意に言ひ出した。

「あゝ、私は貴方への手紙を持つて居ますよ」と、アリョウシヤはおづ〳〵言つた。そして衣嚢からリザの手紙を取出して、イヴンに手渡した。二人は恰度街燈の下に立つて居た。イヴンは直に其手紙を認めた。

「あゝ、あの小惡魔からか」と、イヴンは笑ひながら、封も切らずに、細々に其手紙を破つて捨てた。紙の片が風に散つた。

「未だ十六に成るや成らずに、こんな手紙を寄けるなんて仕樣のない娘だな。」

「何ですつて」と、アリョウシヤは叫んだ。

「浮氣女と同じだと言ふんだよ。」

「兄さん、そりや酷い」と、アリョウシヤは悲しげに言つた。「未だ子供ですよ。貴方は子供を侮辱するのですか。それにあの子は病氣です、何うかすると狂人に成りかけて居るのですよ。」

「そりや子供かも知れないが、私は媒母ぢやないからね。アリョウシヤ、靜にしろよ。私はあの娘のことなど考へても居ないんだよ。」

二人は少時默つて居た。

「あの女は明日裁判で何う言つて可いかお告げに預りたいと、一晩中聖母の御像の前に祈つて居るだらうよ」と、イヴンは再び怒つたやうな聲で言つた。

「あの……カテリイナのことですか。」

「左樣さ。あの女はミチやを救はうか、陷入れやうか、天からの光を祈つて居るんだよ。一人ぢや決心が附かないからね。あの女も私を媒母だと思つて居るのだ。私に子

守歌が唱つて貰ひたいんだよ。」

「カテリイナは貴方を愛して居るでせう。」

「左樣だ、併し私は餘り氣に掛けちや居ない。」

「あの女は苦しんで居る。何故貴方は……時々あの人に希望を與へるやうなことを言つたのですか」と、アリョウシヤはおづ〳〵批難するやうに言つた。「貴方があの人に希望を與へたのだといふことは、私も知つて居ますよ。」

「私も自分の思ふ通りには行動されないんだよ」と、イヴンは苛々しながら言つた。

「私が今あの女と丸ッ切り手を切つて見るが可い、あの女は明日裁判であの獸物を陷入れて私に復讐するよ。あの女は心から彼奴を憎んで居るからね。だが、私があの女と手を切らずに居る間は、あの女も私があの人殺しを助けやうとしてるのを知つて居るから、彼奴を陷入れるやうなことはしまいよ。兎に角裁判が濟まなきや駄目だよ。」

人殺しだとか、獸物だとかいふ言葉が、アリョウシヤの胸に釘を打つやうに響いた。

「が、何うしてあの人がミチヤを陷入れるのでせう」と、イヴンの言葉を味ひながら

訊いた。「ミチヤを陷入れるやうな證據を持つて居るのですか。」

「お前は未だ知らないんだよ。あの女はミチヤが自筆の書類を所持して居る。それを出されたら遁れつこはないね。」

「そんな筈はない」と、アリョウシヤは叫んだ。

「何うしてそんな筈がない？　私は自分で讀んだのだよ。」

「そんな書類の有る筈がない」とミチヤは繰返した。「あの人は人殺しぢやないから、ないのですよ。阿父さんを殺したのはあの人ぢやない、斷じてない。」

イヴンは不意に立停まつた。「ぢや、誰が殺したと言ふんだい。」

「誰だか、貴方は御存じです」と、アリョシヤは低い聲で言つた。

「誰だ？　お前はあの馬鹿の、狂人の、癲癇病みのスメルヂヤコフのことを言ふのかい。」

アリョウンヤは身體中顫へるやうな氣がした。

「誰だか、貴方は御存じです」と、彼は力なく言つた。彼は息も出來なかつた。

「誰だ？　誰だ？」とイヴンは吾を忘れて烈しく詰め寄せた。

「私は、私は」と、アリヨウシヤは殆ど囁くやうに續けた。「貴方が阿父さんを殺したのぢやないといふことだけは知つてゐます。」

「貴方ぢやない！　貴方ぢやないとは何う云ふことだ？」と、イヴンは雷に打たれたやうな氣がした。

「貴方が阿父さんを殺したのぢやない、貴方ぢやない」と、アリヨウシヤは固く繰返した。

沈默が一分間程續いた。

「私も自分が殺したのぢやないといふことは知つて居るさ。お前は氣が狂つたね」と、イヴンは眞蒼な顏して、唇を歪めたやうな微笑を洩した。眼はアリヨウシヤの上に釘附けに成つて居る。二人は又街燈の下に立つて居た。

「いえ、イヴン。貴方は自分が人殺しだと何度も一人で仰有つたでせう？」

「何時私がそんな事を言つた？　私は莫斯科に居た……何時私がそんな事を言つた

？」と、イヴンは力なく口籠つた。

「貴方は此二ケ月の間一人で居る時、何度も左樣言ひました」と、アリヨウシヤは徐にはッきりと續けた。「貴方は自ら責めた、人殺しは自分だ、他に人殺しはないと何度も一人で白狀した。併し貴方の仕業ではない。貴方は間違つて居る。貴方は人殺しぢや有りませんよ。解りましたか。貴方ぢや有りませんよ。神樣が左樣貴方に言ふやうに、私をお遣はしに成りました。」

二人とも默つて居た。互に相手の目を見詰めながら、靜に立つて居た。二人とも眞蒼な顏をして居た。不意にイヴンは身體中顫へ出した。そしてアリヨウシヤの肩を掴んだ。

「お前は俺の部室に居たな」と、掠れた聲で囁いた。「お前は夜彼奴が這入つて來た時、俺の部室に居たな。白狀しろ……お前は彼奴を見たな、彼奴から聞いたな？」

「誰のことです、ミチヤですか」と、アリヨウシヤはまご〳〵して訊いた。

「あんな奴のことぢやない」と、イヴンは眞赤になつて叫んだ。「彼奴が俺の處へ來た

のを知つて居るのか。何うしてお前は見たのか。それを言へ！」

「彼奴とは誰です？。誰のことを言つて被仰しやるのか私には解りませんよ」と、アリョウシヤは急に警戒しながら口籠つた。

「うむ、お前は知つて居る……何うして知つて居る……お前の知つて居る筈はないのだが」と言ひかけて、イヴンは急に立停つた。何やら氣が附いたらしい。

「兄さん」と、アリョウシヤは顫へる聲で言つた。私は貴方が私の言葉を信じて下さるだらうと信じたから言つたのですよ。私は只貴方ぢやないと言ふことが言ひたかつた。神樣がそれを貴方に言へと仰有つたのですよ。此後一生貴方から憎まれても構はない。」

「アリョウシヤ」と、彼は冷やかに笑ひながら言つた。私はお前の知つてる通り豫言者だの、神の使だなどゝいふものには堪へられない性分だよ。私は此瞬間から永久にお前との有らゆる關係を絶ちたい。お願ひだから此角で別れて呉れ。」

彼は町の角を曲つて、振向きもせずに確乎(しつかり)歩いて行つた。

「兄さん」と、アリョウシヤは後から喚びかけた。「何んなことでも起つたら、一番先に私を喚んで下さいな。」

イヴンは返辭もしなかつた。アリョウシヤは辻の街燈の下に立つたまゝ、兄の後影が闇の中に消える迄見送つて居た。それからそろ〳〵と宿の方へ歩いて行つた。二人とも今は父の家に住むのを嫌つて、別に宿を取つて居る。殊にイヴンは近頃獨居を好んで宿の人達とも碌に口を利かなく成つた。彼は宿の門に着いて、呼鈴に手を掛けた時、不意に身體中憤怒に顫へるやうな氣がした。で、呼鈴を離して、足早に反對の方角へ戻つて來た。一哩半ばかり歩いて、或小さな木小舍に達した。元隣家に居たマリヤが母親と一緒に住んで居るので、今はスメルヂヤコフも其家に寄寓して居る。イヴンは彼に會ひに行つたのである。

彼が莫斯科から歸つて以來、スメルヂヤコフに會つたのは、これが三度目だ。最初は着いた日に會ひに行つた。それから二週間後に又行つた。が、二度行つた切りで、それ以來一ケ月といふもの丸で會つたことはない。

イヴンは父親が死んでから五日目に歸つたので、葬式にも間に合はなかつた。そんなに遲くなつたのは、アリヨウシヤが何處へ電報を打つて可いか分らないので、カテリイナに一任した。カテリイナは自分の計らひで叔母の家へ打電した。が、イヴンは莫斯科へ着いてから、さつと四日目に其家を訪問したからで有る。勿論電報を見ると、取るものも取り敢ず戻つて來た。彼はアリヨウシヤが町中の噂に反して、ミチヤに疑ひを挾まない、却てスメルヂヤコフを人殺しの犯人だと公言して居るのに驚いた。が、これは兄思ひのアリヨウシヤが最負目だらうと推定した。

所で、イヴンの兄に對する感情は何うかと云ふと、これは心から嫌つて居る。カテリイナのミチヤに對する愛情を見ても腹が立つて堪らない。が、兎に角着いた其日にミチヤに會ひに行つた。二人の會見はいよ〳〵兄の犯罪に對するイヴンの疑惑を確めた。ミチヤは少しも自分を辯護するやうな容子がない。何か言へば矛盾だらけで連絡もない。で、イヴンは其足でスメルヂヤコフに會ひに行つた。

莫斯科からの歸途、彼は絶えずスメルヂヤコフと立つ前に交はした會話のことを考

へて居た。いろんな事が彼に疑惑を起させた。が、判檢事に對しては、一言も其會話のことに言ひ及さなかつた。何事も當時病院に這入つて居たスメルヂヤコフとの會見後に延して置いたので有る。

ヘルチエンスツーベと病院で會つた若い醫者とは、イヴンの熱心な質問に對して、スメルヂヤコフの癲癇の發作は眞個眞正なもので有ると答へた。寧ろ彼がそれ迄にしてあの日スメルヂヤコフが病氣を裝つて居たのではないかと訊ねるのを驚いて居た。彼等は猶患者の命は今やつと危險の域を脱したが、一時は危かつた。多少精神上にも異狀を來して居ると告げた。兎に角イヴンは自分で會つて見やうと決心した。

スメルヂヤコフは寢臺の上に横臥して居た。イヴンを見ると、最初は稍昂奮したやうに見えた。が、それも瞬間で、後は却て其の落着き拂つた容子にイヴンの方で驚かされた。一日見て病氣が重態で有ることは爭はれない。

「何うだ話が出來るか」と、イヴンは訊いた。「疲れはせぬかい。」

「えゝ、出來ますよ」と、スメルヂヤコフは口の中で言つた。「且那は何時お歸りでし

たい？」

「今日着いたばかりだよ。何しろ大變な騒ぎだね。」

スメルヂヤコフは溜息を洩らした。

「何故溜息を洩らすのだ。お前は始めから知つて居たぢやないか」と、イヴンは不意に突込んだ。

「そりや始めから解つては居ましたよ。が、こんな事に成らうとは誰が想ひますものか。」

「こんな事に成るんだつて？　おい、胡麻化すなよ。お前は發作にかゝると豫言したぢやないか。窖の場所まで指定したよ。」

「貴方は裁判官の前ぢや未だ左樣は仰有らないでせうね」と、スメルヂヤコフは落着いて訊き返した。

イヴンは急に怫(むつ)とした。「未だ言はないが、乾度言ふよ。お前は何も彼も俺に白狀しなければ成らんぞ。俺を弄(なぶ)るやうなことを言ふと承知しないが可いか。」

「何うして私が貴方を弄りますものか。私は貴方を神樣のやうに信じて居るんですよ」と、スメルヂヤコフは同じやうに落着いて言つた。

「第一に」と、イヴンは始めた。「癲癇の發作は決して前から解るものでない。それだのにお前は何うして、其日と時間とを前以て俺に告げたのだい。而もお前は窖と迄言つたよ。お前が故と發作を佯つたのでなけりや、そんな事は出來ない筈だ。」

「私は毎日何度も窖へ下りますからね」と、スメルヂヤコフは悠(ゆつ)くり言つた。「私は一年前にも窖で倒れたことが有りました。それに前以て發作の日と時間とを豫言することは出來ないでせうが、人には豫覺といふものも有りますからね。」

「併しお前は其日と時間とを豫言したよ。」

「まア癲癇のことなら、何卒此病院のお醫者さんに訊いて下さい。且那、私はね、前の晩に貴方と門の側で話したことは、醫者と豫審判事との前で、すつかり申立てましたよ。豫審調書に書いて有る筈です。醫者は私が前以て左樣いふ恐怖を抱いて居たから階子からも落ちた、それで發作にも罹つたのだと言つて呉れましたよ。」

「ぢや、お前は證人調べの際にそれを申立てたのだね」と、イヴンは稍たぢ〳〵とした。彼は二人の會話を申立てると言つて脅かして遣る積りで居たのだが、スメルヂヤコフは既に自分から申立てゝ居るらしい。

「えゝ、眞實の事を言ふに恐いことは有りませんよ」と、スメルヂヤコフは確かり言つた。

「ぢや、門の側の會話は一言殘らず申立てたのだね？」

「一言殘らずといふ譯ぢや有りませんよ。」

「で、お前が發作を佯ることが出來る」と、自慢したことは言つたのかい。」

「いえ、それも言ひませんでした。」

「では、お前が私にチエルマシニヤへ行けと言つたのは如何いふ譯だい？」

「貴方が莫斯科へ行つてお仕舞ひに成るのを恐れたからですよ。兎に角チエルマシニヤは近ぅ御座いますからね。」

「嘘を言へ、お前はあの家を去るやうに私に勸めたぢやないか。」

「そりや、貴方がお氣の毒だと思つたからですよ。一つには又自分のことを心配したのです。左樣言つたら、貴方が家に騷動が起るかも知れないと感附いて、阿父さんの側に居て下さるだらうと思ひましたからね。」

「何故はつきり左樣言はなかつたのだい、馬鹿野郎」と、イヴンは又腹を立てた。

「何うしてはつきり言へますものか。只私の心配だけなんですからね。それに貴方も莫斯科へ行かないでチエルアシニヤへ行つて下さいと願つたら、私が貴方を近くに置きたいと思つてることは大抵想像して下さるだらうと思ひましたよ。ねえ、貴方ゝ充分推量して居たのぢや有りませんか。」

「推量したら、家に居た筈だよ。」

「何うして、私は貴方が推量なすつたりやこそ、あんなに急いでお立ちに成つたのだと思ひましたよ。面倒なことを遁れる爲に、遁げて自分の身を安全にする爲に。

「俺をお前のやうな卑怯者だと思つてるのかい。」

「御免なさい。私は貴方を自分のやうな人間だと思ひましたよ。」

「勿論俺は推量して居たさ」と、イヴンも昂奮の餘り言ひ出した。「だが、お前は馬車の側へ來て、『怜悧な人に話をするのは話甲斐が有るものだ』と言つたのを忘れたかい。お前は俺が去るのを悦んで居たに違ひないよ。」

スメルヂャコフは幾度も吐息を漏らした。

「私が悦んだとすりや、貴方が莫斯科へ行かないで、チエルマシニヤへ行くことに同意して下さつたからですよ。兎に角其方が近いのですからね。それに私があゝ言つたのは、貴方を賞めたのぢやない。非難したのですよ。解りましたか。」

「如何いふ譯で非難するのだ？」

「左樣いふ不幸を豫想しながら自分の親を捨てゝお立ちに成るからですよ。私も又あの三千留布を盗んだと、何時疑ひが掛るか知れないぢや有りませんか。」

「馬鹿なことを言ふな」と、イヴンは再び罵つた。俺は只お前が何か惡い事をしはしまいかと心配したのだよ。ドミトリは親爺を殺すかも知れない。が、あの男が金子を盗まうなどとは——其當時は思はなかつた。併しお前は何をするか知れないと思つて

居たよ。お前は自分で發作を詐ることが出來ると言つたぢやないか。何の爲にあんな事を言つたのだい？」

「私は只人が好いからそんな事を言つたのですよ。私もこれ迄故と發作を詐つたことはない。私は貴方に自慢しやうと思つてそんな事を言ひましたが、眞個馬鹿でした。私は當時貴方がそれ程所好で、貴方には何も彼も打明けたものですよ。」

「兄はお前を人殺して盗棒だと言つてるよ。」

「あの人は左樣言ふより外に仕方がないぢや有りませんか」と、スメルヂャコフは齒を鳴らしながら言つた。「併しあれだけ證據が有るのに、誰があの人の言ふことを信じますものか。グリゴリイは戸が開いて居るのを見ました。それぢや最う何とも言へないでせう。で、私が發作を佯るといふことが巧いといふ話ですがね、若し私が本當に貴方の阿父さんを殺さうと計劃んで居たものなら、何うしてそんな事を前以て貴方に言ひますものか。私だつてそんな馬鹿ぢや有りませんよ。で、貴方が判檢事の前にそれをお言ひなさるなら、却て私を辯護して下さるやうなものですよ。何處にそんな明け

つ放しの犯罪者が有りますものか。そんな事位誰にでも解りますからね。」

「左様だな」と、イヴンも此會話を打ち切る積りで立上つた。「俺も、最うお前を疑はないよ。お前を疑つたのは俺が間違つて居た。俺は却てお前が俺の心を安んじて呉れたのを謝するよ。何れ又來るだらうが、今日は歸るよ。左様なら、何か欲しい物はないかい。」

「有難う。皆さんが毎日見舞つて下さいますから、別に欲しい物も有りません。」

「左様なら。だが、俺もお前が發作を伴ることが巧いなぞとは決して言ふまいよ」と、イヴンは何物かに驅られたやうに言つた。

「好く解りました。貴方がそれを仰有らないなら、私も門の側での二人の會話に就ては何にも言ひますまいよ。」

イヴンは出て行つた。が、廊下に添うて十二歩とも行かない間に、不意にスメルヂヤコフの最後の言葉に、何か嘲弄の意味が含まれて居るやうな氣がした。彼は最一度戻らうかとも思つた。が、舌打をしたまゝ出て行つた。

兎に角彼は人殺しをした者がミチヤでスメルヂヤコフでないといふ事實から肩の荷が下りたやうな氣がした。被は此感情の由つて來る源を解剖したくない。何も彼も早く忘れて仕舞ひたいやうな氣がした。だん〳〵様子を聞くにつれて、ミチヤの犯罪は何うも確實らしい。グリゴリイの妻なるマルフア婆さんに訊いても、スメルヂヤコフは夜中壁一重隣の室に寢て居た。尤も其婆さんは好く寢る質だが、夜半に彼が呻くのを何度も聞いたといふので有る。

イヴンは到頭ミチヤに決めて仕舞つた。只一つ可訝しいのは、アリヨウシヤが飽迄ミチヤは犯罪者でない、スメルヂヤコフだと言ひ張ることで有る。殊に可訝しいのは、アリヨウシヤはイヴンの前でミチヤのことを言ひ出すのを避けるらしい。此方から言ひ出せば返辭をするばかりで、一度も自分の方から言ひ出さない。

が、彼は莫斯科から歸つて以來、全然別な事に心を奪はれて居た。即ちカテリイナに對する絶望的な、烈しい戀で有る。彼がアリヨウシヤと別れる時、「私の方ぢや別に氣に懸けて居ない」なぞと言つたのは丸切り嘘だ。彼は狂氣のやうに彼女を愛して居

る。時には餘りの憎さに殺して遣らうと思ふことさへ有つた。尤も、から成るにはいろ〳〵な事情が有つた。尤も、ミチヤの事件以來彼女は唯一の救主としてイヴンの許へ走つた。彼女の感情は傷けられ、侮られ、抑損せられて居る。そこへ前にあれ程自分を愛して呉れた、又自分の方でも其智力を尊敬して居る男が歸つて來たのだから堪らない。が、此女は吾を忘れて戀人に總べてを任せるやうなことは無かつた。一方ではミチヤを捨てたので絶えず苦しんで居る。が、此事に就いては後に。

彼は一時殆どスメルヂヤコフの存在を忘れた。が、二週間後には又妙な考に襲はれ出した。つまり最後に父の家で寢た夜、何故泥棒のやうに階段の上迄忍んで行つて、階下の父の容子に氣をつけたか。何故莫斯科へ着いた時、汽車の中で、「俺は惡黨だ」なぞと叫んだのか。そんな事が氣にかゝる。

或日、彼は途上てアリョウシヤに逢つた時、不意に喚び止めて訊いた。

「お前はドミトリが暴れ込んで、親爺を掴つた時のことを覺えて居るかい。あの後で私が『蝮が蝮を殺すのだ、打捨つて置け』と言つたらう……あの時お前は、私も親

爺の死を願つて居ると思ひはしなかつたかい。」

アリョウシヤは眞蒼に成つて、默つて兄の顏を眺めて居た。

「言はないか」と、イヴンは叫んだ。「眞實のことを言つて呉れ、眞實のことを！」

「御免なさい、私はあの時左樣思ひました」と、アリョウシヤは囁いた。そして、それを和らげるやうな言葉を附け加へなかつた。

「有難う」と言つたまゝ、イヴンはアリョウシヤと別れて去つた。そして、其足で再びスメルヂヤコフを訪れた。

其時のスメルヂヤコフは既に病院を出て、マリヤの木小舍に世話に成つて居た。何でもマリヤと婚約が有つたらしい。病氣は恢復して顏色も好い。殊に鼻眼鏡を掛けて居るのがイヴンの注意を惹いた。そんな事も癪に觸る。

「お前は此前病院で別れる時、私がお前の發作を伴ることが出來るのを默つて居て遣ると言つたら、お前の方でも門の側での會話に就いちや、判檢事の前でも何にも言ふまひと言つたね。何にもとは如何いふ積りだい？　俺を脅かす積りか。俺はお前と徒

黨を組んだ覺えはないぞ。お前は俺がお前を恐がると思つて居るのかい。」

「私はかういふ積りでしたよ」と、スメルヂヤコフは緩(ゆつ)くり言つた。「貴方が前以て今度の親殺しを承知して居ながら、打捨つて置いて旅立たれたとすれば、世間では貴方のお爲に成らぬことを言ふかも知れない。だから、私は役人の前へ出ても何にも言ふまいと言つたのですよ。」

「何だと？　お前は氣でも違つたのか。」

「いや、氣は確で御座いますよ。」

「ぢや、お前は俺が此の人殺しを知つて居たと言ふのか」と、イヴンは拳骨で一つ卓子をどやした。「一體爲にならぬとは如何いふことか。それを言へ！」

スメルヂヤコフは默つて相手の顏をぢろ〳〵眺めて居たが、「貴方も又阿父さんの死を願つて居られたと知れたら、お爲には成りますまい。」

イヴンは飛上つて、力任せに相手の肩を毆つた。スメルヂヤコフはよろ〳〵と壁に倒れ掛つたが、直におい〳〵泣き出した。「病人を毆るのは餘りですよ、餘りですよ。」

「大概にしろ！」と、イヴンはやつと怒りを收めた。「ぢや何だな、お前はあの時俺もドミトリと一緒に親爺を殺す積りだと思つたのだな。」

「だから、あの時私は門の側で貴方とお話をしたのですよ。」

「ぢや、お前が親爺を殺したのだな」と、イヴンは不意に叫んだ。

スメルジヤコフは相手を蔑(さげ)すむやうに微笑した。「私が殺したのではないといふことは貴方も御存じでせう。そんなことを悧巧な人が二度と言ふ必要はないと考へて居ますよ。」

「が、何うして俺のことをそんな風に疑つたのか、それを言へ！　お前に疑はれるやうなことを俺が何したい？」

「そりや貴方に人殺しは出來ない。又仕やうとも思ひなさるまい。が、他人がして呉れたら好いとは思ひなさるでせうよ。」

「が、何故そんな事を思ふのだ。そんな事を思ふ理由が何處に有るのだ？」

「理由つて貴方、遺產を如何するのです」と、スメルヂヤコフは皮肉に、殆ど復讐的

に言つた「貴方の阿父さんが亡くなれば、少なくとも貴方がたは四萬留布づゝ分けられるぢや有りませんか。が、若しフョドールがグルシエンカと結婚したら、あの女も悧巧ですからね、貴方がたには只の三留布だつて遺して置きやしませんよ。處で、阿父さんは何うかといふと、あの女が指一本上げたら、犬のやうに舌を出し〳〵、あの女と一緒に教會へ走つたでせうよ。」

イヴンはやつと怀へて聞いて居た。「で、お前の考へに據れば、俺はドミトリが遺るだらうと宛にして居たと言ふんだね。」

「宛になさる筈ですよ。若しあの人が阿父さんを殺したら、第一遺產の分配に預る權利を失ふでせう。つまり四萬留布づゝ分けるのが、六萬留布に成る。こんな旨い話は有りませんからね。」

『何となと言ふが可い。だが、俺が若し誰かを宛にしたとすれば、お前を宛にしたらうよ。ドミトリぢやない。お前は何んな惡い事でもするだらうからね……俺はあの時の心持を覺えて居るよ。」

「私も貴方が、私を宛にして被坐しやるだらうとは思ひましたよ」と、スメルデヤコフは齒を鳴らした。「で、若し貴方が私を宛にして、而も行つて仕舞はれたとすれば、貴方は私に『お前は勝手に俺の親を殺すが好い』と仰有しやつたと同じ事ですね。」

「ふむ、お前は左樣解釋したんだね？」

「だつて、貴方は莫斯科へ行くと言つて、阿父さんがあれ程チェルマシニヤへ行つて呉れとお頼みに成つたのをきつぱり斷りながら、私か一言言ふと、直に御承諾なすつたぢや有りませんか。左樣して見ると、矢張私から何物かを豫期して被坐したのでせう。」

「いや、そんな事はない！」と、イヴンは齒ぎしりしながら叫んだ。

「左樣ですか。それぢや、貴方は阿父さんの息子として、私を引捕へろか……少なくとも、其場で私の横面に一つお見舞ひ申さなくちや成らない處でしたね。處が、貴方は些ともお怒りに成つた容子は成かつた。そして、私の馬鹿な言葉に從つて出立されたのでせう。私のやうな結論に達する外は無いぢや有りませんか。」

イヴンは兩の拳を握り占めながら、やつと怀へて居た。

「左様さ、お前の横面を毆つて遣らなかつたのは殘念だよ」と、彼は苦笑ひをした。

「が、好く聽いて置け！　俺が今此處でお前を毆り殺さないのは、お前を法廷へ引き摺り出して、化の皮を剝いて遣るためだよ。」

「まアお靜かになすつた方が可いでせうね。誰が貴方の仰有しやることを信じますかい。で、貴方の方で仰有るなら、私の方でも言つて仕舞ひますよ。私も自ら護る必要が有りますからね。」

「俺が未だお前を恐がつて居ると思ふのか。」

「えゝ、法廷ぢや私の言ふことが皆取り上げられずとも、世間は取上げますからね。貴方は面目を潰すでせうよ。」

「詰りそりや『悧巧な人に物を言ふのは言ひ甲斐の有るものだ』と云ふことだね。」

「中りました、貴方も好く物が解るよ。」

イヴンは身體中憤怒に顫へながら小舍を出た。冷たい風が彼の氣力を新たにした。

彼は苛々しながら歩いて居たが、不意に道の眞中に立ち停まつた。「彼奴の言ふことは眞實だ。俺は人殺しを望んで居たのだ。本當に俺はそんな事を望んで居たのか。あゝ俺は何うしてもスメルヂヤコフを殺さずには居られない！　彼奴を殺さなけりや、俺の生き甲斐はない！」

イヴンは宿へ歸らないで　眞直にカテリイナの許を訪ねた。女は彼の容子に驚いた。彼は全然狂氣のやうに見えた。そして、スメルヂヤコフとの會話を一言殘らず繰返した。「若し親爺を殺したのがドミトリでなくて、スメルヂヤコフだとすれば、私は其罪を分たなければ成らない。私が彼奴を左様いふ地位に置いたのだからね。あゝ、彼奴が人殺しだとすりや、勿論私も人殺しだ。」

カテリイナはそれを聞いた時、默つて立停まつて、机の抽斗から一枚の紙を取出して來た。そして、それをイヴンの前に置いた。後にイヴンのアリウヨシヤに向つて、ドミトリが親爺を殺した「逃れない證據」と言つたのは是れで有る。背てカテリイナとグルシエンカとの諍ひの後、アリヨウシヤが僧院へ歸る途中四辻でミチヤと逢つたこ

とが有る。あれからミチヤはグルシエンカの家へ突擊したが、女に會へたか何うかは解らない。兎に角、其晩彼は中央料理店へ押上つて、矢鱈に酒を飲んだ。其時醉拂つて書いたのが此手紙で有る。後で身を亡す種子に成らうとは固より知る筈がない。文句も亂雜で取り止めがない。

「カチヤ　カチヤ！　明日は私も金子が手に入るから、三千留布をお前に返して、おさらばを告げるよ。二人の仲もそれでお仕舞ひにして呉れ。明日私は有らゆる人に頼んで見る。で、若し借りられなかつたら、私は敢て誓ふ、親爺の頭蓋骨を破つて、枕の下の金子を奪つて來る積りだ。其爲に私は西伯利亞へ遣られても、三千留布の金子はお返しするよ。左樣なら、私はお前の前に地に跪づくよ。これ迄の事は宥して下さい。お前の愛よりも、私は西伯利亞へ遣られた方が可い。私は他の女を愛して居るからね。今日はお前も其女をしみ〴〵知つたらうから、迚も私を宥しては呉れまい。私は私の金子を盜んだ奴を殺すんだよ。私も西伯利亞へ遣られたら、再び何人も見ることは有るまい。あの女もだよ。お前ばかりが私を苦しめるんぢやないからね。左樣な

ら。

お前の奴隷にして敵なる

ドミトリ・カラマゾフ

イヴンは此書類を讀んだ時、眞個犯罪者はスメルヂヤコフでなく、ミチヤだと思ひ込んで仕舞つた。スメルヂヤコフでなければ、從てイヴンでもない。斯くて一ケ月過ぎた。彼は全然スメルヂヤコフの追究を放棄した。只二度ばかり彼が病氣て、氣が狂つたといふやうな話を聞いた。

一週間以來イヴン自身も病氣に成つた。彼はカテリイナが莫斯科から招んだ醫者に診て貰つた。が、其頃彼とカテリイナの關係はいよ〴〵切迫して居た。恰度二人の敵が互に相愛して居るやうに見えた。偶にカテリイナの心がミチヤに歸る時など、イヴンは氣が狂はむばかりに見えた。不思議なことには、前に述べたカテリイナとイヴンとアリヨウシヤとの三人が落ち合つた迄といふもの、イヴンは一度も彼女がミナヤの犯罪をあれ程疑問としつて居るのを聞いたことがなかつた。

彼は裁判の十日前にミチヤに會ひに行つて、逃亡の計畫を言ひ出した。永い間考へて居たので有る。一部分はミチヤが罪人に成つたら遺産の額を增すだらうと、スメルヂヤコフに言はれた痛傷から促されたので、ミチヤの逃亡を遂行する爲に三千留布を犧牲にしやうと決心した。が、そればかりが動機ではない。矢張心の中ぢや自分も同じやうに罪人だからといふやうな氣もした。

で、アリヨウシヤと會話を交した後、イヴンは宿の呼鈴に手を掛けたまゝ、急にスメルヂヤコフの許へ行くことにした。不意にカテリイナがアリヨウシヤの前で、「ミチヤが阿父さんを殺したと私に說得したのは貴方でした」と言つたのを想ひ出したので、何だか雷に打たれたやうな氣がした。彼は一度もミチヤが人殺しだとあの女を說得した覺えはない。却てあの女の方で例の書類を出して、彼の犯罪を證據立てたので有る。彼女は自分獨りでスメルヂヤコフに會つて來たと言つた。何時あの女は會ひに行つたのだらう？　スメルヂヤコフは何をあの女に告げたらう。イヴンは腸が煮えるやうな氣がした。「今度こそ彼奴を殺さずには置かない！」

途中寒い風が吹いて、乾いた粉のやうな雪が降り出した。其邊には街燈もない。イヴンは側目も振らずに暗がりを大股に歩いて居た。醉漢が鼻歌を唄ひながらよろ〳〵歩いて來たのを、イヴンは雪の中に突倒したまゝ、後も振向かずに行つて仕舞つた。

廊下でマリヤは燭臺を手に持ちながら、スメルヂヤコフの容態が好くないと告げた。

「寢て被坐しやる程ではないが、何だか容子が變なのですよ。」

「暴れるのかい」と、イヴンは手荒らに訊いた。

「いえ、大變靜かですがね。何卒永くお話しなさらないやうにして下さいまし」と、マリヤは賴んだ。イヴンは戸を開けて這入つた。

スメルヂヤコフは凝乎と相手の顏を見返したまゝ、別段驚いた容子もない。顏は蒼せ、眼は凹んで見違へる程衰へて居た。

「何故默つて私の顏を見て居るのかい。私は只一つの事を訊きに來たのだ。カテリイナさんは何時お前に會ひに來たのか。」

スメルヂヤコフは矢張默つてイヴンの顏を見返して居たが、不意に手を振りながら

横を向いた。「えゝ、來ましたよ。が、貴方に關係はないから打捨つて置いて下さい。」
「いや、打捨つては置かない。あの人は何時來たのだ？」
「だつて、私は忘れて仕舞ひましたよ」と、スメルヂヤコフは再びイヴンの方へ顔を向けながら、憎々し相に相手を見詰めて居たが、「貴方も大變御病氣のやうですね。丸で見違へましたよ。」
「俺の健康なぞ心配して呉れんでも可い。それよりも、俺の訊いたことに返辭をしないか。」
「だが、貴方の眼は何うしてそんなに黄色いのですか。白眼が丸で黄色い。そんなに心配なのですかね」と、彼は蔑すむやうに微笑したが、急にから〳〵と笑ひ出した。
「おい、俺は返辭を聞かない間此處を去らないよ」と、イヴンは苛々しながら叫んだ。
「何うしてそんなに苛々するのです？」と、スメルヂヤコフは相手を見返した。「明日裁判が始まるからですか。貴方の身には別條有りませんよ。自宅へ歸つて、能くお寢みなさい。何にも心配することは有りませんよ。」

「何を言ふんだ。明日俺の心配するやうなことが何處に有る？」と、イヴンは吃驚して叫んだ。が、不意に頭の先から足の爪先までぞつとした。スメルヂヤコフは凝乎とそれを眺めて居た。
「私は貴方が心配することはないと言ふのでうよ。私も貴方のことは何にも言はない。從つて貴方の爲に成らぬやうな證據は一つもない。何うして貴方の手はそんなに顫へて居るのです？　自宅へお歸りなさい、貴方が阿父を殺したのぢや有りませんよ。」
イヴンは飛び上つた。アリョウシヤの言葉を思ひ出したので有る。
「私でないといふことは知つて居るよ」と、彼は口籠つた。
「本當に知つて居ますか」と、スメルヂヤコフは再び彼を捕まへた。
イヴンは飛び上つて、相手の肩を摑んだ。「毒蟲！　何も彼も言つて仕舞へ、何も彼も！」
スメルヂヤコフは少しもたぢろがなかつた。彼は只狂氣のやうな憎しみを含んだ眼にイヴンを見詰めた。やがて、

「ぢや言つて上げますがね。あの人を殺したのは貴方ですよ」と驕いた。

イヴンは何やら考へるやうに椅子に尻餅を突いたが、不意に笑ひ出した。「俺が行つて仕舞つたのを言ふのだね？。お前は此間何と言つたい？」

「此間から何も彼も解つて居る、今も解つて居る筈です。」

「俺の解つて居るのはお前が狂氣だといふことだけだよ。」

「貴方は能く飽きませんね。此處には二人だけ居るのですよ。お互にこんな茶番を續けて居たとて何の役に立ちます？　貴方は未だ何も彼も私に、私の顏に投げ附けやうとするのですか。貴方があの人を殺したのですよ。貴方が眞の人殺しで有る、私は只貴方の機械に、貴方の忠實な下僕に過ぎない。私が遣つたのは只貴方の言葉に從つたのですよ。」

「お前が遣つた？　お前が、本當に殺したのか」と、イヴンは冷たく成つた。

何物かが彼の頭の中でずり落ちるやうな氣がした。彼は身體中がた〳〵と顫へた。今度はスメルヂャコフの方で吃驚して彼を眺めて居た。恐らくはイヴンの恐怖の餘り

に自然なのが彼を動かしたものらしい。

「貴方も眞逆本當に知らなかつたのぢやないでせうね」と、彼は强いて笑ひを裝ひながら、疑はしさうに相手の眼を見詰めて居た。

イヴンは少時物も言ふことが出來なかつた。「お前は夢ぢやないか。幽靈が私の前に居るのぢやないか」と、彼は呟いた。

「私達二人と最一人の外には幽靈なぞ此處に居ませんよ。成程彼は此處に居る。私達の間には第三者が居る。」

「彼とは誰だ？　誰が此處に居る？」と、イヴンは隅々を見廻しながら吃驚して叫んだ。

「第三者とは神自らで有る、天で有る。彼は今私達の側に第三者として立つて居る。そんなに見廻しても駄目ですよ、神樣は貴方の目には見えませんからね。」

「お前が殺したと言ふのは嘘だ！」とイヴンは狂氣のやうに叫んだ。「お前は狂人だ、でなさや俺を調戯つて居るのだ！」

スメルヂヤコフは默つて相手を見詰めて居た。彼は未だイヴンが何も彼も知つて居ながら、何も彼も自分の顏に投げ附けやうとして居るのだと疑つて居るらしい。

「一寸お待ちなさい」と、彼は低い聲で言つた。そして、急に卓子の下から左の足を持ち上げて、洋袴の裾をまくつた。彼は長い靴下とスリツパを穿いて居たが、そろそろと靴下止を外して、靴下の底を探り出した。イヴンは凝乎とそれを眺めて居たが、急にがた〳〵と顏へ出した。

到頭スメルヂヤコフは靴下の底から白い紙を引摺り出して、卓子の上に載せた。

「此處に」と、彼は除かに言つた。

「これは何だ？」と、イヴンは顏へながら答へた。

「好く御覽なさい」と言ひながら、スメルヂヤコフは鄭寧にそれを擴げた。紙包の下には千留布の札の束が三つ有つた。

「あの金子は此處に有る、確に三千留布有る。貴方は勘定するに及ばない。持つて被往しやい」と、スメルヂヤコフは頤で紙幣を指しながら、イヴンに言つた。イヴンの

顏は紙よりも白い。

「脅かして呉れるな……何をするのだ。」

「貴方は本當に今迄知らなかつたのですか」と、スメルヂヤコフは最一度訊いた。

「いや、俺は知らない。俺は只ドミトリだとばかり考へて居た。兄！　兄！　あゝ！」と、彼は不意に兩手で頭を毆つた。「おい、お前は一人で親爺を殺したのか。それとも兄と一緒にか。」

「只貴方と一緒に、貴方の手を借りて殺しただけですよ。ドミトリ・フエドロヰツチは眞個何も知らない。」

「最う可い、最う可い。俺のことは後にして呉れ。何うして俺は顏へるのだらう？　俺は物を言ふことが出來ない。」

「貴方もあの時は大膽でしたがね。好く『有らゆる事が正しい』と仰有しやいましたが、今の態(さま)は何うです」と、スメルヂヤコフはが相手の容子に眼を睜りながら呟いた。

「何うです、レモナードでも差上げませうか。」

「いや、レモナードは要らない」と、イヴンは言つた。「それよりも、何うしてそんな事をしたのか話して呉れよ。」

「何うしてしたかと言つて」と、スメルヂヤコフは溜息を吐いた。「只貴方の言葉に從つて、當り前に遣つ附けたのですね。」

「俺のことは後で好い」と、イヴンは又口を挾んだ。「只お前の遣つ附けた顚末を話して呉れよ。何も彼もだよ。可いかい、委しいことをだよ。」

「貴方が行つてお仕舞ひなすつた、其後に私は窖に落ちた。」

「眞實の發作か、それとも佯つたのか。」

「勿論佯つたのですよ。私は除かに障子の下まで降りて、其處に倒れたまゝ、靴を上げて藻掻き出したのですよ。」

「で、何かい。お前は其後でも、病院でも、ずつと佯り通したのだね？」

「いや、そんな事はない。明くる日の朝、私は本當に發作に襲はれたのですよ。二日間といふもの全然覺えが有りませんでした。」

「宜しい、宜しい。其先を續けて呉れ。」

「私は病床へ連れて行かれた。そして、靜かに唸りながら、ドミトリが遣つて來るのを待つて居ました。えゝ、阿父さんの家へ遣つて來るのですよ。私が居なくなりや、あの人は屹度石垣を乘り越えて、何か遣り出すに違ひない。」

「で、若しあの兄が來なかつたなら？」

「其時やア何にも起らずに濟んだのですよ。私は一人ぢや何にもしない積りでしたからね。」

「宜しい、宜しい。それから何うだい。」

「私はあの人が阿父さんを殺すだらうと思つて居ましたよ。五六日前から、左様するやうにあの人に仕向けて置いたのですからね。」

「一寸待て」と、イヴンは又相手を遮ぎつた。「若し兄が親爺を殺して金子を持つて行つて仕舞つたら、お前は何うするのだい。そんなこと位お前に解つて居さうなものだね。」

「だつて、あの人には金子の在所が分りませんよ。私は其金が枕の下へ入れて有るやうにあの人に云つて置きましたがね、それは嘘です。實は箱の中に有つたのでした。其上私はフヨドールに、其處は危いからと言つて、佛壇の後ろへ隱すやうに勸めたのですよ。で、ドミトリが遣つて來て親爺を殺したら、私は其後から忍び込んで、そつくり其金子を頂戴した上、罪はドミトリに塗り附けやうと考へたのですね。」

「が、若し兄が親爺を毆つただけで殺さなかつたら、如何するのだい？」

「其時やア勿論仕方が有りませんよ。が、阿父さんが氣絶する迄毆つたとしませう。左樣すりや、私は矢張其金子を盜んで、後でドミトリの仕業だといふやうにフヨドールを說得しますよ。」

「待つて呉れ……私は頭がこんぐらかつて來た。ぢや、要するにドミトリが親爺を殺したので、お前は只金子を取つただけぢやないのか。」

「いや、あの人は殺しませんでした。尤も、あの人が殺したのだと言つても可いかも知れない。が、私は今貴方に嘘を吐きたくないのですよ。私は今夜貴方に面と向つて、

貴方が唯一の眞の人殺しで有る、私は手に掛けたけれども眞の人殺しではないといふことを說明したいのですからね。」

「何、何、俺が人殺しだ？」と、イヴンは吾を忘れて叫んだ。「お前は未だチエルマシニヤのことを言ふのだね。だが待てよ、私がチエルマシニヤへ行つたのを、お前が私の同意だと取つたとして、お前は何の爲にそんな同意を必要としたのだい？」

「貴方の同意を得て置けば、私に疑ひがかゝつた時、貴方が保護して下さいますからね。それに、私のお蔭で貴方が阿父さんの遺產を相續出來たとすれば、貴方も一生私の面倒を見て下さいませうからね。」

「おう！　お前はそれぢや一生私を苦しめやうと云ふのだね」と、イヴンは溜息した。

「が、可い。それよりも、其晩のことを話して呉れよ。」

「別に言ふことは有りませんよ。私は寢て居ながらグリゴリイが起きて出て行くのを聞いて居ました。爺さんは不意に叫び聲を上げた、其後は又森とした。私は最う堪えられなく成つた。到頭起きて出て行つた。庭に面した窓が明いてるのを見て、木蔭に忍

びながら、あの人は未だ生きてるか何うか見定めやうとした。旦那の動く音や溜息が聞えるのですね。あゝ、未だ生きて居る。私はえゝ糞と思つた。で、窓の處へ顔を出して、『私てすよ』と言つて見た。『彼奴は此處へ來た。彼奴は遁げた』と、私に言ふのですね。『彼奴はグリゴリイを殺した！』『何處で？』と、私は訊いた。彼處の隅だよと旦那は指差した。私は庭の隅へ行つて見たが、グリゴリイが氣を失つて倒れて居る。して見ると、ドミトリは此處へ來て居たに違ひない。私は一思ひに遣つ附けて仕舞はうと決心した。で、又窓の側へ戻つて、『女が來て居ますよ、グルシェンカが來て這入りたがつて居ますよ』と囁いた。旦那は子供のやうに悅んで、『何處に居る？』と言ふのですよ。彼處に居ますよ、戸を開けてお上げなさい』と言つたが、何ういふものか恐がつて戸を開けない。が、妙なものですね。私の言葉は信じないが、私が惡の處を五つ叩いて、例の合圖をすると、直ぐに戸を開けたのですよ。私は其處から這入つて行つた。が、旦那は私を押し隔てるやうにして、『女は何處に居る、女は何處に居る？』と喚んだ。『早く女を連れて來て呉れないか。』『あの女は怖がつて草叢に隱れて居るのですよ。御自分で喚んで御覽なさい。』旦那は直ぐに窓の處へ走つて行つて、『グルシェンカ、グルシエンカ』と喚んだ。『お前は其處に居るのかい。』旦那の身體は半分窓の外へ乘出して居る。私は卓子の上に有つた鐵の卦算を手に握つて、其角で旦那の頭の頂上を毆つた。旦那は音も立てなかつた。只ぐにやりと床に倒れた。私は二三度頭蓋骨の上に打ち下ろした。それから四邊を見廻したが、私の衣服の上には一滴の血も掛つて居ない。で、其卦算を紙で拭つて、佛壇の後ろから金子の封筒を取り出した。そして、其封筒と赤い絹紐とを破つて捨てた。私はそれから庭へ廻つて、かね〳〵見定めて置いた林檎の木の空洞に金子を隱した。其金子は私が病院を出る迄、十四日の間其處に有りましたよ。それから私は又病床へ戻つて寢ましたが、只グリコリイが正氣に返つて呉れゝば可いと、そればかり思つて居ました。左樣したらドミトリが來て、親爺を殺して金子を奪つて行つたといふ證人に成つて呉れますからね。で、私は出來るだけ早くマルフア婆さんの眼を覺さうと思つて、一生懸命に唸り出した。到頭お婆さんも起上つたが、グリコリイが居ないのを見て、又庭へ走り出した。私は婆さんが庭でき

やア〳〵叫んで居るのを聞いて、やつと安心しましたよ。」

彼は言葉を切つた。イヴンは始終眼を放たずに、死んだやうに默つて聽いて居た。

「だが、待てよ」と、彼は考へながら言つた。あの戸は如何したのだ？　若し親爺がお前にだけ戸を開けたとすれば、何うしてグリコリイが其前に戸が開いて居るのを見たのだい？」

「あの戸ですか。グリゴリイが戸が開いて居るのを見たとすりや、それは只あの爺さんの想像ですよ」と、スメルヂヤコフは薄笑ひをしながら言つた。あの爺さんも頑固な頓馬ですからね。一旦見たと言ひ出したら後へは引きませんよ。」

「だがね」と、イヴンは何やら摑まうとしては又迷ひながら言つた。「私は未だいろ〳〵な質問が有るのだが忘れて仕舞つた。左樣だ、これ一つだけは言つて呉れ。何うしてお前は封筒を破つて床の上に捨てゝ置いたのだい？　何だかお前は先つき意味有り相に言つたよ。」

「そりや理由が有りますよ。前から能く其封筒に金が這入つて居るのを知つて居る人

間、例へば私ですがね、左樣いふ人間が人殺しをしたとすれば、あの際わざ〳〵封筒を引裂いて見るやうなことは萬々ない。慥に札が這入つて居るのを見て知つて居ますからね。が、ドミチリの場合は左樣でない。封筒のことも只聞いて知つて居るばかりですからね。それを見附けたら、屹度其場で引裂いて改めて見たに違ひない。そして其紙片が後の證據に成ることも忘れて、其儘遁げ出したでせうよ。何となればあの人も常習的窃盗では有りませんからね。私が調べられた時、それとなく此事を喚はして遣つたら、あの檢事が涎を垂らして悦んで居ましたよ。」

「が、お前も其場でそんな事迄考へた譯ぢや有るまいね」と、イヴンは驚いて相手の顏を見詰めて居た。

「眞逆！　あんな場合に誰だつてそんな事が出來ますものか、皆前以て考へて置いたのですよ。」

「成程お前は俺が考へて居たよりは餘程悧巧だね」と、イヴンは思はず叫んだ。「が、好く聽いて置け、今俺がお前を殺さないのは、只明日裁判でお前に返辭をさせたいか

らだよ。成程、俺にも罪が有らう、俺も實際親爺の死を願つて居たかも知れない。が、構はない、俺は明日裁判で、俺自身に反對して見せるよ。俺は決心した。何も彼も、何も彼も言つて仕舞ふよ。二人は一緒に法廷へ出るんだぞ。假令お前が何んな事を申立てやうとも、俺は最早驚かない。俺は自身でそれを確證するよ。が、お前も白狀しなけりや成らんぞ！」

「貴方は病氣ですよ。何うも貴方の眼は黃色い」と、スメルヂヤコフは皮肉でも何でもなく、寧ろ同情を持つて言つた。

「二人は一緒に出るのだ」と、イヴンは繰り返した。「で、お前が出なけりや、俺一人で出るよ。」

「そんな事は貴方には出來ないでせうよ」と、スメルヂヤコフは考へながら言つた。

「お前は俺といふ人間が解らないのだ。」

「ですがね、そんな事をしても役に立ちませんよ。私が一言、貴方にそんな話をした覺えはない、加之、貴方は病氣で、兄を助けるためにそんな事を拵へたのだと申立てたら、誰が貴方の言ふことを信じませう？　一つだつて貴方の言ふことに證據がないぢや有りませんか。」

「默れ、お前は今俺を說伏しやうとして、此の金子を見せたぢやないか。」

スメルヂヤコフは紙幣を取上げてイヴンの前へ押し遣つた。「何卒持つてお歸り下さい。」

「勿論持つて行くよ」と、イヴンは裸の儘それを衣囊へ入れた。「明日俺はこれを法廷へ差出すのだぞ。」

「駄目ですよ。貴方は只自分の金庫から出して持つて來たのだと思はれるばかりで、誰も信じないでせうからね。」

イヴンは椅子から立上つた。「繰り返して言つて置くが、今お前を殺さないのは、明日お前を必要とするからだぞ。忘れるな！」

「殺すなら今お殺しなさい。みれが出來ないやうなら」と、スメルヂヤコフは冷やかに笑ひながら言つた。「貴方には何にも出來ませんよ。」

「明日迄だ」と、イヴンは叫びながら出て行つた。

「一寸お待ちなさい……最う一度其紙幣を見せて下さい。」

イヴンは紙幣を取り出して、相手にそれを見せた。スメルヂヤコフは十秒間ばかりそれを眺めて居たが、手を振つて、「宜しい、最うお歸りなさい。」

戸外はなほ雪吹雪が荒れて居た。イヴンの心には一種悦びのやうな或物が生じた。彼は束縛されざる決心を意識して居た。最近あれ程迄に彼を苦しめた心の動搖も終局を告げるだらう。彼は肩の荷が下りたやうな氣がした。宿の門へ着いた時、不意に立ち停まつて、寧ろこれから直に行つて、何も彼も檢事に告げた方が好くはないかと考へて見た。「が、何も彼も明日のことだ！」

彼は宿の婆さんが持つて來た紅茶にも手を觸れないで、がつかりしたやうに兩手で頭を支へたまゝ、何時迄も靜乎と坐つて居た。彼の眼は釘附けにされたやうに一ト所ばかり見詰めて居た。誰やら部屋の隅に坐つて居るらしい。尤も彼が此部屋へ戻つて來た時には誰も居なかつたから、何うして這入つて來たのか解らない。其男は長く眞

黑な濃い髪の毛をして、身には二三年前に流行つた脊廣を着けて居る。一見したところ奴隷制度の時代に榮えた露西亞の地主が、其後落魄して、彼方此方親戚や友人の間を泊つて歩くものらしい。

イヴンは怫(おつ)として默つて居たが、此方から談話を始めやうとは思はない。客も主人の氣を兼ねて、故と默つて居るやうに見えた。が、急に顏を上げて、「あの何でせうか。」と言ひ出した。「貴方はスメルヂヤコフの許へカテリイナのことを訊きに被往した。が、何一つ聞き出さないでお戻りに成つたやうですね。多分お忘れにでも……」

「あゝ、忘れたのだよ」と、イヴンの顏は暗く成つた。「が、そんな事は構はない。何うせ明日迄だ。時にお前は何と思つて、そんな事に干渉するのだい。私はお前に促されて彼處へ行つたのだとは、何うしても信じないよ。」

「ぢや、信じなさらないが可い」と、客はにや〳〵笑ひながら言つた。「何も貴方の意志に背いて信じるには及びませんよ。それに證據といふものは、特に物質的證據といふものは信ずる上には何の役にも立たない。トーマスは基督の昇天を見たから信じた

のではない、信じて居たから見たのですからね。」

「おい」と、イヴンは不意に卓子から立上つた。「私は時としてお前を見ない、お前の聲さへ聞かない。が、如何いふものかお前の饒舌ることは俺に解る。つまりそれは俺だからだ。俺が饒舌つて居るからだ。只先達ては本當にお前を見たのか、夢に見ただけなのか、何うも俺には解らない。俺が手拭(タヲル)を濡らして顏を洗つたら、恐らくお前は風の中へ消えて仕舞ふだらうよ。」

イヴンは言つた通りに部屋の隅から手拭を取つて來て、水に濡らして顏に乘せながら、ぐる〳〵部屋の中を廻り出した。

「貴方が左樣内輪同志のやうに私を遇して下さるのは、眞個有り難いのですよ」と、客は言つた。

「馬鹿な」と、イヴンは笑つた。「俺がお前に遠慮するものと思つてるのかい。」

「ですが、だん〳〵お話を聞いて居ると、貴方は先達てのやうに私を貴方の空想だと言つて仕舞はないで、實在のものゝやうに取扱つて下さるから、自分ながら驚いて居

ますよ。」

「俺は一分間だつてお前を實在のものと思つたことはない」と、イヴンは一種の憎惡に驅られながら叫んだ。「お前は一つの嘘だよ、私の病氣だよ、幻影だよ。只殘念だが、何うしてお前を滅して可いか俺には解らない。それだから俺は一時苦しんで居るんだよ。お前は俺の幻視(ヘルシネーション)だよ。俺自身の肉體化だよ。只お前は俺の一面だ……俺の思想の、俺の感情の一面だ。而も一番汚ない、一番間抜けな一面だよ。此點から見て、暇さへ有りや、お前にも多少の興味が有るんだよ。」

「御免なさい。ですが、貴方は今街燈の下でアリヨウシャと話をして被坐した時、『彼奴を見たな、彼奴を聞いたな。』と仰有しやつたでせうが、あれは私のことでせう？で、あの時は貴方も私を實在のものとお考へなすつたのですね」と、客はから〳〵と高笑ひした。

「あゝ、あれは俺も氣力の弱つた時だ。が、決して俺はお前を信じないよ。」

「ですが、貴方は何うして今あんなにアリヨウシャをお虐(いぢ)めになつたのですか。」

「アリョウシヤのことを言ふな。馬鹿野郎奴」と、イヴンは笑ひ出した。

「今日は叱言も出るが、又お笑ひなさるね。兎に角、先達てよりは大分御機嫌が宜しい。其理由(わけ)も知つて居ますよ。何でせう、貴方があの非常な大決心を……」

「俺の決心を彼是言ふな。」

「解りました、解りました。貴方が兄さんを辯護する爲に一身を犧牲になさるのは、眞個見上げたお心掛けですよ。」

「默れ、默らぬと蹴飛ばすぞ。」

「や、有難う。いよ〳〵私の望みも叶いさうですよ。貴方が私をお蹴りに成りや、つまり私の實在を信じて被坐しやることに成る。誰も幽靈を蹴るものは有りませんからね。戯談は別として、最少しお手和らかに願へませんか。馬鹿野郎は餘りひどい！」

「お前を罵るのは、俺自ら罵るのだよ」と、イヴンは又笑つた。お前は俺自身だからね。只顏が違ふだけの俺自身だからね。お前は只俺の考へて居ることを言ふんだよ……新しいことは何一つ言へないんだよ。」

「私の考へ方が貴方に似て居るとすりや、それだけ信用が有る譯ですね。」

「お前は只俺の一番惡い、一番頓馬な思想を選んで口にするのだよ。お前は馬鹿だ、馬鹿だ。俺は何うして可いか解らない」と、イヴンは齒噛みをしながら言つた。

「まア、そんなに仰有るものでもない」と、客は相手を反らすやうに言つた。「私も貧乏だが、世間ぢや私のことを墮落した天使と言つて居ますよ。天使だか何うだか私には解りませんがね。何れ餘り永いことになるから忘れて仕舞つたのでせう。で、私は夢みながら地上を彷つて居る。それに、私も此處へ來てから大分迷信家に成りましたよ。又、近頃錢湯へ行くやうに成りましたがね。なに、坊さんや商人と一處に湯に浸(つか)つて居るのですよ。私の夢みて居るのは、何うかしてあの十八貫目も有るやうな商人の主婦(かみ)さんの體内に宿つて、永久に其處から出たくない。そして、其女の信ずるものは何でも信ずるやうに成りたいと言ふのですよ。」

「馬鹿奴」と、イヴンは呶鳴つた。

「何うです、私は貴方の幻視(ハルシネーション)だが、貴方の頭へ一度も這入つたことのないことも言ひ

ますよ。私だつて貴方の考へを繰り返すだけぢやない。だが、私は矢張貴方の夢に、魘はれに過ぎませんよ。」

「嘘を吐け、お前の目的は、私を離れて、お前が存在して居ることを私に說得しやうと言ふのだ。それだのに、お前は又私の夢だと言ふのだね。」

「まアそれはそれとして、私は昨夜風邪を引きましたよ。只此處ではない、彼處で。」

「彼處とは何處だ？」と、イヴンは殆んど絕望したやうに叫んだ。そして、再び長椅子の上に腰掛けながら兩手でしつかり頭を抑へた。

「ねえ、最一度言ひますが、私はこんな星の上の生活を罷めて、位も名譽も捨てゝ、十〻貫目も有る商人の主婦（かみ）さんの魂に改造せられたいのですね。」

「ぢや、お前は神を信じないのだね？」と、イヴンは不意に顏を上げて訊いた。

「何と言つて可いか解りませんね。若し貴方が眞面目なら……」

「神は有るか無いか」と、イヴンは相手に迫つて言つた。

「あゝ、貴方も眞面目なのですね」と、客も坐り直した。「それぢや、私も改めて言ひ

ますがね。私は豫々或若い露西亞の紳士を知つて居るのですよ。若い思想家で、文學と藝術の愛好者で、『大審判官』と題する詩の作者ですよ。」

「『大審判官』のことなど言つて呉れるな」と、イヴンは顏を赫らめながら叫んだ。

「まアそんなに仰有るものでない、私は生活に對する熱望に顫へて居る其青年の夢が好きなんですよ。此春貴方は此土地へ來やうと思ひ附いた時、こんな事を考へて居ましたね。『世には有らゆるものを滅して、食人肉主義（カンニバリスム）を俟つて、始めて新らしい時代が來ると信じて居る新人が有る。馬鹿な奴等だ。俺に言はせれば、何物も滅ぼすには及ばない。只人間の中の神の觀念を滅ぼして、それから仕事に取り掛れば可い。人類が總べて神を否定するや否や——俺は左樣いふ時代が早晩來るものと信じて居る——宇宙の古い概念は食人肉主義（カンニバリスム）を俟たずして自然に滅びるのだ。加之、古い道德も滅びて、有らゆるものが新らしく始まるのだ。人類は生活の提供する有らゆるものを搖取して現世の快樂と幸福とに醉ふことが出來るのだ。人間は神聖な巨人（ヂタン）の魂に高められて、そこに人神が出現するのだ。其意志と科學とに依つて無限に自然を征服して、最早天

國の悦びと言ふやうな古い夢の必要もなく成る。各人己れの不死でないことを充分承知しながら、神のやうに高慢な、朗らかな心持で死を甘受するだらう。彼の自尊心は人生の須臾なることを悔ゆるの無益なるを彼に敎へて、彼は報酬を要求せずして同胞を愛するに至るで有らう。愛は人生の瞬間だけで充分で有る。其の須臾にして消ゆるといふ自覺其者が、今では墓の彼方の永遠の愛といふ夢の中に散慢に成つて居る愛の火の力を強くするで有らう』と。なか〳〵立派なものですね。」

イヴンは眼を床に落したまゝ、耳を兩手で抑へて聽いて居たが、身體中ぶる〳〵と顫へ出した。其聲は續いた。

「で、問題は此處に有る。我が若い詩作家はそんな時代が何時來るだらうと考へた。それが來さへすれば、有らゆることが決定される。人道も永遠に處を得る。が、人間の愚痴の爲に少なくとも一千年位そんな時代は來ない。で、此眞理を認めた者は、今でも新しい主義の上に自分の一生を合法的に處理することが出來る。此意味に於て、其人に取つては『有らゆる事が正しい』ので有る。加之、左樣いふ時代が永久に來ないものとすれば、世に神も靈の不滅もない以上、新人は此世に只一人でも人神と成ることが出來る。又一度其の新しい地位に置かれた以上、其人は古い奴隸人の古い道德の覊束なぞ悉く一蹴し去つても構はない譯だ。神に取つて法律はない。神の立つ所即ち神聖で有る。『有らゆる事が正しい。』これが結論ですよ。却々立派なものですね。が、貴方も騙詐(かたり)でもしやうと思ひながら、何うしてそれに對する道德上の是認を要求せられるのか。いや、それが近代の露西亞人全體の傾向ですよ。近代人といふものは道德上の是認なしでは騙詐さへ出來ない。それ程眞理を愛して居るのですよ。」

客は自分ながら、自分の辯說に醉ふて饒舌り續けた。だん〳〵聲が高くなる。が、イヴンは不意に卓子の上の洋盃を掴んで相手に投げ付けた。

「そりや亂暴ですよ」と叫ひながら、客は立ち上つて着物の雫を拂ひ落した。「貴方はルーテルのインキ壺を想ひ出したのだね？」

大きな戸を敲く音が不意に窓の處で聞えた。イヴンは長椅子から飛び上つた。

「聞えましたか。早く開けてお上げなさい」と、客は叫んだ。「貴方の弟御は吃驚する

やうな面白い報導を持つて來たのですよ。」

「默れ、俺にもアリヨウシヤだといふことは解つて居るのだ。俺も彼奴が來るやうな氣がして居た。勿論來る以上空手ぢや來ないのだよ。」

「早く開けてお上げなさい。戸外は雪吹雪ですよ。」

戸を敲く音は續いた。イヴンは窓の處へ駈け寄らうと思つたが、如何いふものか足も手も械が嵌つて居るやうな氣がした。「何うかして其鎖を千切らうと思つても切れない。戸を敲く音はだん〳〵高く成る。到頭鎖が千切れて、イヴンは長椅子から飛び上つた。彼は息を切らしながら四邊を見廻した。蠟燭は二本ながら燃え盡して、客に投げ附けたと思つた洋盃はちやんと卓子の上に立つて居る。向側の長椅子の上には誰も居ない。窓の戸を敲く音は矢張續いて居る。が、夢の中で思つた程大きな音ではない。こと〳〵と内密で敲いて居る。

「いや、夢ぢやない。斷じて夢ぢやない！」と、イヴンは叫んだ。そして窓の處へ駈け寄りながら、其戸を開けた。

「アリヨウシヤ、俺は來るなと言つて置いたぢやないか」と、彼は烈しく叫んだ。「さ、何が用か、二言で言へ、いゝか、二言だぞ。」

「一時間前にスメルヂヤコフが首を縊りました」と、アリヨウシヤは庭から答へた。

「階段から廻つて來い」と、イヴンは戸を開けに行つた。

アリヨウシヤは這入つて來て、一時間程前にマリヤが自分の部屋へ飛び込んで、スメルヂヤコフが自殺したと告げたと語つた。彼女が湯沸器（サモワール）を明けに行くと、彼が壁の釘にぶら下つて居たといふので有る。女は狂氣のやうに成つて、がた〳〵と顫へて居た。アリヨウシヤが小舍へ行つた時、スメルヂヤコフは未だぶら下つたまゝで居た。卓子の上に、一枚の紙片が乘つて居た。「吾は何人にも迷惑を掛けない爲に、自分の意志で自殺をする」と書いて有るばかりで有つたさうな。アリヨウシヤは警察へ駈け着けて、其處から直にイヴンの許へ來たと云ふのだが、話をしながら相手の顏から眼を離すことが出來なかつた。

「兄さん！」と、彼は不意に叫んだ。貴方は大變お惡いのですね。私の言ふことも解

らないのでせう?」

「能く來て呉れた」と、イヴンは相手の言葉も耳に掛けないで、何やら考へながら言つた。「私は彼奴が首を縊つたのを知つて居るよ。」

「何處から聞いたのです?」

「私は知らない。いや、彼奴が言つたのだ。今彼奴が左樣言つたよ。」

イヴンは部屋の眞中に立つて居た。何やら未だ考へて居るらしい。

「彼奴とは誰です」と、アリョウシャは思はず四邊を見廻しながら訊いた。

「彼奴は今逝げ出したよ」と、イヴンは頭を上げて、靜かに笑つた。

「兄さん、下にお坐りなさい」と、アリョウシャはどきりとして言つた。「何卒此の長椅子に坐つて下さい。貴方は何うも容子が變ですよ。あゝ、これを枕にして、宜しい。手拭を濡らして來て上げませうか。」

「いや、いや、いや!」と、イヴンは不意に叫んだ。「斷じて夢ぢやない。彼奴は此處に腰掛けて居た、其の長椅子に……彼奴は怖ろしい馬鹿だ、アリョウシャ、怖ろしい馬鹿だよ。」イヴンは又立上つて、部屋の中をぐる〳〵廻り出した。

「誰が馬鹿です? 兄さん、誰のことを言つてるのですよ」と、アリョウシャは心配さうに訊いた。

「惡魔だよ。彼奴は俺の處へ訪ねて來た。二度も三度も來た。なに、彼奴は只の惡魔だよ。迚も魔王(サタン)ぢやない、魔王(サタン)なものか。」

アリョウシヤは再びイヴンを長椅子に坐らせて、次に濡手拭を頭に載せた。自分も其側に腰かけた。

「今お前はリザのことを何とか言つたね」と、イヴンは再び始めた。「私はリザが所好だ。あの子のことを惡く言つたが、あれは嘘だよ。私はあの子が所好だ。私は明日のカチャが氣に成る。何よりもあの女が怖ろしいよ。あの女は私を拋り出して、足の下に踏み躙るだらうよ。あの女は私があの女に對する嫉妬からミチヤを陷入れるものと思つて居るからね。左樣だ、あの女は左樣思つて居るのだ。が、左樣ぢやない。明日は十字架だ。が、絞首臺ぢやないぞ。私は首は縊らない。私には自殺は出來ないからね。

何うして私はスメルヂヤコフが自殺したのを知つて居たらう？　あゝ、彼奴が左樣言つたのだ。」

「誰が本當に此處に居たのですか」と、アリヨウシヤは訊いた。

「左樣だ、隅の其長椅子の上に居たのだ。お前が彼奴を追出したのだよ。お前が來ると、彼奴は消えて仕舞つた。アリヨウシヤ、彼奴は俺自身だよ。彼奴は俺を子供のやうに飜弄した。が、彼奴が俺に就いて言つたことにや、大分眞理が有るよ。俺が自分にさへ得言はないことを言つて呉れたよ。ねえ、アリヨウシヤ。」と、イヴンは眞面目に附け加へた。「私は心から彼奴が彼奴で、俺でなけりや可いと思ふよ。」

「貴方ば精神を遣ひ過ぎたのですよ。」

「彼奴は俺を調戯つた。それが却々悧巧なんだよ。『良心？　良心とは何だ？　何故私はそんなものゝ爲に苦しむのだ？習慣の爲だ。七千年以來人類に通有な習慣の爲だ。そんなものは捨てゝ仕舞へ。左樣すれば私達が神になるのだよ。』彼奴がこんな事を言ふのだね。」

「何うしても貴方だ」と、アリヨウシヤは叫ばずに居られなかつた。「兎に角そんな奴のことは氣にお掛けなさるな。早く忘れてお仕舞ひなさい。」

「ねえ、彼奴は意地が惡いのだよ。彼奴は俺のことを笑ふのだよ」と、イヴンは身顫ひしながら言つた。「彼奴は俺の目の前でこんな嘘を言ふのだ、『あゝ、貴方は勇敢な行爲を演じやうと云ふのですね。貴方が阿父さんを殺した、下男は貴方の指金で殺したのだと白狀するのでせう？』と。」

「兄さん」と、アリヨウシヤは口を挾んだ。「確かりなさい。貴方が殺したのぢや有りませんよ。」

「彼奴は左樣言ふのだよ。『貴方は勇敢な道德的行爲を演じやうと云ふのですね。併し貴方は道德といふものを信じない。貴方が苦しんだり怒つたりして居るのはそれだからですよ。それだから貴方が復讐的に成つて居るのですよ。』彼奴がこんな事を言ふのだよ。」

「貴方が左樣言ふのだ、彼奴が言ふのぢやない」と、アリヨウシヤは悲しげに言つた。

「貴方が病氣だから、そんなことを言ふのですよ。」

「いや、彼奴はちゃんと知つて居るのだ。『貴方は自尊心からそんな眞似をするのだ』と、彼奴が言ふのだ。『貴方は立ち上つて、私が殺しましたと言ふのでせう。貴方は他人から「あの人は罪人で人殺しだが、立派な精神ぢやないか。あの人は兄を救はうと思つて白狀したのだよ」と讃められたいのでせう。』アリヨウシヤ、そりやア嘘だ！」と、イヴンは不意に眼を光らして叫んだ。「俺は斷じて下らない彼奴に讃められたくはない。そりや嘘だ！　だから、彼奴の面に洋盃を投げ附けて遣つたんだよ。」

「兄さん、氣を鎭めて下さい」と、アリヨウシヤは賴むやうに言つた。

「彼奴は酷い奴だ。」と、イヴンは耳にも掛けないで續けた。「『で、貴方が自尊心から行くのだとして、貴方は未だスメルヂヤコフだけ罪に落ちて、ミチヤは釋され、貴方は只道德上の苛責を受けるだけで濟むものと思つて居るのでせう』と、彼奴が笑ふんだよ。『併しスメルヂヤコフが首を縊つて死んだ以上、誰が貴方の言ふことを信じますか。でも、矢張貴方は行く、行くと決心して居る。一體何の爲に行くのです？』アリ

ヨウシヤ、俺は堪らないよ。こんな事を言はれては堪らないよ。」

「兄さん。」と、アリヨウシヤの心は怖ろしさに顫へたが、猶イヴンを正氣に戻さうとして、「私の來る前に、何うして其男がスメルヂヤコフの罪を知つたのです。誰も知らない、又それを知るだけの時間もないぢや有りませんか。」

「でも、彼奴が言つたのだよ」と、イヴンは斷乎として言つた。「『貴方の犧牲が何の役にも立たないのに、何うしてそんな心配をするのです？　貴方は何の爲に行くか、自分でも解らないから行くのでせう。貴方は行き得ないから行くのでせう。何故貴方は行き得ないか。自分で考へて御覽なさい。其處に貴方に取つて一つの謎が有る！』かう言つて、彼奴は出て行つて仕舞つたよ。カチヤは俺を輕蔑して居る。そりや一ケ月も前から解つて居るのだ。リザも今に俺を輕蔑するやうに成るだらう。『貴方は讃められたさに行く。』それは眞赤な嘘だ！　アリヨウシヤ、お前も俺を輕蔑して居るだらう。俺はお前が憎い！　あの獸物も憎い！　俺はあんな獸物を救はうとは思はない。が、明日は行くんだ。彼奴等の前に立つて、彼奴等の顏に唾を吐き掛けて遣るんだ。」

彼は狂氣のやうに飛上つて、又室中をぐる〳〵廻り出した。何だか夢の中を歩いて居るやうに見える。アリヨウシヤは醫者の許へ駈附けやうかとも思つた。が、兄を一人では殘して置かれない。右つ左つする中に、イヴンは全然意識を失つたらしい。絶えず連絡のないことを饒舌り續けて居たが、やがてそれも止んだ。アリヨウシヤは兎に角寢床へ連れて行つて寢させた。そして二時間餘りも側に坐つて居た。病人は身動きもせずに、すや〳〵と眠つて居る。アリヨウシヤも長椅子の上に横に成つた。

彼は眠る前に、ミチヤとイヴンの爲に祈つた。イヴンが病氣の譯もだん〳〵解りかけた。尊大な決心の苦痛。切實な良心！「左樣だ。」と、アリヨウシヤは頭を枕に乘せながら考へた。「スメルヂヤコフが死んだら、誰もイヴンの言葉を信ずる者は有るまい。が、兄さんは矢張行く。最後には、神樣が勝利を得るので有らう！」

三

次の日の十時に、地方裁判所でドミトリ・カラマゾフの裁判が開かれた。

此裁判は今や露西亞一圓に知れ渡つて　近國近在から傍聽人が詰め掛けた。入場切符は奪ひ合ひに成つた。傍聽席には特に婦人が多い。彼等の顏は皆ヒステリカルな好奇心を表はして居る。そして、其婦人達の大半が皆ミチヤ贔負で有る。恐らく女性の心の征服者としての彼の名聲に由るので有らう。二人の女の敵對者が出席するといふことも一般に知れ渡つた。其一人なるカテリイナ・イヴノフナは衆人の注目を惹いた。相手のグルシエンカもそれに劣らない。傍聽席の女どもは皆此女がフヨードル・カラマゾフと其息子とをこんな不幸に陷入れたことを知つて居る。が、殆ど殘らずと言つても可い程皆、何うしてこんなさのみ美しくもない普通の女の爲に、あの息子がそれ程思ひを掛けたのかと不思議に思つた。

で、又有名な辯護士のフェチュコヴィッチが現はれた時には、一同どよめき立つた。彼の才能は世に知られ、彼の辯護した事件は後々迄も記憶される。何でも此町の裁判所の檢事は彼得斯堡（ペテルスブルク）以來、此辯護士を敵として妬んで居るといふやうな噂も有つた。兎に角、此檢事は餘りに熱中する傾向で、一旦かうと思ひ込んだら、他を省みないやう

な嫌ひが有つたらしい。裁判長は實務家で、進歩的意見を抱いて居た。カラマゾフの事件に對しても、個人としてよりは寧ろ社會的見地からそれを見て居た。從つて事件其者には何方かといへば冷淡で、且つ抽象的で有つた。

法廷は裁判官の出席前から、傍聽人でぎつしり詰つて居た。右側の一段高い所には、裁判官並に陪審官の席が有る。左側には囚人と辯護士との席が有る。中央の卓子の上には、いろんな證據物件が並べて有つた。血に染んだ被害者の寢衣、兇行に使用したと云はれて居る玄能、血痕の附着したミチヤの襯衣、手帛（ハンケチ）、ミチヤが自殺の目的で携帶した拳銃、三千留布の金子が入れて有つたといふ封筒、絹紐など。

十時が打つと、裁判長は陪席判事を連れて席に着いた。そして、型の如く公判の開廷を宣告した。廷丁がミチヤを連れて來た。傍聽席は一時に森として蠅の飛ぶ音さへ聞える位に成つた。が、ミチヤの風采は如何にも洒落者めいて、一般に好い印象は與へなかつたらしい。彼は眞直に正面を見ながら大股に歩いて出て、與へられた席に着いた。同時に有名なフェチュコヴッチが着席した。法廷は小聲で何やら囁き合つた。此

辯護士の顏には何處か烏を連想させるものが有つた。

裁判長は先づミチヤに向つて、姓名、年齢、職業等を尋ねた。ミチヤは高調子で一々それに答へた。彼の聲が餘り大きかつたので、裁判長も吃驚して被告の顏を眺めた。それから證人の點呼が續いた。其中に四人の缺席者が有つた。ミューソフは巴里へ行つて居るため、ホーラコフ夫人と取捲の爺さんとは病氣のため、スメルヂヤコフは急に死んだため――スメルヂヤコフの死を刑吏が報告した時は、一般にどよめき立つた。中にもミチヤは不意に立上つて、自分の席から大きな聲で喚んだ。

「彼奴は犬だ、犬のやうに死にやアがつた！」

裁判長は二度とそんな眞似をしたら、相當の手段を取ると叱責した。ミチヤは點頭いて席に復したが、別に後悔した容子もなく、「いや、二度とはしません。思はず出たのですよ。二度とはしません」と繰返した。

勿論、それは陪審官並びに傍聽人の上に好い感じを與へなかつた。一度に彼の性格を曝露したもので有る。左樣いふ間に、開廷の理由書が讀み上げられた。裁判長はミ

チャに向つて、重々しい聲で訊いた。

「被告は異議の申立が有るか。」

ミチャは不意に席から立ち上つた。「私は酒色と放蕩に就いては罪が有る」と、吃驚するやうな狂氣染みた聲で叫んだ。「怠惰と墮落とには罪が有る。私は正直な、善良な人間に成らうと決心した夜運命の手に打倒された。が、私は私の敵にして父なるあの老人の死に就いては罪がない。いや〳〵、あの老人の金子を盜んだ覺えはない！　ドミトリ・カラマゾフはやくざ者で有る。が、泥棒ではない。」

彼は身體中顫へながら下に坐つた。裁判長は又簡單に、「只尋ねたことに答へれば可い、餘計なことを言つては成らぬ」と、忠告した。それから證人が皆宣誓を取られた。が、被告の兄弟だけは宣誓をしないで、申立てを宥された。

で、いよ〳〵證人調べが始まつたが、何ういふものか、先づ被告を罪有りとする證人の方から調べられた。傍聽人は最初から皆被告の犯罪を信じて居た。そして、辯護は只形式にされるものと思つて居た。あれ程被告の赦免を望んで居る婦人連でさへ、

被告の無罪を信じて居るものは一人もない。更に言へば、若し被告の犯罪が成立しないとすれば、彼等は被告の赦免の効果を減殺するものとして失望したに違ひない。それで居ながら、此婦人連が最後迄被告の赦免を確信して居たのは、不思議といへば不思議で有る。辯護士フェチュコヴィッチはいよ〳〵口を切る迄謎として殘つて居た。彼が何ういふ計劃を立てて居るかは、一向解らない。が、彼に自信の有ることは明瞭で有つた。彼が此町へ來てから僅か三日の間に、何うして此事件をそれ程深く研究したかは、只驚くの外はない。

先づ證人としてカラマゾフ家の下男グリゴリイが調べられた。グリゴリイは法廷の壯嚴にも、大勢の聽集にもめげず、落着き拂つて法廷へ這入つて來た。檢事は先づカラマゾフ家の日常生活を細かに訊ねた。家庭の姿がまざ〳〵と描き出された。此爺さんが公平で僞りのないことは明白で有る。爺さんは死んだ主人を深く尊敬して居たけれど、尙彼のミチャに對する待遇は正しくなかつたと主張した。ミチャは子として當然の扶育も受けなかつた。若し自分が面倒を見て遣らなかつたら、虱で喰ひ殺された

に違ひない。特に母方の財産を父親が横領したのは不正であると言明した。で、それには何か根據があるかと檢事が突込んで訊いた時、不思議なことに、爺さんは何とも返辭が出來なかつた。

グリゴリイは又ぶつきら棒な言葉で、午餐の席へドミトリが躍り込んで親爺を毆つてから、再び殺しに遣つて來ると威嚇して去つた時の光景を物語つた。爺さんの言葉に飾りがないだけ、一層深い印象を聽衆に與へた。爺さんは又ミチヤが自分を毆り倒したことに就いては、最早憤つて居ない、疾うに宥して上げたと述べた。それから死んだスメルヂヤコフに就いては、胸に十字を描きながら、あの少年が却々役に立つこと、馬鹿で病身で、殊に不可ないのは不信者で有つたと申立てた。が、正直な一點は極力辯護した。或時庭で金子が落ちて居たのを其儘主人に差出して、爾來大に主人の信用を得たといふので有る。

最後に辯護士の方から此證人を調べた。第一着に、或人に遣るとて三千留布の金子を入れて置いたといふフヨドールの封筒のことを訊いた。が、證人はそれに就いて、

何一つ知らなかつた。此質問は檢事がドミトリの遺產に就いて、何度も訊き返したと同じやうに、辯護士がこだわつて何の證人に向つても訊いた質問で有る。傍聽人は皆それに氣が附いた。

「で、最う一つ訊ねたいが」と、フエチュコヴィッチは不意に言ひ出した。「お前はあの晩腰の神經痛に塗るとて藥を用ゐたさうだが、其藥は何を調合したのだい？」

グリゴリイはぼんやり相手の顏を見返して居たが、やゝ有つて、番紅花も這入つて居ましたかな」と呟いた。

「番紅花ばかりかな？　他に何か這入つて居やしないか。」

「鋸草も這入つて居ましたよ。」

「で、それを火酒で調合したのだね？」

「いえ、燒酢ですよ。」

法廷の中に微かな笑ひ聲が聞えた。

「成程燒酢か。で、想ふに、お前はそれを春中に塗つてから、壺に殘つた燒酢を、神

様にお祈りをした後で、内密でぐいつと飲んだらうね。」

「えゝ、飲みましたよ。」

「何の位飲んだい？　洋盃に一杯か二杯かな。」

「湯呑にこす〳〵一杯も有つたですよ。」

「湯呑に一杯か。一杯半も有つたのぢやないか。」

グリゴリイは返辭をしなかつた。何ういふ譯で訊かれるのか解つて來たらしい。

「湯呑に一杯半の燒酎は惡るくないね。お前は何だらう、庭へ通ずる戸が開いて居たばかりでなく、天國の戸も開くやうな氣がしたらう。」

グリゴリイは矢張默つて居た。法廷では又くす〳〵笑ひ出した。

「で、お前は」と、辯護士は續けて訊いた。「庭の戸が開いて居るのを見た時、本當に眼を覺して居たか何うか覺えて居るかい。」

「私は此足で立つて居ました。」

「そりやお前が眼を覺して居たといふ證據にはならんよ。」（此時又法廷には笑ひ聲が

起つた。）「其時誰かゞお前にこんな質問をしら、左樣だね。今年は何年だと訊かれたら、お前は返辭が出來たかい。」

「私には解りませんよ。」

「で、今年は何年だい？　知つてるか。」

グリゴリイは相手を見返しながら妙な顏をして立つて居た。實際彼は何年だか知らなかつたらしい。

「併しお前は手に指が何本有るか位言へるだらうね？」

「私は召使で御座います」と、グリゴリイは不意に大きな聲で言つた。「貴方がたが私を調戯つて遊ばうとなさるなら、私は怀へて居るより外有りませんよ。」

フェチュコヴィッチも流石にたぢ〳〵とした。裁判長は口を挾んで、最少し眞面目たゞ問をするやうに注意した。辯護士は重々しく頭を下げて、最う別段訊くことは有りませんと答へた。勿論聽衆や陪審官は、天國の戸が開くのを見たり、自分が何年に生きてるかといふことも知らないやうな人間の申立は、餘り當にならぬと疑ひ始めたらし

い。裁判長は被告に向つて、此證人の申立に對して何か言ふことはないかと訊いた。

「庭の戸のことの外は、爺さんの言ふことは皆眞實です」と、ミチヤは大きな聲で言つた。「私の弧を取つて呉れたことに就いては、お禮を言ひます。又私が毆つたのを宥して呉れたこともお禮を言ひます。此爺さんは一生正直で、親爺には犬のやうに忠實でした。」

「被告、言葉を慎まなくては成りませんぞ」と、裁判長は又注意した。

辯護士は證人ラキチンの申立を取扱ふ際にも、又同樣の手腕を示した。ラキチンも檢事の重きを置いて居る有力な證人で有る。彼は到る所に首を突き込んで、何も彼も知つて居るやうに見えた。が、ラキチンもミチヤの貴產のことに就いては別段知る處がない。只一般の概論を述べるに止めた。彼は又此犯罪を露西亞の奴隸制度以來の習慣に歸して、滔々數千言を連ねた。彼が自分の能力を示す機會を持つたのは是れが始めてゞ、雜誌に出す論文の下調べをしたので有る。彼の議論は其獨創と精神の高邁とに由つて一般の注意を惹いた。が、熱心の餘り不圖グルシェンカが證人サムソノフの

嬖妾で有ると、一言口を辷らした。辯護士は直にそれをとつこに取つて、ラキチンとグルシェンカとの親密な間柄で有ることから、彼が二十五留布貰つて、アリヨウシヤを彼女の家へ連れて行つたこと迄白狀させた。

「そりや戯談ですよ」と、ラキチンは吶つた。「そんな事が貴方に何の役に立つか、私には解らない……私は後で返す積りで戯談に取つたのですよ。」

「して見ると、矢張お取りなすつたんだね。で、貴方は最うお返しに成りましたか。」

「そんな返辭は出來ません」と、ラキチンは呟いた。「勿論今」返しますよ。」

裁判長も口を挾んだ。が、辯護士は此證人に對して此上質問はないと言つた。斯うして、彼の高邁な理想主義の演說の効果は稍傷つけられた。自席に着いたフェチュコヂッチの顏色は、「被告を惡るく言ふ高邁な人間の標本はこんなものです」と、聽衆に暗示するやうに見えた。

スネギリヨフ大尉の立證も、別の理由から眞個失敗に歸した。彼は泥まみれの靴を穿いて、繿褸を着て法廷に出たが、醉拂つて居て、何を訊いても譯が解らない。で、

其儘法廷から出された。

モクロウの宿屋の停主は、ミチヤに對して偏見を抱いて、飽迄、彼が前回にも三千留布消費したと主張した。が、其際ヂプシイの女が拾つた百留布の紙幣をミチヤに返すと言ひながら、横取りして居つたことが解つて、此主人の言葉も餘り當にならないことに成つた。二人の波蘭人に就いても同樣で有つた。最初は二人とも厚顏に構へて居たが、骨牌を摩り換へたことが曝露して、すご〳〵と引き返した。

こんな工合に、フェチュコヰッチは、有らゆる證人の上に泥を塗することに成功した。で、ミチヤに對する起訴は全然破られたと迄は行かないが、いよ〳〵何が何だか解らなく成つた。

次に醫者の立證が始まつた。が、別段被告の利益には少しも成らなかつた。辯護士も餘り重きを置いて居ない。只カテリイナの主張に基づいて、莫斯科から有名な醫者を迎へたので有る。

最初に喚ばれた醫者はヘルチェンスツーベと云つて、七十餘の老人で有る。此町で

は前から尊敬されて居た。彼は貧乏人に施療して、何んな汚ない小舍へも訪づれ、おまけに藥代迄遣つて來た。が、莫斯科から來た醫者は、着いて三日も立たない内から、散々ヘルチェンスツーベの診立てを惡口した。

で、ヘルチェンスツーベは、被告の心的能力の變態が自明の理で有ると主張した。其根據として擧げた理由の中に、現に被告が法廷に出た際、此被告の常態として婦人席の方を見ながら這入つて來るべきだのに、彼は眞直に正面を見詰めながら這入つて來た。これは精神の變調を來して居るものと見なければ成らぬと主張した。傍聽席ではくす〳〵と笑ひ出した。獨逸から來て、一生獨身で通して來た敬虔な爺さんの口から、そんな事を聞くのが可笑しく聞えたらしい。

莫斯科の醫者も矢張被告の精神狀態を極度に錯亂して居るものと言明して、縱令被告が殺人の大罪を犯したとしても、無意識の間に行はれた行爲だから、起訴の限りではなからうと主張した。で、其理由としては、ヘルチェンスツーベと結論は同一でも根據が全然別で有ると述べた。即ち被告が此法廷に出た際、婦人席の方を見なかつた

といふが如きは、全然理由のないことで、本來なら自分の運命を保護して呉れる唯一の手頼りなる辯護士の方を見るべき筈で有る。然るに彼は眞直に正面を向いて這入つて來た。それが精神錯亂の兆候だと言ふので有る。第三に此町の病院の若い醫者が喚ばれた。此醫者の思ひがけない提言が三國手の說の矛盾の滑稽劇に最後の筆觸を與へた。即ち被告は捕縛の際には神經も昂奮して居たらうが、今は眞個常態に有るといふので有る。即ち此法廷に出る際、右も左も向かず、自分の運命を支配する正面の裁判官席を見ながら這入つて來たのは、精神の變態よりは、寧ろ常態を證據立てるものと見るべきで有ると言ふのだ。

「其通りだ！」と、ミチヤは自席から呶鳴つた。

勿論ミチヤは阻まれた。が、若い醫者の說は裁判官並に聽衆の上に決定的影響を與へた。ヘルチェンスツーベは又數年間カラマゾフ家に出入した角を以て、證人として喚び出された。彼は何やら想ひ出すやうに見えたが、不意に、

「いや、此若者も子供の時分は丸で今と違つて居ましたよ」と述べた。「其時分は能く

恩を知る賢い子でしたよ。あゝ、私も覺えて居ますがね、此の悪戯ッ子は阿父さんにも顧みられず、ボタンの一つしかない洋袴を穿きながら、洗足で庭を駈け廻つて居ましたよ。」

かう言ひながら、此正直な老人の聲には不意に優しい感情が滲むやうに見えた。「あゝ左樣だ、私も其頃は若かつた。恰度四十五でしたがね。私は此子を見ると可愛相に成つて、胡桃を一斤買つて遣りましたよ。誰も前に買つて遣つた者はないのですからね。私は指を擧げて此子供に言ひました。『子供や、父なる神。』此子は笑ひながら『父なる神』と言ひましに。『子なる神。』此子は又笑つて『子なる神』と繰り返した。『精靈なる神。』此子は笑ひながら一生懸命に『聖靈なる神』と言ひました。二日後に私が道を歩いて居ると、此子は飛んで來て、『叔父さん、父なる神、子なる神』と言ひ出した。只一つ聖靈なる神だけを忘れて居た。で、私は又此子にそれを敎へて遣つたが、大變此子が可愛相な氣がした。が、此子は間もなく此町を去つて、二十三年といふもの丸で遇はなかつた。私は或朝こんな白髮の爺さんに成つ

て書齋に坐つて居ました。其處へ見知らぬ立派な若者が這入つて來て、手を差出しながら、笑つて不意に、『父なる神（ゴッド デル ファーテル）、子なる神（ゴット デル ゾーン）、精靈なる神（ゴッド デル ハイリーゲ ガイースト）』と言ひ出すのですよ。』私は今着いたから胡桃のお禮に來ました、誰も私に胡桃を買つて呉れた者は有りませんからね。買つて呉れた者は貴方一人ですよ。』で、私はやつと洗足で歩いて居たあの子を想ひ出した。私も動かされて、『お前さんは感心な人だ。あんな子供の時分のことを一生覺えて居たんだね』と言つた。私はそれから若者を抱いて祝福して遣りました。私は思はず涙を流した。若者も笑つて泣きましたよ……實西亞人といふものは泣くべき時に好く笑ふものですからね。が、若者は泣きました。私は見た。で、今やあゝ！」

「私は今も泣く、獨逸人、私は今も泣きますよ。貴方は好い人だね」と、ミチヤは叫んだ。

兎に角、此逸話は聽衆に好感を與へた。

次にアリヨウシヤが調べられた。檢事も辯護士も、彼には優しく同情を以て問ひ掛

けた。アリヨウシヤは控え目勝ちに申立てたが、兄に對する溫かな同情は爭はれない。彼は兄の性格を情熱に驅られ易い烈しい質（たち）だが、同時に寛大で氣位の高い、犧牲の精神にも富んで居る人として描いた。彼は又兄が金錢を目蒐けて人殺しをしたといふ暗示を斷乎として斥けた。が、ミチヤが三千留布の金子を親爺に詐取された遺產の一部と見做して居たことは、これを認めた。

「で、貴方の兄さんは親爺を殺さうと思つて居ると何日か貴方に告げたことは有りませんか」と、檢事は訊いた。「貴方は可厭なら返辭をしないでも可いのですよ。」

「左樣明白に言つた譯では有りませんが」と、アリヨウシヤは答へた。

「何うして左樣です？」

「兄は一度父に對する憎しみを語つて、感情が激した場合には、何うかすると親爺を殺すかも知れないと言つたことが有りました。」

「で、貴方はそれを信じましたか。」

「はい、殘念ながら信じました。併し最後の瞬間には、一層高い感情が兄を救つて呉

れるだらうと固く信じて居ました。矢張私の信じて居た通りで、兄は父を殺しませんでした。」

検事は稍急き立つた。「が、左様言ふのは貴方一人で、此起訴を爲すに至つた他の有らゆる證據に撞着して居ますぞ。で、私は貴方が兄さんの無罪を信じて、最一人の男を罪有りとして彼坐しやる根據を承はらなければ成りませんね。」

「私は只兄の言葉を信じたのでした」と、アリヨウシヤは靜かに言つた。「又信ぜずに居られないのです。兄は私に對して嘘は言ひません。それは兄の顏を見ても解りましたよ。」

「兄の顏から？　他に證據は無いのですか。」

「他に證據は有りません。」

検事は其上訊ねなかつた。アリヨウシヤの立證は大分聽衆を失望させた。豫て彼が兄の無罪とスメルヂヤコフの犯罪に對する非常な證據を集めて居るといふやうな噂が有つた。それだけに失望も甚だしいので有る。

が、辯護士はアリヨウシヤが何時被告に會つて、そんな親爺を殺さうとして居るなぞといふ話を聞いたか。例へば此度の騒動が起る前の最後の會見で有るか、又何處で會つたかなぞと訊き出した。其時アリヨウシヤは急に何か想ひ出したやうに飛び上つた。「私は今迄丸で念頭に無かつた一つの事情を想ひ出した。あの時は何の事やら解らなかつたが、今は……」

彼は明らかに始めて一つの觀念に打たれたらしい。で、僧院へ歸る四ツ辻で、最後にミチヤに逢つた時、彼が胸の上部を敲いて、幾度も名譽を恢復する手段が此處に有る、此胸に有ると語つたことを熱心に述べ出した。「私は兄が胸を打つのを見た時、此の心に有るといふ積りだと思つて居ました。將に來らんとする不名譽から自分を救ふ心の力が有るといふ積りだと思つて居ました。何が不名譽だか私にも言ひませんでしたから、多分親爺の許へ行つて暴行を加へることだらうと思つて居ました。が、今想ひ出して見ると、其時兄は心臓の邊りを打たないで、ずつと上、恰度頸の下邊りを打つて居ました。其時は何だか可笑しなことをすると許り思つて居ましたが、恐らく兄

は千五百留布這入つて居る其の小さな嚢を指して居たのですね。」

「其通りだ」と、ミチヤは自席から叫んだ。「アリヨウシヤ、私が拳骨で打つたのは、其嚢だよ。」

辯護士は遽てゝ、靜かにするやうに彼に賴んだ。同時にアリヨウシヤを促がした。アリヨウシヤも其想ひ出に驅られて、熱心に自說を申立てた。即ち兄の不名譽といつたのは、其千五百留布のことで、彼はそれをカテリイナに返さうと思へば返し得る、而も彼は他の目的——グルシエンカと一緒に出奔しやうといふ——に使用する積りで何うしても返すだけの決心が附かない。「屹度それに違ひない。違ひ有りません」と、アリヨウシヤは叫んだ。「兄は何度も不名譽の半分——えゝ、半分と言ひましたよ——半分だけは即座に償い得られる。が、自分の意志の弱い爲にそれが出來ないと言つて居ました。兄は前からそれが出來ないといふことを知つて居ましたよ。」

「で、貴方は判然兄さんが胸の上部を打つたことを覺えてゐますか」と、辯護士は熱心に訊いた。

「判然覺えて居ます。私は其時何故あんな處を打つのだらう、心臟は最つと下に有るのに馬鹿なことをするものだなと思ひました……馬鹿だなと思つたことを覺えて居ますよ。えゝ、今やつとそれを想ひ出しました。何うして私は今迄それを忘れて居たのでせう？　それに兄はモクロウで捕へられた時——えゝ、私は聞いて居ますよ——カテリイナに借りて居る金子の半分だけ返す手段を持ちながら、彼女の眼に泥棒として殘つても、何うしても返す氣に成れなかつたのが、一番不名譽だと言つたさうでした。あゝ、兄には其借金が何んなに、何んなに辛かつたでせう！」アリヨウシヤは殆ど叫ぶやうに言つて口を噤んだ。

裁判長はミチヤに向つて、今の證人の證言に對して何か言ふことが有るかと訊ねた。ミチヤは悉くそれを是認した。「眞個不名譽です、私の一生の最も耻づべき行爲です」と、ミチヤは叫んだ。「私はそれを返すことが出來ながら、それを返さなかつた。私はあの女の眼に泥棒と見えても返すまいとした。殊に耻づべきは、私が前以て返さないといふことを知つて居た點に有るのですよ。アリヨウシヤ、お前の言ふ通りだ。有難

う、アリヨウシヤ！」

斯くの如くにして、アリヨウシヤの調べは終つた。兎に角小さな袋が實際存在して、千五百留布這入つて居たといふ微かな證據には成つた。次にカテリイナが喚び出された。

其時傍聽席の婦人どもは一齊に双眼鏡を取り上げた。カテリイナは眞黑な衣服を着て、おづ〳〵進み出た。裁判長も彼女の不幸を憐れむやうに、言葉遣ひも鄭寧に審問を始めた。被告との關係を問はれた時、カテリイナは男が自分を捨てる迄は婚約の間柄で有つたと判然答へた。それから三千留布の金子を叔母に郵送する爲に、ミチヤに托したか何うかと訊かれた時、彼女は單に郵送して貰ふ爲に渡したのではないと答へた。「私は當時あの人が金子に困つて居るのを知つて居ました。で、一ケ月の中に送る氣が有るなら送つて貰ふ、それ迄は使つて居ても可いといふ積りで渡したのです。何も其後あの金子のことで心配するには當りませんでした。」

「私はあの人が阿父さんから金子を受取れば、直に送つて呉れるだらうとは固く信じ

て居ました」と、彼女は言葉を續けた。「私は決してあの人の正直と、金子に對する無慾を疑つたことはない。又あの人が阿父さんに對して强迫がましいことを言つたのも覺えて居ません。あの人は私の前ぢや決してそんな事は言ひませんでした。若しあの人が當時私の處へ來て呉れたら、私はそんな三千留布の心配なぞ直に除いて上げる處でした。が、あの人は私に會ひに來ない、又私自身もあの人を招くことが出來ないやうな地位に居ました。それに、私はあの金子をそんなに請求する權利はない」と、彼女は急に決心を面に表はして附け加へた。「私は昔てあの人から三千留布よりも以上の金子を借りたことが有りました。私はそれを返す目當がないのに、矢張それを受け取つたのです。」

彼女の聲には一種挑戰の響きが有つた。恐らくは彼女自身も最後の瞬間迄法廷に此挿話を持ち出さうとは考へて居なかつたらしい。彼女は例の地に跪いた話を逐一語り出した。が、ミチヤの方から彼女の姉に向つて、彼女自ら其の金子を取りに來るやうに誘つたことは、一言も洩らさなかつた。彼女は自分自身の意志から、或事に依頼し

て、若い士官の許へ金子を貰ひに行つたやうに繕つて置いた。兎に角怖ろしい話で有る。滿廷水を打つたやうに森として謹聽した。檢事も其問題には一言も觸れ得なかつた。フェチュコザッチは彼女の前に頭を下げた。彼は今や殆ど凱旋しやうとして居る。任俠の衝動の上に最後の五千留布を拋ち得る人間が三千留布の金子を盜まうとして親爺を殺すことが出來るだらうか。餘りに前後撞着で有る。ミチヤに對する同情の波が聽衆の間に動いた。で、ミチヤはといふと……カテリイナが證言を與へて居る間、彼は一二度座席から飛び上つた。が、又下に沈んで、兩手に顏を隱して居た。彼女が語り終つた時、彼は不意に涙交りの聲で叫んだ。

「カチヤ、お前は何うして私を陷入れるのだ？」彼の嗚咽の聲は法廷中に聞えた。が、彼は直に自ら制した。そして、再び叫んだ。

「私は最う駄目だ！」

彼は齒を咬ひ縛りながら腕組をして、座に坐つて居た。カテリイナも傍聽席に戻つて座に着いた。彼女は長い間熱病にでもかゝつたやうに顫へて居た。

次にグルシェシカが喚び出された。彼女も矢張眞黑な衣服を着て居た。そして、目じろぎもせず、凝乎と裁判長の顏を見詰めて居た。聽衆の侮るやうな、物珍しげな眼が自分に注がれて居るのを意識して、稍昂奮して居るらしい。又或時は自ら責めるやうな誠實な調子に輕蔑するやうな、亂暴な物の言ひ方をした。或時は憤つたやうな、返つた。フヨドールとの關係を問はれた時、「馬鹿な、あの爺さんが私に迷つたとて、それが私の咎ですか」とぶつきら棒に言つた。が、一分間後には又附け加へた。「皆私の過ちですよ。私は爺さんもあの人も二人ながら笑つて居た、二人ながらこんな事にして仕舞つた。こんな事に成つたのは皆私故ですよ。」

紙幣を入れた封筒に就いては、彼女は一度も見たことがない。が、「あの惡黨」から聞いて居た。が、皆馬鹿な事です。私は只笑つて居た。何んな事が有つてもあの爺さんの許へは行きませんよ。」

惡黨とは誰のことを言ふのかと、檢事は突き込んで訊いた。

「あの主人を殺して、昨夜首を縊つた下男のスメルヂャコフですよ。」

が、何を根據にして、そんな事を言ふかと訊かれた時、彼女も又別段根據を持つて居なかつた。「ドミトリが自分で左樣言ひましたよ。貴方がたもあの人の言ふことを信じなけりや成りませんよ。あの人は嘘を吐くやうな人ぢやない。えゝ、私達の間を邪魔したあの女があの人を陷入れたのです、あの女が皆原(もと)です」と、グルシエンカは憎しみに顫へながら言つた。あの女とは誰かと訊かれた。

「其處に居るあのカテリイナ・イヴナノフですよ。あの女は私を喚び寄せて、チョコレートを振舞つて、私を誘惑しやうとしました。あの女は耻知らずですよ。」

裁判長は嚴しく叱責した。が、嫉妬に燃える女の心は、何うして何う成るか樗つては居ない。

「被告がモクロウで捕はれた時」と、檢事は訊いた。「お前は隣の間から駈出して、『皆私が惡るい。二人一緒に西伯利亞へ遣つて呉れ。』と言つたね。して見ると、お前はあの時既に被告は親爺を殺したものと信じて居たのだらう？」

「私は何と思つたか覺えて居ない」と、グルシエンカは答へた。「皆してあの人が阿父

きんを殺したと言ふから、皆私が惡るい、あの人がそんな事をしたのも私故だと思つたのですよ。併しあの人が自分でないと言つた時、私は直に信じました。私は今でもあの人を信じて居る、永久に信じて居る。あの人は嘘を吐くやうな人ぢやない。」

フェチュコヴッチは彼女とラキチンとの關係を訊ねた。グルシエンカはあの二十五留布ばかりでない、毎月三十留布以上取られて居たと語つた。

「何故そんなにラキチンに金子を呉れるのです？」と、辯護士が訊いた。

「何うして、あの人は私の從兄ですよ。あの人の阿母さんが私の阿母さんの姉です。が、あの人は始終其事だけは誰にも言つて呉れるなと賴んで居ました。あの人は怖ろしく私を耻かしがつて居るのですよ。」

此事實は聽衆に一種の恐愕を與へた。で、いよ〳〵ラキチンの立派な證言も無効に歸した。

次にイヴンが喚び出された。彼はアリョウシヤの前に喚ばれたのだが、廷丁が來て證人は何か病氣の發作が起つて直には出席されない、併し恢復次第法廷へ出るさうだ

と、裁判長に上申した。が、其時は誰も聞いて居なかつた。

イヴンは深く感慨に沈んだやうに、頭を垂れたまゝ、徐々と歩いて出た。彼の顏は死人のそれのやうに土色をして居る。彼の眼には光がない。彼はやつと眼を上げて法廷を見廻した。アリヨウシヤは思はず席から飛び上つて、「おゝ！」と叫んだ。

裁判長は例に依つて、證人は宣誓なしに證言を申立てることが出來る。が、良心に從つて申立てねば成らぬ云々と言ひ渡した。イヴンは默つて聞いて居たが、だん〳〵顏に微笑を含んだ。そして、裁判長が言ひ終るや否や、突然から〳〵と笑ひ出した。

「で、それから何うするんです？」と、彼は大きな聲で訊いた。

裁判長は不安の色を現はした。「貴方は……未だ病氣が快くなら成いのだね？」

「いや、御心配下さるな。私は何でも申し上げられますよ」と、イヴンは急に又鄭寧に成つた。

で、審問が始まつた。彼は澁々ながら極めて簡單に答へた。大抵の質問には知らないと言つた。親爺とドミトリとの金錢上の關係に就いては、何にも知らない。ドミト

リが親爺を殺すと恐喝したことは、被告自身の口から聞いた。封筒の金子に就いては、スメルヂヤコフから聞いて居た。

「同じ事を何度も訊くんですね」と、イヴンは不意に倦さうな面持で口を挾んだ。「閣下、私は病氣だから御免被りますよ。」

かう言つて、彼は許可も待たずに法廷から出て行かうとした。が、五六歩出た後、何か決心が着いたやうに立ち停まつた。そして、徐かに微笑しながら戻つて來た。

「何うしたんです？」と、裁判長は嚴格に訊ねた。

「えゝ、これですよ」と、イヴンは不意に札の束を引き出した。「此處に金子が有る……其封筒に這入つて居た金子が有る。此金子の爲に親爺は殺されたのですよ。何處に此金子を置きませうか。裁判長何卒受け取つて下さい。」

「これが果して其金子だとすれば、何うして貴方の手に入つたのです？」と、裁判長は吃驚しながら訊いた。

「私は昨日スメルヂヤコフから、あの人殺しから、受取つたのですよ。私は彼奴が首

を綰る前に會つて來ました。親爺を殺したのは彼奴です、私の私の兄ぢやない。彼奴が親爺を殺したのですよ、そして私が殺すやうに慫慂したのですよ……世の中の人間は皆銘々に親爺の死を望んで居るのですからね。」

「貴方は正氣ですか」と、裁判長は思はず口走つた。

「私は正氣だと思ひますよ。貴方がたと同じやうに……此邊に居る總べての醜い顏と同じやうに正氣だと思ひますよ」と、彼は不意に聽衆を見廻した。「私の親爺が殺されたと云つて、此連中は皆顫へ上つて居ます。嘘吐き！　此奴等は皆親爺の死を望んで居るのですよ。一つの蝮が他の蝮を喰ひ殺すのですよ。私も其一人ですがね。水を一杯下さい。後生だから、一杯飲ませて下さい」と、彼は不意に頭を掴んだ。

延丁は直に彼の側へ近寄つた。アリヨウシヤも飛び上つて、「兄は病氣です。兄の言ふことなぞ信じて下さるな。兄は腦病です」と叫んだ。カテリイナは突かれたやうに座から立ち上つて、怖ろしさに化石しながら、イヴンを見詰めて居た。ミチヤは立ち上つて貪るやうに弟を眺めながら、妙な笑ひを含んで聽いて居た。

「皆騒いで下さるな。私は狂氣ぢやない、私は只人殺しですよ」と、イヴンは又始めた。そして、氣味の惡るい笑ひ方をした。

檢事も裁判長も明かに面喰つて居た。陪席判事は何やらひそ〳〵囁いて居る。辯護士は耳を引立てた。滿堂如何に成り行くかと片唾を呑んだ。裁判長はやつと我に返つて、「證人、貴方の言ふことは解らない。氣を靜めて、言ふことが有るなら仰有い。實際氣が違つて居るのでなけりや、證據を提出したが可いですぞ。」

「其處です。何にも證據はない。スメルヂヤコフの畜生もあの世から證據は送れませんからね。他に證人はない……たつた一人の外はない」と、イヴンは何やら考へて居るやうに微笑した。

「其證人とは誰です？」

「閣下、其奴は尻尾を持つて居ますよ。（譯者曰く、西洋の惡魔は皆尻尾を持つて居る。）ええ、こんな事を言つちや不可ませんか。其奴は何處にでも居ますよ。此處へも來て居る、此卓子の下にも居る。其處でもなけりや坐る處が有りませんからね。兎に角、

此獣物は宥してやつて下さい。其奴の代りに私を縛つて下さい！　私は用もないのに此處へ來た譯ぢや有りませんよ。一體馬鹿な話ですね。」

法廷はがや〳〵と總立ちに成つた。アリョウシャはイヴンの側へ飛んで行かうとしたが、延丁が既に彼の腕を掴んで居た。

「何をするんだ？」と、イヴンは延丁の顏を見詰めながら、不意に床の上へ抛り投げた。警官が飛んで來た。法廷から引出される間、彼は絶えず何やら叫喚いて居た。

滿廷混雜を極めて、何が何やら解らない。延丁は戻つて來て、何やら裁判長に言譯をして居た。で、此混雜が鎭まらない間に、又一つの事件が起つた。カテリイナがヒステリイの發作を起したので有る。彼女は泣いた、聲高に叫喚きながら、法廷を去るのを拒んだ。身を藻掻いて訴へた。と、不意に彼女は裁判長に向つて叫んだ。

「此處に最一つ證據が有りますよ……書類です、手紙です……早くこれを讀んで下さい、早く！　此獣物から來た手紙ですよ。其處に居る其男から！」と、彼女はミチャを指差した。「此奴が阿父さんを殺したのですよ。阿父さんを殺す次第を私に書い

て寄越しました。が、イヴンは病氣です、病氣です、氣が狂つて居るのです！」

延丁は彼女が差出した書類を取つて、裁判長に渡した。彼女は椅子の中に落ち込んで兩手に顏を隱しながら、身を顫はせて、痙攣的に音もなく泣き出した。が、法廷から出されるのを怖れて、一生懸命に聲を呑んで居た。裁判長は其書類を陪席判事から陪審官、檢事、辯護人の方へ一順廻した。それからカテリイナが恢復したか何うかを訊いた。

「私は用意して居ます！　何んな事でも御返辭が出來ます」と、彼女は鋭く叫んだ。で、此手紙を受取つた次第を細かに說明せよと言はれて、「私は犯罪の行はれた前の日にそれを受取つたのです。が、此人がそれを書いたのは、前の前の日、即ち二日前に料理屋で書いたのです」と、彼女は息も繼がずに語り出した。「其時分此人は私を憎んで居ました、私に背いて、あの女の許に走らうとして居たから、又恐らくはあの三千留布を借りて居たから……えゝ、此人は其三千留布の爲に、えゝそれはかういふ次第ですよ。何卒私の言ふことを逐一聞いて下さい。此人が阿父さん

を殺した三週間前に、或る朝私の許へ遣つて來ました。私は此人が金子に困つて居るといふことも、何の爲に金子が要るのだといふことも知つて居ました。左樣です、左樣です——あの女の心を獲て、一緒に出奔する爲ですよ。私は此人が私に背いて、私を捨てやうとして居ることも知つて居ました、知つて居ながら、あの金子を渡したのですよ。莫斯科の姉に送つて呉れといふ口實で渡したのですよ。私はそれを渡しながら、此人の顏を見て居ました。そして、一ケ月の間に先方へ屆けて下されば可いと言ひました。此人だつてちやんと解つて居たのですよ、私が面と向つて、『貴方は私に背く爲に金子が入用だ。だから、此金子を上げます、私自身貴方に上げます。貴方はそれを受取る程恥を知らない人間なら受取りなさい！』と言つて居るのだとは、ちやんと解つて居たのですよ。私は此人が何うするだらうと、それが見たかつたのでした。此人はそれを受取つて、あの女と一緒に一夜の間にばら撒いて仕舞つたのでした。併し此人は知つて居たのですよ、ちやんと知つて居たのですよ。私が此人を試す積りであの金子を與へたといふことは、ちやんと知つて居たのですよ。私は此の人の眼を見

て居ました。此人も私の眼を見て居ました。此人は何も彼も了解しました。了解しながら取つて行つたのですよ——私の金子を持つて行つたのですよ。」

「其通りだ」と、ミチヤは不意に叫喚いた。「私はお前の眼を見た、私はお前が私を輕蔑して居るのだと知つた。而も私は其金子を取つて行つたよ。私は耻知らずだ。輕蔑せよ、輕蔑せよ、皆輕蔑せよ。私はそれに當つて居る！」

「被告！」と、裁判長は叫んだ。「最一度言ふと、貴方を法廷から出しますぞ。」

「其金子は此人を苦しめた」と、カチヤは言葉忙しく續けた。「此人はそれを返さうと思つたのです。えゝ思ひました、それは眞個ですよ。が、此人はあの女の爲にも金子が欲しかつたのです。で、此人は阿父さんを殺した。が、私に返さないで、あの女と一緒に又前の村へ行きました。其處で又阿父さんを殺して取つた金子を使ひ捨たのですよ。阿父さんを殺す前の日に、此手紙を私の許へ寄越したのです。これを書いた時には醉つて居たに違ひない。此人は憎しみから此手紙を書いたのですよ。そして、私が誰にも見せない、縱令阿父さんを殺しても見せないと安心して居たから書いたの

ですよ。それでなきや書きはしない。此人は私が何んな事が有つても復讐し得ない、此人を陥入れ得ないといふことを知つて居たからですよ。併しまアそれを讀んで下さい、注意して讀んで下さい。『イヴンが此土地を去るや否や殺して遣る』と書いて有るでせう。此人は前以て阿父さんを殺す順序を考へて居たのですよ。プログラムを立てゝ居たのですよ」と、彼女は狂氣のやうに叫んだ。

彼女は自分の身が如何成るかも忘れて叫んだ。尤も此の手紙を法廷で示さうか示すまいかは、一ケ月も前から考へて居たに違ひない。今や彼女は最後の一歩を取つた。間もなく其手紙は書記に讀み上げられた。裁判長はミチヤに向つて、これを書いた覺えが有るか何うかと訊いた。

「私のです、私のです」と、ミチヤは叫んだ。「私も酔拂つて居なけりや、そんなものを書かなかつたに違ひない……カチヤ、二人はいろんな事で互に憎み合つて居た。が、私は誓つて言ふ、誓つて言ふ、私はお前を憎んで居る時でもお前を愛して居た。然るにお前は常て私を愛して呉れたことがない！」

彼は絶望の餘り手を握りながら席に復した。檢事と辯護士とは主として彼女が何の爲にこんな書類を今迄隱して居て、今に及んでそれを差出したかいふことに就いて取調べた。

「左樣です、私は今迄嘘を吐いて居ました。私の名譽と良心に反して嘘を吐いて居ました。私は此人を助けやうと思つたのです、此人が私を憎んで輕蔑して居るから助けやうと思つたのです」と、カチヤは狂氣のやうに叫んだ。「えゝ、此人は私を輕蔑して居ました、始終輕蔑して居ました。私が此金子の爲に此人の足下に跪づいた瞬間から輕蔑して居ました。私はあの時直にそれを感じました。長い間それを信じまいとして居ました。私は何度此人の眼に『そんな事を言つても、お前は自分で遣つて來たのだよ』といふやうな氣持を讀んだことでせう。あゝ、此人は私が何の爲に此人の許へ走つたか少しも了解して呉れませんでした。此人には卑しい心の外何にも解らない。あの人は自分自身で私を判斷した。誰でも自分の通りたと考へて居た！」と、カチヤは烈しく罵つた。「あの人は只私が財産を受け繼いだから、私と結婚しやうと思つたので

す、只それだけです、それだけです！　私は終始只それだけを疑つて居ました。此人は畜生です。此人は始終私があの時此人の許へ行つたから、一生此人の前に小さく成つて居るのだらうと信じて居ました。此人は永久に私を輕蔑する權利を持つて居る。從つて私に優越して居ると信じて居ました――それだから此人は私と結婚しやうと思つたのでした。それです、皆それです。私は自分の愛に依つて、此人を征服しやうと力めました。此人の背信も宥さうと力めました。此人は何にも解しない、解しない！

うして此人に解されませう、此人は獸物ですもの！　私は翌日の夕其手紙を受取りました、料理屋から屆けたのです――そして、其朝、えゝ其朝ですよ。私は此人を宥さうとしました。何も彼も――此人の譎詐をも宥さうとしました！」

裁判長や檢事は彼女の心を鎭めやうとした。彼等も女のヒステリイを利用してこんな自白を聞くに忍びなかつたらしい。が、矢張訊ねることは訊ねた。彼女は、イヴンが此二ケ月の間「此獸物の人殺し」を助けやうとして、殆ど常軌を失つて居た次第を物語つた。

「あの人は苦しんで居ました」と、彼女は叫んだ。「あの人は始終兄さんの罪を減じやうとして居ました。自分だつて決して阿父さんを愛しては居なかつた、恐らく自分も其死を望んで居たと私に白狀して居ました。あゝ、あの人の良心は餘りに優しい！　あの人は自分の良心で自分を苦しめるのです！　あの人は何も彼も私に言つた。唯一の友として、毎日私の許へ話しに來た。えゝ、私はあの人の唯一の友ですよ」と、彼女は不意に突ッかゝるやうな態度で叫んだ。「あの人は二度スメルヂヤコフに會ひに行きました。或日私の處へ來てこんな事を言つた。『若し兄でなく、スメルヂヤコフが殺したのだとすれば、恐らく自分にも罪が有る。何となればスメルヂヤコフは私が親爺を好いて居ないことを知つて居た。又恐らくは私が親爺の死を願つて居ると信じて居たから』と。其時私は此手紙を出して見せました。あの人は眞個兄さんが殺したものと確信して動顛して仕舞ひました。自分の兄弟が親殺しで有ると思ふと堪へられないのですよ。一週間前に、私はやつとあの人が病氣なのに氣が附きました。私はあの人の頭が變に成つて行くのを見て取りました。莫斯科のお醫者も一昨日あの人を診察し

て、腦病もずつと酷い、ぐつと重い狀態に有ると私に告げました――それも皆被告故ですよ、あの獸物故ですよ。昨夜あの人はスメルヂヤコフが死んだのを聞いた。それが最後の打擊で、あの人はこんなに成つて仕舞ひましたよ……それもこれも皆此の獸物故です。此の獸物を救ひたいばかりです！」

勿論、こんな緊張した、こんな自白は一生に一度しか出來ない。臨終の際か、斷頭臺に上る時しか出來ない！　が、それもカチヤのやうな性格なればこそ出來たのだ、カチヤのやうな女が一生に一度こんな場合に置かれたから出來たのだ。父を救ふ爲に若い放蕩者の前に自分を投げ出したカチヤで有る。又少し前には自分を犧牲にして、公衆の前に自分の處女としての貞操を犧牲にして、ミチヤの運命を少しでも緩める爲めに、彼の寛大な好意を物語つたカチヤで有る。今や彼女は再び自己を犧牲にした。が、今度は最一人の男の爲めで有つた。恐らくは此の瞬間に於て、始めて、彼女は最一人の男が自分に何れ程尊いもので有るかを知つたで有らう！　彼女は彼が親父を殺したのは兄でない、自分で有ると白狀して、自分を陷入れやうとして居るのを感ずる

と、矢も楯も堪らず自分を犧牲にしたのだ、男を救ふ爲めに、男の名譽を救ふ爲めに自分を犧牲にしたのだ！

が、此處に一つの疑ひが有る。彼女はミチヤとの以前の關係を述べた時、實際嘘を吐いて居たのではなからうか。左樣だ、彼女は自分がミチヤの前に跪いた爲めに、ミチヤが自分を輕蔑して止まないと叫んだ時も、故意に彼の人格を下げやうとしたのではない。彼女自身左樣信じて居るので有る。彼女はあのお叩頭(じぎ)以來あれ程自分を崇拜して居る單純なミチヤを、始終自尊心から、傷けられた自尊心から、ヒステリイ性の愛じて居るので有る。彼女は只自尊心から、自分を輕蔑して居るのだと固く信で彼を愛して居た。其愛たるや少しも愛らしくない、寧ろ復讐の如きもので有る。あ、そんな愛でも本當の愛に變る時節も有つたかも知れない。カチヤ自身何よりもそれを望んで居た。が、ミチヤの背信は心の底から彼女を傷けた。彼女の心はミチヤを宥すことが出來なかつた。斯くの如くにして、不意に復讐の時期が來た。長い間蓄積した女の一念は一時に破裂した。彼女はミチヤを裏切つた、同時に自分自身をも裏切

つた。が、彼女も言ふだけ言つて仕舞ふと、急に心の張りが弛んで恥かしさに堪えられないやうな氣がした。ヒステリイの發作が再び始まつた。彼女は床に倒れて嗚咽び上げた。そして、法廷の外へ連れて行かれた。其時遲しグルシェンカは わつと泣き聲を立てながらミチヤの方へ突き進んだ。誰も止める暇がない。

「ミチヤ！」と、彼女は泣き聲を立てた。「毒蛇はお前を滅した。到頭本性を現はしたよ」と、彼女は怒りに顫へながら叫んだ。裁判長の指圖で、彼女は法廷の外へ引出されやうとしたが、却々應じない。飽迄ミチヤの側へ戻らうと身を藻掻いた。ミチヤも叫び聲を立てゝ、彼女の側へ寄らうと爭つた。が、到頭彼も組み伏せられた。

で、裁判長は莫斯科の醫者を喚び入れて、イヴンの容態を訊いた。醫者はそれに應じて、あの患者は一昨日自分の許へ診て貰ひに來た、自分は今のやうな發作の將に來らんとして居ることを警告したが、彼は療養を拒んで歸つたと申立てたまゝ引き退つた。カテリイナの差出した手紙は新たに證據物件の中に加へられた。傍聽人は最後の大破綻に依つて、皆電氣にでもかゝつたやうに昂奮した。そして、片唾を飲んで、檢

事の論告と辯護士の辯護振りを見やうと待つて居た。

檢事は額に冷たい汗を滲ませて、聲を顫はせながら論告を始めた。彼は此論告を一生の大事業と、白鳥の歌と心得て居た。實際、彼は九ヶ月後に急性の肺病で死んだから、自分で白鳥が死ぬ間際の歌に例へたのも無理はない。始めは多少聲を顫はせたが、間もなく氣力を恢復して、最後迄滿堂を傾聽せしめた。で、論告が終るや否や、彼は殆ど氣を失つた。

「陪審官諸君」と、檢事は始めた。「此事件は全露西亞中に動搖を齎らした。併し其處に何の驚くべきものが有るか、特に恐怖すべき何物が有るか。吾々は寧ろ斯くの如き犯罪に馴れて居る、それこそ怖ろしいもので有る、斯かる暗黑な行爲が吾々を恐怖させぬやうに成つたといふ一事こそ、眞に怖るべきもので有る。斯く吾々が冷淡に成つたのは職として何に歸因するか。」

斯く檢事は大體論から始めて、露西亞に於ける現代の生活から論じ始めた後、漸く本題に入つた。「要するに、カラマゾフ家が全露西亞を通じて餘り有難くもない名聲を

走せたのは何に由るか」と、彼は續けた。「想ふに、今日の教育有る階級の根本的特徴が、此家庭の中に反影して居るからで有る。一滴の水に映つた太陽のやうに反影して居るからで有る。此悲慘な最後を遂げた、無節制な老人のことを考へて見よ。彼は精神的方面に於てこそ發達しないが、其精力に於ては絶倫で有る。彼は一生の中に肉慾の他に何等の快樂をも認めない。彼は子供を自分と同じやうに育て上げた。彼は父としての義務に對して何等の感情も有しない。有らゆる國民としての義務を嘲笑して居た。實際下劣な個人主義の完全な標本で有る。

「此父の子としては、一人は被告として吾々の前に立つて居る。で、先づ他の二人に就いて一言したい。其の長は華やかな教育と絶大な力とを具へながら、有らゆるものに信仰を失つた、近代的青年の一人で有る。彼は到る處自己の意見を發表した。殊に近來は目下の事件に密接の關係有る、前の下男にしてゝ、恐らくはフョドールの私生兒なるスメルヂヤコフと交通して居た。豫審の際、彼は涙を流しながら、自分がイヴンの大膽な持論に恐怖を感じて居た次第を述べた。即ち彼に取つては此世の有らゆるも

のが正當で有る、未來に於ては何物をも禁じられないと云ふのだ。自分の考へに據れば、三人の中で性格上父の子たるに恥ぢないものは、實にイヴン・フョドロヰッチで有る。

「で、三番目の子だが、これは兄の憂鬱な破壞的人生觀を共有しない。寧ろ『人民の思想』にかぢり着いて居る。歐洲文明の腐敗的精力から遁れて、『故鄉の土』に歸らうとして居る。例へば、物に怖ぢた子供が母の萎びた乳房に縋つて眠らうとするやうに、母國の土に歸らうとして居る。

「偖て吾々の被告として立つて居る長子は如何でせう」と、檢事は續けた。「彼の兄弟二人が歐洲主義と、人民の主義とを代表して居るのに對して、露西亞其物を代表して居るらしい。彼は善と惡との驚くべき混合で有る。彼は貪婪ではない。が、金子を持つて居なければ成らない、而も澤山の金子を——金子さへ有れば彼は寛大で有る、一夜の中に自分の持てる總べてを費消して仕舞ふ。が、一度金子がなく成れば、其必要に迫られた場合には何んな事でも仕兼ねない。

「私どもは先づ『靴も穿かずに』裏庭を跳ね廻つて居る野放しの子を見る。敢て言ふ、私は被告の辯護を他人にのみ讓るものではない。私は被告の罪を鳴らしもするが、辯護もする。私も亦人間である、私も亦子供の性格に及ぼす家庭の影響を認めないものではない。が、其子供は生長して、士官に成つた。邊境の町へ追ひ遣られて、酒を飲んだり、決鬪をしたり、後先見ずの生活を送つて居た。彼は何よりも金子を必要とした。永い間父と爭つて、やつと最後の六千留布を受取つた。此上の要求を拋つといふ、父に宛てた手紙も殘つて居る。

「其時彼は始めて、高尚な性格と、立派な教育とを受けた貴婦人に會つた。私は再び其詳細を繰返すことを敢てしない。其處に高潔な犧牲の精神が現はれて居る。德操の前には、自己の持てる最後の一錢をも犧牲にして省みざる高潔な衝動を窺ふことが出來る。が、一方では又同じ貴婦人の手から、三千留布の金子を奪つて、新たに愛する女と一緒に一夜の中に費消して仕舞ふと云ふやうな、恥を知らざる一面も有るではないか。吾等は此二つの何れを信じたら可いか。恐らくは二つながら眞で有らう。第一

の場合には、彼は心から高潔で有る。第二の場合には心から下劣で有る。何故か。想ふに彼はカラマゾフ系の性格を具へて居るからで有る。矛盾した兩極端を結合することが出來る、最高の高さにも上ることが出來れば、最低の土の底にも沈むことが出來る性格を具へて居るからで有る。即ち我が母國なる露西亞と同じやうに、有らゆるものを包含して、有らゆるものに堪へ得るので有る。

「序ながら、陪審官諸君、自分は其三千留布に就いて一言して置きたい。斯くの如き人間があの樣にして、それだけの恥辱と不名譽とを忍んで、其金子を受取りながら、其日に半額だけ別にして、小さな囊に入れて仕舞つて置くといふやうな用心が出來るでせうか。而も有らゆる誘惑と必要とにも拘はらず、一ケ月の間持ち廻つて居たといふやうな堅固な性格を持つて居るでせうか。そんな事は迚も考へられない。が、此點は後にして置く。」

次に檢事は被告のグルシェンカに對する關係を說いて、同時に被告の父も同じ女に囚へられ、二人ながら時を同じうして一人の女に迷つたといふ不思議な一致を歎じた。

「一ケ月の間被告は狂氣のやうに成つて、絶えず嫉妬の念に驅られて居た。誰を？現在の父が相手です！　殊に不好ないのは、其老人が三千留布の金子で女を釣らうとして居る、而も其金子は彼が自分の財産と、母からの遺産の一部として、自分の財産と認めて居るので有る。私は被告の置かれた地位が忍び難いもので有ることを許さゞるを得ない。左様成つたら、何んな人間でも狂氣に成つたかも知れない。それは金子故ぢやない、其金子が皮肉にも彼の幸福を奪ふ手段として用ゐられたといふ事實で有る！」

檢事は猶進んで、親爺を殺さうといふ一念が被告の頭に這入つた次第を說いた。「私は被告が前以て最後の瞬間を心に描いて居たと確信した。が、これは只心に描いて居たばかりだ、或は有得べき事として考へて居たばかりだと信じて居た。が、今日此法廷に差出された書類を見ては、人殺しが前以て熟慮決定された事實を認めざるを得ない。或は被告がそれを書いた時には醉拂つて居たといふ人が有るかも知れない。が、それは此手紙の價値を減ずるものではない。寧ろ其反對で有る。被告は醒めた時に計

劃したから、醉拂つた時に書いたので有る。醒めた時に計劃しなかつたら、醉拂つた時に書く筈がない。が、私は又被告が全力を盡して最後の大破綻を避けやうとした事實を認め得るので有る。」

かう言つて、檢事はミチヤがサムソノフからリヤガフイ、ホーラコフ夫人と一日中駈け廻つて金子を借りやうと努力した次第を述べた。そして、總べての努力が無効に歸した時、彼は不意に女の行衞を失つた。「で、若し女中が主人は前の戀人と一緒にモクロウに居ると告げたら、何事も起らずに濟んだかも知れない。其代り女中は頭を失つたでせうよ。が、其際それ程狂氣のやうに成つて居ながら、玄翁を掴んで走り出したのを注意して頂きたい。何故か。被告は一ケ月も前から何んな物でも武器として役立つことを考へて居たからで有る。決して無意識に知らず〳〵其玄翁を掴んだ譯ではない。今や被告は父の家の庭に立つた。そして、女は其處に敵手の腕に抱かれて、恐らくは自分を笑つて居るので有る。左様いふ場合、被告が窓から覗いただけで、怖ろしい禍が起るのを心配して、慎重に其場を立ち去つたなぞといふことが信じられやうか。

吾々は彼の性格を知つて居る、又彼が家の中へ這入る合圖を心得て居ることも知つて居るので有る。」

此際檢事はスメルヂヤコフに對する嫌疑を一笑に附すべきものとした。「第一にスメルヂヤコフが人殺しだと言ひ出したのは被告自らで有る。而も被告は其時からそれを確めるに足る一つの證據をも差出さない。そして、これに同意した者は只の三人で有る――被告の兄弟二人及びグルシェンカ。イヴンは今日始めて彼の疑ひを發表した。が、彼は此の二ケ月といふもの、兄の犯罪に就いて、全然吾々と同意して居たので有る。弟に至つては、被告自身の言葉と顏色から見たと云ふより外、スメルヂヤコフの犯罪を支へるやうな事實を何一つ持つて居ない。グルシェンカに至つては更に驚くべきものが有る。『被告の言葉を信ぜよ。あの人は嘘を吐くやうな人ぢやない。』これがスメルヂヤコフに對して擧げられた證據の全體ですよ。そんな事が信じられませうか。」

此處で檢事は「發作的狂氣の爲に命を縮めた」スメルヂヤコフの人物に就いて一言した。即ち微弱な智力を持つた、そして智力以上の哲學思想に依つて、心の平衡を失

つた人間で有るといふので有る。「其の哲學たるや、實行の上では、主人にして父なるフョドールの亂暴な生活から學び、又理論の上では、退屈凌ぎに下男の腦力を犧牲にして、自ら娛しんだイヴンとの不思議な會話から得たものらしい。其上、彼は癲癇の發作の爲に健康を害して、雛ッ子程の勇氣も持つて居なかつた。が、正直で、主人には信用されて居た。だからドミトリの强迫に會つて、心ならずも彼の用を勸め、主人を欺いて居るといふことは、絶えず其心を苦しめて居たに違ひない。それに彼は自分の眼の前に發展する形勢から、何か怖ろしい事が起るだらうといふ强い豫覺を抱いて居た。が、イヴンさへ家に居れば何事も起るまいと、此人一人を自分の保護者のやうに賴んで居た。が、其のイヴンさへ去つて仕舞つたのです。彼が恐怖の餘り間もなく癲癇の發作に罹つたのは無理もない。或は彼が故と發作を佯つて居たのではないかといふ凝問も有りますが、では、何の爲めにそんな眞似をしたかといふことに成る。人殺しを爲やうなぞと計劃(たくら)んで居る者が、其前に發作なぞ起して、家中の注意を惹いた處で何に成りませう。

「陪審官諸君、先づ兇行の有つた夜はフヨドールの家に五人居ました――被害者自身に老人の下男夫婦、これは疑ふ餘地がない。後には被告とスメルヂヤコフの二人だが、他に疑ふ者がないからと言つて、私どもは被告の言葉に從つてスメルヂヤコフを疑ふことが出來るでせうか。他に少しでも疑ひを懸ける者が有つたら、第六人者が有つたら、恐らく被告自身もスメルヂヤコフに罪を被せることは憚つたでせうよ。

「で、假りにスメルヂヤコフが犯人だとして、何の爲めにそんな大罪を犯したのでせう？　それだけの事をするには、何か目的が有るに違ひない。が、彼には被告が持つて居るやうな動機は――憎みだとか、嫉妬だとかいふやうなものは一つもない。すれば、只金子の爲めに殺したといふことに成る。然るに彼は他人に――最も密接な關係の有る被告に、金子のことも合圖のことも皆話して居る。彼は只自分を裏切る爲めにそんな事を話したのか、それとも仲間に引き入れる爲めか、私はそれが承はりたい。あれ程大膽な仕事を想ひ付いて、それを實行する程の人間が、自分の外には此世に誰も知らない、自分さへ默つて居れば、誰も推察することの出來ないやうな事實を無闇

に他人に語るものでせうか。

「若し彼が默つて居たとすれば、假令人殺しで疑はれたとしても、金子を取る爲めに殺したとは思はれない。此世にそんな金子の存在を知つて居る者は、彼の外にないからで有る。で、又金錢づくの人殺しでないとすれば、人は先づそんな事をするやうな動機の有る者から疑つて、動機のない者は後廻しにする。殊に彼は主人の信用を得て居たといふから、疑はれても一番後に疑はれる譯で有る。然るに彼は何も彼も被告に話した。そんな事が論理的でせうか。

「又、彼が發作を佯つたといふことは、前にも言つた通り一つも根據がない。そんな事をすれば、第一グリゴリイが折角腰の療治をしやうと思つて居たのを熄めて、夜番をするかも知れない。第二に一人も夜番をする者がなければ、主人の方で警戒する。それに癲癇なぞ佯つて、寢床の中でうん〳〵唸つて居りや、爺さんも婆さんも一晩中寢ないで起きて居ることに成るではないか。」

「が、それでも自分が疑はれるのを怖れて、故と發作を佯つたとしますか。そして、

金子や合圖のことを被告に告げて、人殺しをするやうに誘惑したとしますか。そして又、被告が人殺しをして、金子を持つて行つて仕舞つた時に、スメルヂヤコフも起き上つて、家の中へ這入つて行く――何の爲めに？　二度主人を殺して、既に持つて行かれた金子を再び盗む爲めか。諸君、貴方がたはお笑ひなさる。併し私は眞面目で言ふのですよ。」

「加之、スメルヂヤコフは豫審に於いて、自ら進んで金子の封筒と合圖のことを被告に告げたのは、自分だと明白に言つて居ますぞ。若し彼が共謀者で有つたとすれば、容易にそんな事を白狀する譯がない。然るに彼は平氣でそれを言つて居る。罪の無い者でなけりや出來ないことで有りませんか。此の大破綻と疾病とに基づく憂鬱な發作の爲めに、彼は昨夜自殺して、遺書まで書いて居る。何うせ死ぬものなら、『自分こそ人殺しで有る。カラマゾフではない』と附け加へて置くに、何の差支へが有りませうぞ。が、彼は左樣しなかつた。良心の苛責の爲めに自殺した者が、何の爲に自分の犯罪を白狀しないのでせう？

『で、今日三千留布の金子が法廷へ持出されて、これは封筒の中に這入つて居た金子と同じ金子で有る、證人は昨夜スメルヂヤコフから受取つたと申立てたので有る。私は此金子が持出された後の痛ましい光景を再叙するに忍びない。が、證據としては金子だけで有る。私は只誰でも金子は持つて居る、それだけでは封筒の中の金子と同じだといふ證據には成らないといふことを注意するに止めたい。

「又イヴン・カラマゾフは昨日左樣いふ重要な通知を眞の犯人から受けながら、何故今迄靜乎（ちつ）として居たのでせう？　恐らく彼は吾々が今日見たやうな健康狀態に有つたので有る。左樣いふ狀態に於て、不意に彼はスメルヂヤコフの死を聞いた。で、直に考へた。『これは一つあの男の上に有らゆる非難を被せて、有らゆる罪科を被せて、兄を救つて遣らう。自分は金子を持つて居る。これを出してスメルヂヤコフが死ぬ前に自分に渡したのだと申立てやう。』勿論これは善くないことで有る、死んだ人の上に罪を被せやうとしても善くないことで有る。が、彼は知らず〳〵罪を被せたのだとしたら如何でせう？　彼が變に成つた頭で、

實際其通りだと想像したのだとしたら如何でせう。諸君は只今の光景を見られたでせう。彼は此處に立つて居た。が、彼の心は何處に有つたでせう？

「次に被告自身が犯罪を決行する二日前に書いたといふ手紙が提出された。犯罪はこれを書いた人の手に依つて、プログラム通りに行はれたので有る。恐らく彼は、日頃憎しと思ふ敵手を見るや否や、憤怒に燃えて殺したものでも有らう。が、玄翁の一撃に相手を殺した後では、隈なく女の在所（ありか）を捜したに違ひない。愈々女が居ないと見極めた時は、枕の下に手を入れて封筒を取出すことを忘れなかつたに違ひない。

「私は特にこれを特殊な事實として擧げるので有る。若し彼が窃盗の常習犯で有つたら、死骸の側に裂いた封筒を捨てゝ置くやうなことはしなかつたらう。例へば、これがスメルヂヤコフで有つたとしたら、死骸の側で封筒を開くやうな勞は取らないで、其儘持つて遁げ去つた筈で有る。彼は封筒の中に金子の這入つて居ることを見定めて居る、又其封筒さへ持つて行けば一人も泥棒が有つたなぞと知るものはない。諸君、スメルヂヤコフが床に封筒を捨てゝ遁げたでせうか。

「斯樣なことは、自分の金子を盗んだ泥棒から自分の財産を奪ひ返すやうに信じて居る被告にして、始めて出來ることで有る。彼は封筒を見附けた。が、其中に金子が有るか何うかは確に知らないから、直に破つて見た。そして、後に有力な證據を殘して置くとも氣が附かないで遁げ出した。後から下男の喚ぶのを聞いた。爺さんは彼を捕まへた、そして玄翁で殴り倒された。

「被告は憐憫の情から爺さんを見に飛び下りたと申立てゝ居る。が、そんな場合に同情が示されるもので有らうか。いや、彼は彼の犯罪の唯一の證人が死んだか生きたかを見定めに下りたので有る。そして、彼は全身血に塗れて居るとも知らないで、町の中へ飛び出した。左樣いふことは、かゝる場合に、かゝる犯罪者に於ては屢々見る處で有る。即ち一方では惡魔のやうな狡智を見せながら、他の點では丸で注意を逸して居る。が、此際彼は只一つの事を考へて居た――女は何處に居るか。

「あれ程有らゆる人に對して嫉妬を感じて居たカラマゾフが、第一の戀人の前には即座に自分を退いたと言はれて居る」と、檢事は續けた。「更に可訝しいのは、彼は此の怖

ろしい敵手を丸で念頭に置いて居なかつたらしい。彼は只此敵手を遠い危險のやうに見做して居た。カラマゾフは何時も現在に生きるからで有る。が、彼はそれを女の一生の希望で有ると知るや、屑く自ら斷念した。

「私は此處に被告の性格の想ひ掛けない一面を見る。彼は不意に正義に對する熱望と、愛に對する女性の權利の認識とを現はして居る。而もそれが女の爲めに父の血に手を汚した其瞬間に於てで有る。實にこれ注がれた血が既に復讐に向つて叫んで居る爲ではないか。彼は今や進退谷まつたので有る。被告の如き性格の人間に取つては、此の怖ろしい地位から遁れる道は只一つしかない。即ち自殺で有る。で、彼は直樣女を追ひ掛けた、死後の想ひ出に、世界中の大振舞をした。そして、其場で、彼女の脚下に自分の頭腦を打碎いて、自己を罪したら何うだ！　女も少しは可哀相と思つて呉れるだらう！

吾々は此處に、ロマンティックな絶望と感傷との中に、前後忘却の中に、猶絶えず彼の心を刺戟する或物を見る、絶えず刺戟して彼を死に導く或物を見る。或物とは即

ち良心の苛責で有る。が、此處に至つては最早警戒の必要がない。一度ならず二度ならず彼は自分の意圖を自白した。大ッ平に口にした。ペロートンの前では言ふ迄もない、モクロウへ行く道すがら、馭者に對して、『お前は知つて居るか、お前は人殺しを乘せて行くのだぞ』と迄公言した。が、宿へ着いて見ると、迚も愜はない敵だと思つた相手は、それ程愜はない敵手ではなかつた。彼の勝利は申分のないもので有つた。此處に被告は恐らく彼の魂の受くべき最も怖ろしい境遇に置かれたので有る。彼は最早死ぬにも死なれない！

「が、彼の情熱は一時捕縛の恐怖ばかりでなく、良心の苦痛をも忘れさせた。最後の怖ろしい終局は猶遙か彼方に有る。少なくとも、明くる朝迄位は誰も自分を捕へには來ない。從つてなほ數時間の餘裕が有る譯だ。それで澤山だ、澤山だ！　數時間有れば、人間はいろんな事が考へられる。想ふに彼は斷頭臺へ引かれて行く罪人のやうな心持を經驗したに違ひない。猶長い町が有る、數千人の見物にも會ふことの出來る。彼はなほ自分の前に無限の生命を持つて居るやうな氣がしたに相違ない。で、町の角

を曲つた。おゝ、何でもない、〳〵、未だ自分の前には全町の長さが有る。で、最後に斷頭臺へ！

「彼の心は紛亂と恐怖とに滿ちて居た。が、兎に角持つて居る金子の半分を分けて何處かへ隱した。他に枕の下から奪つた三千留布の金子の半額が消失した理由を說明するの道がない。彼は前にもモクロウへ行つたことが有る。屋根の下や壁の裂け目も好く知つて居る筈だ。何の爲にそんな事をした？　勿論最後の運命は眼前に有る。が、彼は既に女を得たのだ。何れにしても金子は必要である。金子さへ有りや、男は何時でも男一匹で有る。尤も、そんな場合にかゝる用心は不自然だと思はれるかも知れない。が、被告は自ら一ケ月前にあの昂奮した際に當つて、金子を二分して小さな囊に纏ひ込んで置いたと主張して居るではないか。

「で、彼は追手がかゝるのも忘れて、女の前に跪いて居た。彼の心には未だ防禦の用意が出來て居なかつた。眞個彼は不用意の間に捕へられて、運命の支配者たる裁判官に面したので有る。

「最初被告は恐懼の餘り、甚だしく嫌疑を拓くやうな言葉を發した。『あゝ、血！　私はそれに値して居る！』が、彼は直に自ら抑制した。『若し私が殺したのでなけりや、誰が殺したのだ？』といふやうなことを言ひ出した。『私でなけりや』なぞといふのは極めて不用意な言葉で、一見如何にも卒直に見えるが、それこそ怖ろしい狡智で有る、カラマゾフ家の卒直で有る。私はこんなに正直だ。貴方がたはこれでも私を疑ふのかと、早くも嫌疑を遁れる手段に違ひない。

「で、吾々は身體の搜索に懸つた。それが被告の氣に障つたらしい。金額は三千留布の半分しか見當らなかつた。疑ひもなく、彼は腹を立てゝ默つて居る間に、小さな囊の虛構を想ひ附いたものらしい。私は何處へ其袋を捨てた。又何の布でそれを造つたか、一々細かに訊問した。が、被告は一つも明白な返答を與へない。それから二ケ月經つた今日に及んでも、彼はなほ一として其奇怪な申立てを確證するに足る證據を擧げ得ない。只自分の名譽に掛けて、それを信ぜよと言ふばかりだ。あゝ、吾々も悦んでそれを信じやうとして居る。吾々と雖も血に渴した豺狼ではない。只一つでも可い

から被告の利益になる事實を擧げよ。吾々は悦んでそれを信ずるもので有る。が、其證據は、實質的な事實でなければ不可ない。兄弟の見た被告の顏色とか、喧がりで胸を打つたのは小さな袋を指したのに違ひないかといふやうな立證では、何とも致し方がない。新らしい事實さへ上がれば、吾々は悦んで吾々の起訴を撤回するので有る。が、今や正義は叫んで居る。吾々は何物をも撤回することが出來ない。

「で、才幹有る有名な辯護士は何と言はれるか知れないが」と、檢事は附け加へずに居られなかつた。「何んなに感動的な雄辯が振はれやうとも、陪審官諸君、諸君は正義の殿堂に立つて居ることを記憶せよ。正義の戰手として、眞正な露西亞の戰手として立つて居ることを記憶せよ。然り諸君は此時此處に露西亞を代表して立つので有る。諸君の判決は全露西亞中に反響されるで有らう。露西亞は諸君の判決に依つて勵まされもすれば、失望もする。必ずや父を殺した子を正しとするやうな判決を下して、一代の歸趨を誤るなからんことを！」

檢事が辯說の效果は非常なもので有つた。彼は演說を終るや否や、殆ど氣を失ふば

かりに成つて次の間へ退出した。別に法廷で喝采するものはなかつた。が、眞面目な人々は皆滿足した。皆ミチヤの顏を眺めた。彼は檢事の論告の間、始終拳を握つて齒を喰ひ縛りながら、頭を垂れて居た。只一二度顏を上げて聽いて居た。殊にダルシェンカの名が出た時左樣で有つた。檢事がモクロウで彼を追窮した次第を語つた時は、頭を上げて、非常な好奇心を以て聽いて居た。或點では、殆ど飛び上つて、何か叫び出さうとしたが、漸く吾を制した。そして、只蔑むやうに肩を聳やかした。

裁判長は一時休憩を宣した。傍聽席はがや〳〵と騷めき立つた。

「いや、重みの有る論告だ」と、一人の紳士が言つた。

「が、餘り心理作用に渡つたやうですね」と、他の一人が答へた。

「併し眞理ですよ、眞個眞理ですよ。」

「左樣です、其點では一流ですね。」

「ですが」と、又一人が合槌を打つた。「露西亞人は皆フヨードルのやうなものだなぞ。」

と、吾々迄あの論告の中に引込みましたぜ。」

「餘り夢中に成つたのですよ。」

「兎に角神經質な人ですね。」

「吾々は笑つて居るが、被告は何んな心持がして居るでせうね？」

「左樣です、ミチャは何んな氣がして居たでせう？」

が、鈴が鳴ると皆元の席へ歸つた。フェチュコギッチは演壇に立つた。有名な辯護士の最初の一言で、皆森(しん)とした。傍聽人の眼は悉く彼の上に注がれて居た。彼は自信が有るやうに卒直に問題へ這入つた。

「私は新聞で始めて此事件を見てから、强く被告に同情するやうな何物かに打たれた」と、彼は言ひ出した。「最初からこんな事を言ふのは不利益かも知れないが、今私の心の中に思つて居ることを卒直に述べて置きたい。忽ふに、此事件には被告に不利益な證據の數々が鎖のやうに繋がつて居る。が、同時に、一つ〳〵調べて見ると、批判に堪へ得るやうな事實は一つもない。私は今怖るべき事實の鎖を解(ほど)ぐして、一つ〳〵吟味して見やうと思ふので有る。

「陪審官諸君」と、彼は急に反對の鋒を向けた。「私は新たに此地に來て、偏見と云ふものは一つも持つて居ない。被告は亂暴な、騷々しい人間だといふが、未だ私を侮辱したことはない。が、恐らく彼は此町の何百人といふ人々を侮辱したことでせう。從つて多くの人が豫め彼に對して偏見を持つて居る。失禮な申分だが、檢事も日頃の正しい獨立した性格にも拘はらず、吾が不幸な被告に對して、大分誤つた偏見を持つて居られるやうで有る。が、それも自然左樣有るべきことで有る。被告は左樣いふ偏見に餘りに能く値打(ねうち)して居るので有る。で、若し職に司法に處るものが、所謂小說を創作しやうといふやうな技巧的本能に驅られたとすれば、宜しくないことは言ふ迄もない。特に其人が心理的洞觀の能力を具へて居る時に然りで有る。私は此處へ來る前に彼得斯堡で友人から忠告を受けた。又私自身も、今度私の反對に立つ檢事が心理的洞觀に於て近年法曹社會に名聲を走せた人物で有ることを知つて居た。が、心理解剖といふものは、兩刃の刃物のやうなもので有る。(笑聲起る。)何卒私の比喩をお宥し下さい。私は檢事の論告から一例を擧げて見やうと思ふ。

「被告は庭から遁げ出さうとして、石垣に上つた處を下男に捕へられた。そして、其下男を玄翁で打ち倒した。それから庭に飛び下りて、相手が死んだか何うかを確める爲めに五分間費したといふことだ。檢事は同情の念から左樣したといふ被告の申立てを飽迄拒まれる。』斯樣な場合に、同情の念なぞの起るといふのは不自然て有る。被告は只、自己の犯罪の唯一の證人が死んだか生きて居るかを確める爲めに戻つたのだ。從つて彼が父親を殺したといふ事實をも證明して居る』と。

「此處に心理上の說明が有る。で、此の人殺しは證人が生きて居るか否かを確める爲めに立ち戻るだけの用意を持つて居た。而も彼は父親の死骸の側に檢事自身も言はれるやうな驚くべき證據物、即ち封筒の烈けた切れを捨てゝ置いたので有る。斯くの如くにして、一方では遽てゝ遁げるとて、床の上に大事な證據物を殘して置くやうな、不用心な人間が、二分間後に他の人間を殺した時には、最も冷酷な用心を具へて居るものと推定することが强ひられるので有る。が、若し私が人殺しをした時に私の不利益に成るやうな證人の生死を確めに駈け戻る程冷酷な人間だとすれば、何うして他の

證人に出會する危險を犯して、五分間の間も手に掛けた人間の面倒を見て遣るでせうか。何うして手巾を血に濡らしたり、頭の血を拭つて遣つたりして、後に證據を殘すやうなことをするでせうか。被告がそれ程冷酷な人間だとすれば、何故其下男の息の根の止まる迄、滅多打ちに打ち續けないでせうか。そして證人に關する有らゆる心配から遁れやうとしないでせうか。

「況んや被告は證人の生死を見に戻りながら、小徑の上に他の證人を殘して居る。即ち二人の女の許から奪つて來た玄翁で、何時でも彼が其處から持つて來たものだといふことは證明されるので有る。而も其の玄能は下男の倒れて居た傍に有つたのではない、十五間も離れた所に捨てゝ有つた。これは被告が下男の命を氣遣ふ餘りに、われを忘れて拋り出したものでは有るまいか。が、若し下男に對して後悔と憐憫とを感じ得るものとすれば、彼は又父親の横死に就いても罪がないことを示して居る。被告が父親を殺したものとすれば、決して憐憫の情から下男に走る筈はない。彼の心は自己保存に集中されて居た筈で有る。彼は憐憫の爲めに頒つ何物をも有しない。それは論

外で有る。此處に吾々は二つの違つた心理上の解釋を持つ。これを利用する人次第で、何んな結果にでも成るではないか。諸君、私は只心理解釋の濫用を一言すれば足るので有る。」

再び賞讃と笑聲が法廷にどよめいた。

「陪審官諸君。」と、彼は又口を開いた。「吾々は三千留布の金子が盗まれたと言はれて居る。が、そんな金子が本當に存在したでせうか。何人も知らない。吾々は皆其金子の話を聞いた。が、見た者はない。只一人それを見て、封筒の中に這入つて居ると言つたものは、下男のスメルヂヤコフで有つた。彼は被告と被告の弟のイヴンとに其事を話した。グルシェンカも又聞いたといふことで有る。が、此三人の一人も實際見たものはない。

「で、スメルヂヤコフは何時それを最後に見たので有らうか。若し主人が寢床の下からそれを取出して、默つて元の金庫へ戻して置いたとすれば如何でせう？　被告は寢床の下から其金子を拔き出したと言はれて居る。が、寢床は少しも亂れて居なかつた。

それは明らかに豫審調書に載つて居る。何うして被告は寢床を亂さずに其金子を引き出したのでせう？　何うして血の着いた手で、寢床を汚さずに、それが引き出されたのでせう？

「が、人或は言はん、床の上に落ちて居た封筒は何うだと。これに就ては一言する必要が有る。私は今檢事自らの口から、其封筒が床の上に落ちてさへ居なけりや、世の中に誰も其封筒の存在を知る者はない、從つて被告がそれを盗んだことを知る者もないと言はれるのを聞いて、稍驚いた。で、此紙片は、檢事自らの承認に依つて、剽盗の行はれたといふ唯一の證據で有る。併し只紙の片が床の上に落ちて居たといふ事實が、直に其中に金子が有つた、そして其金子が盗まれたといふ證據に成るでせうか。併しスメルヂヤコフが封筒の中の金子を見たと言はれるかも知れない。が、何時　何時それを最後に見たのです。私はスメルヂヤコフに會つて聞いたが、彼は此事件の二日前に見たといふことで有る。若し左樣だとすれば、老フョドールは女を待つ間のもどかしさに、『こんな封筒が何の役に立つ、現生で見せた方が寧ろ有効で有らう』と、一

人言つて、其封筒を破つて、金子を取り出したと想像することが出來ないでせうか。然る時には、床に紙片が落ちて居たのも極めて自然なことに成る。勿論持主だから、後に證據を殘すことなぞに心を勞する必要はない。

「諸君、此說は極めて有り得べきことではないでせうか。若し左樣いふことが有つたとすれば、剽盜の嫌疑は地に落ちる。金子がなければ盜んだ者も無い道理で有る。若し床の上に落ちた封筒が、其中に金子の這入つて居た證據に成るとすれば、何うして反對に其金子が主人の手で取り去られたから、床の上に落ちて居たと言はれないでせうか。

「で、若し或物が盜まれたとすれば、何處からか其物が出て來なければ成らない、少くとも其物の存在が疑ひを挾む餘地なき迄に證明されなければ成らない。併し何人も其金子を見た者はない。

「成程、被告は終夜闇いで金子を撒き散らして居た、又手に千五百留布の金子を持つて居た。が、千五百留布だけ出て、他の半額が何處でも見附らないといふ事實が、其

金子は同じ金子でない、封筒の中入に這入つて居た金子ではないといふことを證明して居はせぬか。豫審に於ては、時間の計算上、被告は二人の女中の許から、眞直にベロートンの許へ走つたとされて居る。自宅へ歸る暇もなければ、何處へ行く暇もない。從つて被告は始終誰かと一緒に居たので有る。三千留布を二分して、半分隱して置くやうな眞似は出來ない筈だ。檢事は何處かの屋根裏か、壁の裂け目に隱したものと推定して居られる。斯くの如き推定は餘りに奇怪で小說的で有る。で、若し此推定が破れたとすれば、剽盜の嫌疑は風に散る。一體千五百留布は何う成つたのでせう？何んな奇蹟に依つて消えて仕舞つたのでせう？　而も吾々はこんな話から人一人の一生を陷入れやうとして居る！

「彼は又何處で其千五百留布を得たか、說明が出來ないと言はれて居る。が、其金子の出所に關して被告が與へた說明は、實に明瞭で、此說明よりも眞實らしく、被告の性情とも一致して居るものは他に無いではないか。檢事は又、被告のやうに、あれ程侮辱的な態度で許嫁の女から沒された金子をおめ〳〵受取るやうな、意志の薄弱な人

間が、其金子を二分して、後の用心に半分衿に縫ひ込んで置くなどといふことは、有り得べからざることだと主張して居られる。が、若し左樣いふことが有り得たら何うでせう？　被告は檢事が考へて居られるやうな人間とは、丸で違つた人間で有つたら何うでせう？

「なほ被告が此事件の一ヶ月前、一日に三千留布を費消したといふ證人が數多有る。が、其證人どもは何んな人間でせう？　彼等が立證の價値は既に法廷で曝露された、加之、他人の手に有る金子は常に大きく見えるもので有る。何人も其金子を勘定したものはない。只見たところで判斷して居るので有る。諸君、心理解釋は兩刃の武器ですぞ。

「此事件の一ヶ月前に、被告はカテリイナの手から　千留布の金子を托された。が、果して彼女の言ふやうな侮辱的な態度で渡されたものでせうか。それが問題で有る。此事に就いて、あの婦人の最初の申立は全然それと違つて居た。二度目の申立では、吾々は只憤怒と復讐の聲を開いた。で、證人が最初不確實に申立てたといふ事實が、次

の申立も矢張不確實で有り得ると推定する權利を吾等に與へる。檢事は此話に觸れることを敢てしないと言はれた。それは宜しい。私も又それに觸れやうとは思はない。が、復讐の念に驅られた女の言葉は、多く誇大されて有ると推定することは許されないからうか。實際あの女は誇大して居た、特に被告に金子を渡した際の侮辱と抑損とに於て誇大して居た。

「檢事は猶被告が其の同じ日に金子を二分して、半分を小さな嚢に縫ひ込んで置いた事實を拒まれる。そんな事は被告の性格にないと言はれるので有る。が、檢事は自らカラマゾフの性格を解して、同時に兩極端を考へ得るものだと叫ばれたではないか。カラマゾフは左樣いふ兩面の性質を持つて居るので有る。加ふるに、其處に戀愛が有る。彼は其爲に金子を必要とする。其方が酒を飲んで騒ぐよりも一層重大で有る。被告がそれを了解し得ないで有らうか。

「で、時が經つた。フョドールは何うしても被告に三千留布の金子を與へない。『あの金子を親爺が呉れないとすれば』と、彼は考へた。『俺はカテリイナの前に泥棒の地位

に從かれるより外はない。』其時彼はカテリイナの許へ行つて、頸の周りに持つて居る千五百留布を差出して、『私は碌でなしだ。が、泥棒ではない』と言はうかといふ考へが起つた。何うして貴方がたは被告に名譽（オノア）の感覺が有るのを拒むのでせうか。左樣です、被告は時々間違つて居るとは言へ、名譽の感覺を持つて居る。そして、それが暗として情熱とも成るので有る。

「が、事件は愈々こんぐらがつて來た。彼の嫉妬心は最高調に達した。『で、若し此金子をカテリイナに返したら、何處にグルシェンカと出奔する旅費が得られやうか。』其後一ケ月の間、彼が酒を飲んだり、喧嘩をしたりしたとすれば、恐らく彼の忍耐力に餘るやうな、あはれな、緊張した心狀態に有つたからで有る。彼は末の弟を使者に立てゝ、最一度三千留布を父に乞はしめた。が、其返辭を俟たずに、家の中へ躍り込んで、大勢の前で老人を打擲した。これで愈々親爺から金子を得る望みは絶えたので有る。

「同じ日の夕方彼は弟の前に自分の胸の上部を敲いて、自分は未だ破戸漢でなく成る

手段を持つて居る、が、矢張破戸漢の儘で果てるだらうと誓つた。彼は其手段を盡すだけの意力を持つて居ないからで有る。何故檢事はアレキセイ・カラマゾフのあの自然な、心から出た立證を拒まれるので有らうか。何故反對に、何處かの屋根裏か、壁の烈け目に隱されて居る金子を信ぜよと强ひられるので有らうか。

「又同じ夕方、被告はあの致命的手紙を書いた。此手紙こそ被告が盜賊を働いたといふ最も重要な證據で有る。が、第一、此手紙は醉漢（よつぱらひ）が苛々して書いたもので有る。第二に、彼は自分が見たこともない、スメルヂヤコフから聞いただけの封筒に就いて書いて居る。第三に、彼は實際それを書いた、が、何うして彼がそれを實行したといふことを證據立てられやうか。被告は枕の下から封筒を引き出したか、金子を發見したか、實際金子は存在したか。で、被告が走つて行つたのは、金子を奪る爲めでしたらうか。彼が前後不覺に駈け出したのは、金子を奪（と）る爲めではない、女の在所（ありか）を搜し出す爲めで有る。彼は自分の書いたプログラムを實行する爲めに、豫め考へて置いた盜賊を働く爲めに駈け出したのではない、嫉妬の念に驅られて、不意に議らず〳〵駈出

したので有る。が、實際彼は父親を殺したらうか。盜賊の嫌疑に至つては、私は憤然として排斥する。何を盜んだか正確に言ふことも出來ない時に、人間は盜賊で罪せらるゝものではない。それが公理で有る。が、實際彼は盜みはしないでも、父親を殺したらうか。

「私は繰返して言ふ。彼は女を捜しに行つたので有る、只女の在所(ありか)を突き止めに行つたので有る。彼は不意に吾識らず駈出した。其時に當つて、彼は醉拂つた手紙のことなど想ひ出しもしなかつたらう。彼は玄翁を掴んで駈出したと言はれて居る。それだから、豫め謀つて父を殺しに行つたのだと言はれて居る。が、何故彼は玄翁を兇器として掴んだと言はれなくちや成らんのでせうか。私には極めて平凡な考へが浮んで來た。が、若し玄翁が棚の上になかつたら何うでせう。若し被告の眼に止まるやうな處になかつたら、彼は空手(からて)で駈出したに違ひない。從つて何人も殺さなかつたでせう。何うして吾々は玄翁を謀殺の證據、見ることが出來ませうか。

「が、被告は好く料理屋で親父を殺す〳〵と言つたものだ。が、吾々は好く子供や醉

拂ひが料理屋から出て來て、『手前(てめへ)殺して遣るぞ』と叫ぶのを聞かないでせうか。が、彼等は一度も人殺しをしたことがない。あの手紙も、料理屋から出て來て、『手前殺して遣るぞ！　手前達皆殺して遣るぞ』と言ふのと同じやうなもので有る。何故左樣でないでせうか。何ういふ理由で吾々は此手紙を譫語(たわごと)と見ずして、『致命的』と見るのでせうか。父親が殺されて居たからで有る、一人の證人が彼の庭から兇器を手にして駈出すのを見た、そして毆り倒されたからで有る。それだから、吾々は彼が豫め手紙の中で計劃した通りに實行したと言ひ得るので有る。

「で、吾々は愈々決勝點に近づいた。『彼は庭に居たから、人殺しをしたに違ひない、此の『居た』から『違ひない』といふ言葉の中に、起訴の全事實が含まれて居るので有る。が、居ても、違ひないことなかつたら何うでせう？　私は數多證據の鎖が有るのを知つて居る。が、其の連結に樗はないで、一つ〳〵事實を精査して見よ。何故檢事は、被告が父親の窓の前から駈け戻つたといふ申立を眞實として認められぬでせうか。そんな敬虔な心持が此殺人犯者に不意に起るやうなことはないと言はれる。が、

親孝行とは言はない迄も、左様いふ宗教的な感じが被告に有つたら何うする。『阿母さんが其時私の爲に祈つて居たに違ひない』とは被告が豫審で述べた言葉で有る。彼は女が父の家に居ないのを見定めるや否や駈去つた。『が、窓からそんな事を見定めることは出來ない』と、檢事は反對される。何故出來ないのでせうか。被告の合圖で窓の戸を開けた時、フョドールは女の居ないのが判るやうなことを口にしたかも知れない。

『『が、グリゴリイは戸が開いて居るのを見た。從つて被告は確に家の中に居た。それだから父親を殺したので有る。』其戸に就いては、陪審官諸君、吾々は只一人の證人の申立を有するに過ぎない。而も其證人は其時前に立證したやうな狀態に有つたのである。が、假に戸が開いて居たものとして、被告は嘘を吐いて居るものとして、假りに彼が家の中へ這入つて居たものとして——それから何うです？　何うして彼が家の中に居たから人殺しをしたといふ結論に成るでせうか。彼は飛び込んで、部屋〳〵を駈け廻つたかも知れない。阿父さんを突き倒したかも知れない、毆つたかも知れない。が、女が其處に居ないと見極めるや否や、彼は女が居なかつたのと、父親を殺さずに

濟んだのとを悦んで、直に駈出したかも知れない。一分間後には憐憫の情から石垣を飛び下りて、爺さんを憫はることが出來たとすれば、屹度左樣で有つたに違ひない。

「檢事は恐るべき雄辯で、被告のモクロウに於ける心的狀態を述べて居られる。斷頭臺に引かれて行く囚人に譬へられたあたりは絶妙の修辭と云はざるを得ない。が、檢事は此處にも新らしい人格を創造して居られるではないか。被告は若し本當に父親を殺したとすれば、屹度自殺して居たに違ひない。自殺しないのは、殺して居ないからで有る。阿母さんの祈禱が被告を救つたからで有る。彼は其夜モクロウで只老グリゴリイのことばかり心配して居た。そして、老人が回復して、自分も其爲に苦しまないでも濟むやうにとばかり神に祈つて居た。何故斯ういふ事實の解釋が容れられないでせうか。何處に被告が嘘を吐いてるといふ確かな證據が有るでせうか。

「が、其處に父親の死骸が有る。『あれを何うするのだ』と言はれるかも知れない。『若し被告が殺さずに遁げ出したとすれば、誰が殺したのか。』誰も被告に代る者は有るまい。』

「陪審官諸君、實際左樣でせうか。吾々は檢事が其夜家に居た人の數を指折り數へられるのを聞いた。五人の中三人は責任がない――殺された當人と、老グリゴリイと、其妻と。後に殘るは被告とスメルヂヤコフとで有る。檢事は被告が他に誰も眼を着ける者がないからあの下男を指示した、若し其處に第六人者が有つたら、六人者の影でも有つたら、直にスメルヂヤコフを捨てゝ、其者に罪を歸したに違ひないと述べられた。が、陪審官諸君、何故私は全然それに反對した結論を擧げられないでせうか。其處に被告とスメルヂヤコフとの二人が有る。何故私は檢事が單に、他に罪を被せる者がないから、わが被告に罪を被せられるのだと言ふことが出來ないでせうか。檢事は有らゆる嫌疑からスメルヂヤコフを取り除けにしやうと決心して居られるから、他に何人も罪を被せる者が無いので有る。

成程スメルヂヤコフは只被告と、其兄弟並びにグルシェンカとに依つて嫌疑を掛けられたが、吾々は決着的ではないが、極めて暗示的な證據の數々を持つ。第一に、彼は此事件の當日に發作を起した。何ういふものか檢事は其眞實なことを詳細に辯護す

る必要を感じられたらしい。次にスメルヂヤコフは裁判の前晩急に自殺した。最後に今日法廷で被告の兄弟に依つて提出された、驚く可き立證で有る。私はイヴン・カラマゾフが熱に冒されて、あゝいふ證言をしたといふ檢事の確信を充分に承認するもので有る。が、兎に角スメルヂヤコフの名が持ち出された。其處に何か知ら說明されない不可思議なものが有る。

「檢事はスメルヂヤコフの性格を精細に描寫された。が、私は何うもそれに一致することが出來ない。私は自分でスメルヂヤコフを訪問して、一二談話を交したが、眞個異つた印象を受けた。成程彼の健康は弱い。が、性格や精神に於ては、檢事の言はれるやうな弱い男ではない。彼は怯懦でもなければ單純でもない。私は彼を極めて邪念の强い、野心家で、復讐的な、嫉妬深い人間と受け取つたので有る。私は二三の質問を發した。彼は親を恨んで居る、恥ぢて居る。『臭いリザベタの息子だ』と言はれた時は齒を喰ひ縛つて居た。小さい時から世話に成つたグリゴリイ夫婦の恩も感じて居ない。彼は生れた露西亞を呪つて、佛蘭西へ行つて佛蘭西人に成らうと空想して居た。

想ふに彼は自分以外に何人をも愛しない、妙に自分自身を高く買つて居る。で、彼が自分をフヨドール・パブロヴッチの私生兒で有ると知つては、公生兒の息子達と比較して、自分の地位境遇を憤らざるを得ない。彼等は有らゆる物を持つて居る、自分には何にもない。彼等は有らゆる權利と遺産とを持つて居る、自分は料理番に過ぎない。彼はフヨドールを手傳つて、封筒に金子を入れたさうな。其金子——自分が一代の計劃を立てるに足るやうな其金子の用途は、彼に取つて忌はしいもので有つたに違ひない。其上彼は三千留布の紙幣を眼で見た。一時に大金を執念深い野心家に見せたら、何う成るでせう。

「才幹有る檢事はスメルヂヤコフの犯罪に關する憶說を論破して、特に彼が發作を伴つた動機を擧げよと迫られた。が、彼は全然伴らなんだかも知れない。發作は自然に來て自然に去つた。病人は充分恢復したといふ譯ではないが、兎に角意識を恢復した。其時老ダリゴリイが聲を限りに『親殺し！』と叫んだ。スメルヂヤコフはそれを聞いて、眼を覺した。で、寢室から起き上つて、別に定まつた目的もなく、何事ぞと聲す

る方へ行つて見た。主人の窓に灯が點つて居る。彼は主人から事の次第を聽いた。彼の心は急に引立つて來た。左樣して居る間に、だん〳〵亂れた頭の中に一つの考へが——怖ろしい、誘惑的な考へが形作られる。老人を殺して、三千留布を取る。そして、其罪を若主人に被せやうといふので有る。發見される畏れがないと思ふと、金子に對する怖ろしい慾望は益々募らざるを得ない。スメルヂヤコフは這入つて行つて、其計劃を實行した。何んな兇器で？　庭で拾つた石で澤山で有る。が、何んな目的で？　三千留布は彼に取つて、一生の計劃を意味するもので有る。おゝ、私も自家撞着をしては成らない——金子は存在したかも知れない、恐らくはスメルヂヤコフ一人其在所を知つて居たので有る。で、床の上に落ちてた封筒に就いては？

「私は今檢事がカラマゾフのやうな不慣れな盜人で有ればこそ、床の上に封筒を殘して置いた、スメルヂヤコフならそんな事は有るまいと、微妙な所論を吐いて居られるのを聽いた時　何だか自分が能く知つて居ることを又聽かされたやうな氣がした。私は同じ議論を、同じ推測を、二日前にスメルヂヤコフ自身の口から聽いたので有る。

其上可訝しいのは、彼はそれを私自身の考へだと想ふやうに、旨く其說を私に暗示した。詰り私に吹き込まうとしたのだ。彼は豫審の際にも同じ考へを檢事に吹き込んだのではないでせうか。

「それぢやグリゴリイの細君のあのお婆さんは何うだと言はれるかも知れない。お婆さんは終夜病人が側で唸つて居るのを聞いた。が、此證言は極めて不信用なもので有る。私は或婦人が、終夜犬が庭で泣いて、眠られないので困ると言つて居るのを聞いた。が、可哀想に犬は一夜の中に一度か二度泣いただけで有る。左樣いふことは極めて有り勝ちの事だと言はなければ成らない。

「で、檢事は又、スメルヂヤコフが最後の手紙の中に白狀して居ないのは、何ういふ譯だと訊かれた。が、果して良心が彼を自殺に追ひ遣つたのでせうか。自殺は悔恨を意味しない、寧ろ絶望を意味する。絶望は復讐的に成り得るかも知れない。一度手を自分の上に加へた時、一生妬んで居た人間に對する憎惡は倍加して感ぜられるかも知れない。

「陪審官諸君、正義の誤用を警戒せられよ。今私の論じて來た處に、何處に無理が有るか、矛盾が有るか。有るなら、それを指摘して下さい。若し私の所論に一點でも左樣かも知れないと思はれるやうな影でも有つたら、被告を罪して下さるな。が、只影位でせうか。私は私の述べた殺人の說明を全然信じて居るので有る。殊に私の腹立たしく思ふのは、被告に對して擧げられた山のやうな事實が、一つとして確實な破り難いものが無いといふことで有る。而も不幸な被告は左樣いふ事實の山積に依つて罰せられやうとして居る。諸君、貴方がたは縛るも釋すも絶對の權利を與へられて居る。が、權利が大なるだけ、其責任も一層大なるものが有ることを注意して下さい。」

此時演說は稍大きな賞讃の聲に遮ぎられた。傍聽人は皆辯護士の眞摯な辯說に動かされたらしい。裁判長は高聲に、最一度こんな事が有るなら、傍聽人に悉く退場を命ずるゝ叱咤した。鳴りの鎭まるのを待つて、フェチュコヰッチは今迄とは違つた感情に充ちた聲で續けた。

「陪審官諸君、被告を脅やかして居るものは、單に事實の山積ではない」と、彼は始

めた。實際被告の罪を鳴らして居る事實は只一つに過ぎない。即ち父親の死骸で有る。これが普通の殺人犯で有つたら、こんな不完全な證據から被告が罰せられるやうなことは有るまい。が、これは普通の殺人犯ではない、親殺しで有る。斯ういふ被告が何うして釋されやうか。若し被告が殺人罪を犯して、而も罰せられないとすれは、何う成るだらう？　これが各人識らず〳〵本能的に感じて居る處で有る。

『成程、親の血を注ぐといふことは怖ろしいことに違ひない。が、父といふものは何んなものでせうか、眞實の父といふものは何んなものでせうか。此事件に於けるフョドール・パプロヰッチ・カラマゾフの如きは、決して眞正の意味で父とは言はれない。それが不幸でした、親子の不幸でした。

『檢事は屢々『自分は被告の辯護を彼得斯堡から來た辯護士に讓らない。自分は罪も鳴らすが、又辯護もする』と繰返された。が、檢事は此の怖ろしい被告が、只一斤の胡桃を貰つた爲めに二十三年の間其恩を忘れずに居つたとすれば、決して生の父の恩ばかり忘れるものでないといふことを擧げるのを忘られた。成程被告は亂暴な、無法

な男でした。が、そんな男に成つたのは誰の責任でせう。あれ程勝れた氣立と、恩を知る感じ深い心とを持つて生れながら、あのやうな養育を受けたのは、誰の責任でせう。子供の時一人も彼を愛したものはない、智識の眼を開いて遣つたものはない。被告は只野獸のやうに、天の惠みに捨てゝ置かれたので居る。が、數年間別れて居る間には、恐らく父にも會ひたく成つたらう、父の罪を宥して抱き合ひたいとも願つたらう。で、來て見ると、何が彼を待つて居た？　彼は只罵詈と猜疑と、金子故の掴み合ひとに出會つた。最後に自分の金子で、自分の戀人を誘惑しやうとする父親を見た。

陪審官諸君、被告の地位は實に殘酷な忌はしいもので有る。

『元來被告のやうに猛烈な、無謀な、表面御し難い人間といふものは、時として極めて優しい心を持つて居るものである。一面では、絶えず自分を改良し、高尚な、立派な人間に成らうとして、新らしい生活に憧れて居るもので有る。成程被告の許嫁はあいふ事を言つた。が、復讐の念に驅られた女の言葉が何の據所に成らうぞ。彼女は反省の餘地を持たなかつた。被告は決して彼女の言ふやうな獸物ではない。

「私は今父とは何んなものだと言つた。老カラマゾフが如き父は、父の名に値しない。値しない父に對する親孝行は予盾で有る、不可能で有る。愛も無からは生じない、無から有を造り得るものは、神だけで有る。吾々をして先づ父たる義務を果さしめよ、然る後吾々の子供から、子としての義務を待ち設けしめよ。子供を生むだけが父ではない。子供を生んでそれに對する義務を果してこそ、始めて父と云はれるので有る。

「成程世には『父』といふ言葉に對する別の解釋も有る。其解釋に依れば、縱令父が獸物で有つても、子供の敵で有つても、なほ彼が私を生んで呉れたが故に、私の父だと言ふのだ。が、これは私の理性の了解しない神秘的意義で有る。只信仰に依つて、宗教が吾々に信ぜよと命ずる他のいろんな物と同じやうに、只信仰の上に承認することの出來るもので有る。が、斯ういふ事は實際生活の範圍に止めて置きたい。實際生活の範圍では、吾々が博愛的で――眞に其督教徒的で有らうとすれば、吾々は理性に依つて、正しとせられたる確信の上にのみ行動しなければならぬ。斯うして、父の前に立つて訊ねしめよ。『父よ、何故私は貴方を愛しなければ成らぬか、私に其理由を

示して下さい。』若し其父が子に對して、神秘的な偏見に依らず、責任ある博愛主義の基礎の上に正當な返辭が出來ないとすれば、家族的紐は其處に終る。父は最早父ではない。子は彼を他人として、敵としても見ることが出來る。陪審官諸君、吾々は飽迄眞實な、極めて健全な思想の上に立ちたい。」

此時辯士は抵抗すべからざる、殆んど狂氣のやうな賞讃の聲に妨げられた。勿論傍聽席の傍聽人の全體ではないが、より好き半分が喝采したので有る。

「陪審官諸君、諸君は息子が石垣を越えて、自分を生んだ敵と面して立つたあの怖ろしい夜を記憶せられるで有らう。憎惡の感情は吾知らず湧き立つて、彼の理性を曇らした。一時に波の如く押寄せたので有る。是れ精神の錯亂した衝動ではあるが、又永劫の法則を犯した者を復讐しやうとする、打ち克ち難い自然の衝動でも有る。が、其時ですら被告は父を殺さなかつた。彼は只憤怒の餘り、吾知らず、玄翁を振り廻したのだ。彼が遁げ出した時には、老人を殺したか何うかも知らなんだに違ひない。斯かる殺人は殺人ではない。勿論親殺しでもない。斯かる父を殺したのは、何うしても親

殺しとは言はれない。只先入の偏見に依つてのみ親殺しと數へらるゝのでの有る。

「が、私は繰返して心の底から諸君に訴へる、實際こんな殺人が有つたのでせうか。陪審官諸君、吾々が彼を罰した時、彼は何う言ふでせう。『彼等は私を育てゝも呉れなかつた、飲む物も食ふ物も與へなかつた。そして最後に私をこんな勞役に送つた。私は償つた。私は彼等に何一つ負ふ所がない、何人にも永久に負ふ所がない。彼等は惡るい奴等だ。俺も惡るく成つて遣らう。彼等は殘酷な奴等だ、俺も殘酷にして遣らう。斯くの如くにして、諸君は彼が新しい人に成る有らゆる機會を奪つて、一生惡と盲目との中に終らしめるものですぞ。

「で、若し諸君が、彼に最も怖ろしい刑罰を與へて、同時に彼の靈を救はうとせられるならば、何卒彼に恩惠を與へて下さい！　彼は何んなに怖れて顫へ上ることでせう。『うして私は恩惠に堪へられやう？　私はそれに値しない。』彼は屹度斯う叫ぶに違ひない。私は彼の心を知つて居る、亂暴な、恩を知る心を知つて居る。彼は諸君の恩惠の前に額づくで有らう。彼は大きな博愛の好意に饑えて居る。彼の心は融けて、天

に昇るで有らう。

「一人の罪なき者を罰するよりは、十人の罪有る者を宥せ！　これぞ香り高き吾等の歴史が敎ふる壯嚴な聲ではないか。私のやうな取るに足らぬ者の言ふ言葉ではないが、露西亞の法廷は只刑罰の爲にのみ存在するものではない。罪人の救世主として立つものでの有る！　今や被告の運命は諸君の手に有る、露西亞の正義の運命も諸君の手に有る。諸君はそれを護らなければ成らない、救はなければ成らない、それが善き人の手に有ることを立證し成ければならない！」斯う言つて、辯護士は演說を終つた。傍聽席の熱心は暴風雨のやうに破裂した。女どもは皆泣いた。裁判長も仕方がないから、鈴を鳴らすのを控へて居た。演說した辯護士自身も動かされたらしい。

其時檢事は立ち上つて、反對說を述べやうとした。人々は憎惡の眼を以て彼を見た。彼の顏は蒼く、言葉も聞き取れなかつた。が、間もなく勇氣を恢復した。

「……私は小說を編んだといふので批難された。が、此辯護は反對の頂きに於ける小說に有らずして何ぞ。コヨドールは女を待つ間に封筒を破つて床に捨てた。吾々は

彼がそんな妙な事をしながら言つた言葉さへ聞かされた。これは想像の飛躍ではないか。彼が金子を取出したといふ證據が何處に有るか、誰が彼の言葉を聞いたか。馬鹿のスメルヂヤコフは社會に對して報復を圖つて居る一個の英雄に變つて仕舞つた。父の家に躍り込んで、父を殺すことなくして殺した息子の如きは、小説の中にもない。彼が父を殺したら殺したで有る。父を殺すことなくして殺したなぞといふことは、私どもには頓と合點が行かない。

「吾々は又眞實にして健全な思想の上に立てと敎へられた。そして其健全な思想に依れば、父を殺した者を親殺しと呼ぶのは先入の偏見に過ぎないと云ふので有る。が、親殺しを偏見だとすれば、又有らゆる子供が父に對して、何故親を愛しなければ成らぬかと訊くやうなことに成れば、一體吾々は何う成るせでう？　社會の基礎は何うなるのでせう？　家庭は何う成るのでせう？　『恩惠で被告を壓倒せよ』と辯護士は叫んだ。が、こんな事は有らゆる罪人の望んで居る處で有る。何れだけ彼が壓倒せられるか、明日に成れば解るでせう……」

檢事は猶進んで、辯護士が親子の關係を說いて、宗敎上の偏見に迄言ひ及んだのは、明らかに露西亞正敎の主旨に反するもので有ると極力批難した。裁判長は直に口を挾んで、問題の埒を越えないやうに注意した。聽衆は沸騰した。それに對して辯護士は多くを言はなかつた。只演壇に上つて、胸に手を當てながら、二三の語を發した。其中に、「ジプタアよ、汝は憤つた。それだから汝は間違つて居る」といふやうな文句を入れた。聽衆は皆笑つた。露西亞正敎の主旨に反する說を吐いたといふ檢事の批難に對しては、彼は只此法廷に於て、自分は「露西亞臣民としての私の名譽を傷けるやうな」批難からは保護されて居ると信じて居たと言ふに止めた。が、それを聞いて、裁判長も襟を正した。

それから被告が發言を許された。ミチヤは立上つた。彼は肉體的にも精神的にも怖ろしく疲れ切つて居た。朝這入つて來た時の元氣は丸でなかつた。彼は其日に一生忘られないやうな、重大な經驗を經驗したやうに見えた。彼の聲は弱かつた、前のやうに叫喚(わめ)かない。其言葉には抑損と敗北と服從との兆が現はれて居た。

「此上何を言ひませう？　愈々審判の時が來た。私は自分の上に神の手が加へられるやうな氣がする。誤つた人間の終局の日が來たのだ。が、神の前に私は繰返す、私は父の血に就いては無罪で有る。最後に私は繰返す、彼を殺したのは私ではない。私は誤つて居た。が、常に善には憧れて居た。始終自分を改良しやうと努めた。が、私は野獸のやうな生活を送つた。私は檢事に謝する、貴方は私の身に就いて、いろんな私の知らないことを敎へて下さいました。が、私が父を殺したといふのは檢事の間違ひだ。私は又辯護士に謝する。私はあの辯護を聽きながら泣いて居た。が、私が父を殺したといふのは間違ひだ。辯護士はそんな事を想像するに及ばないのです。最後に私は醫者を信じない。私の胸は重苦しいが、私の頭は確かで有る。で、陪審官諸君、若し貴方がたが私を釋して下さるなら、私は貴方がたの爲に祈りませう、私は一層善良な人間に成りませう。私はそれを神の前に誓ふので有る。若し貴方がたが私を罰するとしても、私は自分の劍を折つて、其の片々（きれ〳〵）に接吻しませう。が、私の神には觸れては下さるな。私の心は重い、諸君……何卒御免下さい！」

彼は殆ど尻持を突くやうに椅子の中に沈んだ。彼の聲は途切れた。最後に陪審官は相談の爲に退席した。法廷は一時休憩した。傍聽人はどや〳〵と波を打つた。殆ど夜の一時にも近かつたが、一人も歸る者はない。皆げつそりした顏をして待つて居た。女どもは待遠しさに只焦燥（あせ）つて居た。彼等は屹度免訴されるものと考へた。男の中にも左樣思つた者が澤山有るらしい。フェチュコギッチ自身も大分安心して居るやうに見えた。

「が、百姓どもは何と言ふでせうね」と、近隣の地主らしい紳士が言つた。

「併し皆百姓といふ譯でも有りませんよ。あの中には官吏も四人程居ました。」

「左樣です、四人居ましたよ」と、州會の議員らしいのが仲間に加はつた。

「だが、あの連中は本當に被告を免訴にするでせうか。」

「あれを免訴にしなけりや、陪審官の耻辱ですよ」と、若い役人が叫んだ。「假りに被告が親爺を殺したとしてもですね、彼は只玄翁を空中に振り廻しただけですよ。下男なぞ引張り出したのは不可ない。私が辯護士なら、簡單に斯う言つて遣りますよ。『被

告げ親爺を殺しました。併し彼は無罪です、裁判も糞も有るものか』と。」

「いや、辯護士は左樣主張したのですよ。只裁判も糞も有るものかとは言ひませんでしたがね。」

「が、檢事は何と思つてるでせうね」と、他の一人が言つた。「細君があの論告を聽いたら、明日にも亭主の眼玉を引掻き出すでせうよ。」

「へえ、細君は居なかつたのですかい。」

「何うして！　あの女が此處に居たら法廷でも眼玉を引掻く處でしたよ。折よく齒痛で來ませんでしたがね。はゝゝゝ！」

「一體、ミテンカは免訴に成るでせうかね」と、又一人が言ひ出した。

「そんな事に成つたら、明日は中央旅館の引くり返るやうな騷ぎが始まるでせうよ。先づ七日間は飲み續けますね。」

鈴が鳴つた。陪審官は恰度一時間だけ評議を凝らした。それより長くも短かくもない。一同席に着くや否や、深い沈默が法廷を支配した。裁判長は形の如く最初の問を

發した。「被告は金子を盜む目的で、豫め謀つて殺人罪を犯したでせうか。」法廷は森とした。陪審官の先達は死んだやうな法廷の靜けさの中に、明らかな高聲で、

「左樣です、有罪です！」

同じ答へが有らゆる問に對して繰返された。こんな事は誰も思ひ掛けなかつた。誰しも少しは緩和されるだらうと豫期して居た。法廷は隅から隅迄化石したやうに見えた。が、それも一瞬間で、直にがや〳〵といふ聲が續いた。婦人連は殆ど一揆でも始めるかと思はれた。皆椅子から飛び上つた。「何うするのです、これから何うするのです？」皆直に裁判が取消されて、遣り直しに成るとでも思つてるらしい。其瞬間ミチヤは不意に立上つて、兩手を伸ばしながら、胸も裂けるやうな聲で叫び出した。

「私は神と最後の審判の日に依つて誓ふ、私は父の血に就いては罪がない！　カチヤ、私はお前を宥して遣るよ。兄弟、友達、何卒最一人の女を憐んで下さい！」

彼は後(あと)を續けることが出來なかつた。彼の聲とは思はれないやうな、不自然な、怖ろしい嗚咽の聲が法廷の隅々迄聞えた。折柄又傍聽席の後ろの一番遠い隅から裂くや

うな泣聲が起つた。それはグルシェンカで有つた。彼女は一生懸命に頼んで、辯護士の演說が始まる前に、再び法廷へ這入つて來た。ミチヤは連れて行かれた。判決の申渡しは次の日に延ばされた。がや〳〵と騷がしい聲が續いた。私は法廷を出やうとしながら、階段の上で、こんな聲を聞いた。

「彼奴も鑛山へ二十年の旅行に遣られるのだな。」

「それより少なくはないよ。」

「あゝ、ミチヤもお終ひだね。」

大團圓

裁判の日から五日目の朝早く、アリヨウシヤは或る使命を帶んで、カテリイナ・イヴノフナの許を訪ねた。彼女は嘗てグルシェンカに會つたことの有る部屋で彼と話した。次の間にはイヴンが高い熱で正體もなく寢て居た。カテリイナは世間の噂を顧みないで、裁判所から直に病人を自宅へ連れて來させた。それからずつと枕頭へ附き詰めにして、病人を看護して居る。醫者はカテリイナやアリヨウシヤの安心するやうには言つたが、未だ確かに恢復するものとは請合はなかつた。

アリヨウシヤは一日に二度兄を見舞ひに來た。が、今朝は特に差迫つた用向が有るらしい。二人は四半時間ばかり談話を交へて居た。カテリイナは蒼い顏をして、非常に疲れて居るが、同時に怖ろしく昂奮して居る。何だかアリヨウシヤの來た譯が解るやうな氣がして居た。

「あの人の決心に就いてそんなに心配することは有りませんよ」と、彼女は語氣を强めて言つた。何の道あの人は遁げる外ない。あの不幸な人――いえ、ドミトリぢや有りませんよ、兄の爲めに自己を犧牲にして、次の間に寢て居るあの人ですよ」と、カチヤは眼の色を變へて附け加へた。「あの人がずつと前に、私に其話をして置きましたよ。あの人は既にドミトリとも相談して、西伯利亞へ囚人を護送する護衞官とも打合せがして有るさうですよ。えゝ、イヴンは裁判の前の晩に逃亡の計劃を皆私に話して呉れました。あの時ですよ、貴方覺えて居ませんか、貴方が私達の喧嘩して居る處へ

被入した――そら、あの人が階段の下で貴方に會つて戻つて來たことが有るでせう、あの時ですよ。あの時私達が何で喧嘩して居たか知つて被坐しやるか。」

「いえ、知りません。」

「それが其逃亡の計劃に就いてですよ。あの人は三日前に大體の計劃を話しました。私達はそれから三日の間爭ひ通して居たのですよ。あの人は、ドミトリが有罪に極つたら、あの女と一緒に外國へ出奔する筈だと言ふんでせう。私は直に眞赫に成つて怒つた。何故だか私には言へない、私にも解らない……えゝ、勿論、あの女のことで怒つたのですよ、あの女がドミトリと一緒に外國へ行くといふから怒つたのですよ」と、カテリイナは不意に唇を顫はせながら叫んだ。「イヴンは私があの女のことで怒つたのを見ると、私が嫉妬を起したのだ、未だあのドミトリを愛して居るのだと想像した。それが原(もと)て喧嘩をしたのですよ。私は言譯もしなかつた、謝罪(あやまり)もしなかつた。こんな人でも、私が未だあの何を愛して居るんだと疑ふのかと思ふと、耐らないのですものね。私はあの女に對して怒つただけでした。三日後、貴方が被入した晩に、あの

人は封をした封筒を持つて來た、自分に何事が起つたら、直に開いて見よと言ひました。あゝ、あの人は自分の病氣を前から知つて居ましたよ。其中に逃亡に關する委細の事が書いて有る。若し自分が死ぬか病氣にでも罹つたら、私一人でミチヤを救つて呉れと言ふんですよ。それから私に一萬留布の金子を渡しました。私はイヴンが未だ兄を救ふ考へを捨てないで、私に――未だミチヤを愛して居ると信じて妬んで居る私に、逃亡の計劃を委任するのかと思ふと、心の底から感動して仕舞ひました。あゝ、何といふ犠牲でせう！　私はイヴンの足下に領伏(ひれふ)さうかと思ひました。が、直に又これは只ミチヤを救つて、私を悦ばせる爲ぢやないかと考へた。それが爲ですよ、そんな事が不圖氣に成つたからですよ、私がイヴンの足下に跪づく處か、夢中に成つて腹を立てたのは！　あゝ、私は不幸な人間だ！　それが私の生れ附きです、私の怖ろしい不幸な生れ附きです　ねえ、私は屹度終(しな)ひにはあの人を驅つて、ドミトリと同じやうに、私を捨てゝ他の最つと都合の好い女の許に走らせるでせうよ。併し……いえ、私はそれに耐へられなかつた。死んでも可いと思つた。で、貴方が這入つて被入

した時、私があの人を喚び戻した時、あの人の私に向けた輕蔑と憎惡との顏色を見ると、私は又腹が立つて耐らなかつた。覺えて被坐しやいますか、私は貴方に向つて、兄のドミトリが人殺しだと私に說得したのはあの人だ、あの人だけだと叫びましたでせう。私はあの人を傷つける爲に、故と惡意でそれを言つたのでした。あの人は決して、決して兄が殺したなぞと私に說得したことはない。反對に、私があの人を說得したのですよ。えゝ、何も彼も私の邪な性格が原ですよ。裁判所で、あんな事に成つたのも、私が仕向けたのでした。あの人は自分が名譽を重んずる男だ、縱令私が兄を愛して居ても、復讐や嫉妬の爲に兄を陷入れるやうな人間でないといふことを私に見せやうとしたのですよ。それだから、「あの人は法廷へ出たのです……何も彼も私が原でした、何も彼も私が惡るいのです！」カチャはこれ迄アリョウシャにもこんな自白をしたことはない。彼は彼女が今やあんなに自尊心の强い女でも、其自尊心を打碎かれずには居られないやうな、耐へ難い苦痛の下に有るのだといふやうな氣がした。アリョウシャは彼女が一生懸命隱して居るにも係はらず、他に最一つ彼女の今の不幸の

理由を知つて居た。彼女は裁判所に於ける自分の「裏返り」の爲に苦しむで居るのでありる。アリョウシャは彼女の良心が絕えず彼女に迫つて、涙と叫聲とを以て、床の上にのた打ち廻つて、彼の前にそれを自白させやうとして居るのを感じて居た。が、彼は其瞬間を怖れて、成たけそんな事をさせまいとした。彼は又ミチャのことを話し出した。

「えゝ、大丈夫ですよ、あの人のことなぞ心配なさらぬが可いと、彼女は頑固に言ひ張つた。私はあの人を能く知つて居るが、それも一時ですよ。あの人は屹度逃亡に同意しますよ。其間には、イヴンも健康に成つて、自分で好いやうに計らひますからね。心配なさるな、あの人は屹度逃げますよ。あの人は迚もあの女と別れて居られないでせう。所が、政府であの女を一緒には遣らない。して見りや、遁げる外ないぢや有りませんか。あの人が怖れて居るのは貴方ですよ、貴方が道德上の立場から逃亡を是認せぬだらうと心配して居るんですよ。貴方は寬大にそれを宥して上げなくちや成りませんわね」と、彼女は意地惡るげに微笑した。

「あの人は十字架を負ひたいと言ふんですよ。イヴンが好く其事を話して居ましたがね。あゝ、貴方もあの人の話をお聞きに成つたら！」と、彼女は不意に感情を抑へられないやうに叫んだ。「あの人はそんな話をしながら、本當に兄さんを愛して居ましたよ。そして、恐らくは同時に憎んで居ましたよ。私はあの人の話を、涙を、只嘲笑ひながら聽いて居ました。私は眞個畜生ですね。あの人を病氣にしたのは私の責任ですよ。併し監獄に居るあの人間は迚も苦しむことは出來ない」と、カチヤは苛々しながら言つた。

「あんな人間が苦しめませうか。あゝいふ人間は決して苦しまないものですよ。」

彼女の言葉には憎惡と侮蔑の意が籠つて居た。而も彼を裏切つた者は彼女で有る。

「恐らく自分が彼を惡るくした譽えが有るから、あんなにして、或瞬間には彼を憎むのだ」と、アリヨウシヤは一人で考へた。彼は何卒それが「或瞬間」だけで有つて欲しいと思つた。

「ねえ、あの人は今日貴方に會ひに來て貰ひたいと賴んで居るのですよ」と、彼は眞

直に相手の顏を見詰めながら、不意に言ひ出した。彼女はたぢ〳〵と後へ退つた。

「私に？　そんな事が出來ますか」と、彼女は眞蒼に成つて口籠つた。

「出來ます、又仕なくちや成りません」と、アリヨウシヤは聲を勵まして言つた。「あの人は今特に貴方を要しますよ。私も必要がなけりや、そんな事を言ひ出しはしない。あの人は病氣です。吾を忘れて、貴方に願ひ續けて居るんですよ。あの人も貴方と仲直りがしたいと云ふのではない。只一寸入口で顏を見せて貰へば可いんですよ。あの人もあの日から隨分變りました。貴方に對して濟まないといふことが解つたのです。決して貴方の宥恕を願ふのではない。自分でも『私を宥すことは出來ない』と言つて居ますよ。只戸口迄來て貰へば、それだけで可いのですよ。」

「餘まり不意です……」と、カチヤは吶つた。私は此間から貴方が左樣言つて被人しやるだらうと想つて居た。そんな事は出來ません！」

「まア出來ないでせうが、行つて下さい。あの人は始めて貴方を惡くしたといふことに氣が附いたのですよ、生れて始めて――あの人は苛て、これ程深く其事に想ひ到つ

たことはない。貴方が來て下さらなきや、自分は一生不幸だと言つて居ますものね。お聞きですか。二十年の懲役に處せられながら、あの人は未だ幸福に成りたいと願つて居るのですよ――可哀相ぢや有りませんか。貴方は何うしても會ひに行つて下さらなきや成らない。縱令あんな宣告は受けても、あの人は無罪ですぞ」と、相手に突つ掛るやうに言ひ出した。「あの人の手は清淨です、血は着いて見ない！　未來に於ける無限の苦しみを救ふために、何卒あの人を見舞つて下さい。暗がりへ落ちて行く途上で、あの人に挨拶して下さい。戸口に立つて下さればそれで可い。貴方もそれだけの事は爲なくちや成らない、爲なくちや成らない！」

「爲なくちや成らない……併し私には出來ない」と、カチヤは呻いた。「あの人が私を見る……そんな事は出來ない。」

「貴方がたの眼は會はなくちや成らない。今それをする決心が着かなけりや、貴方がたは一生何うして暮します？」

「一生苦しむだ方が好う御座んすよ。」

「貴方は行かなくちや成らない、行かなくちや成らない」と、アリヨウシヤは無慈悲に繰り返した。

「が、何故今日行かなくちや成らんのです……病人も放つて置けないでせう。」

「少しの間なら好い。貴方が來なけりや兄さんは今夜にも氣が狂ひさうですよ。私は嘘は言はない。あの人を可哀相と想つて下さい！」

「私を可哀相と思つて下さい」と、カチヤは聲を上げて泣き出した。

「ぢや、貴方は來て下さいますね」と、アリヨウシヤは女の涙を見ながら、斷乎として言つた。「私は行つて、貴方が直に來て下さると言ひますよ。」

彼は立上つた。

其時ミチヤは病院に寢て居た。運命の極つた翌日、彼は熱病に罹つて、町の病院の中の囚人部へ送られた。二三の人の願出で、彼は別室を與へられて、他の囚人と同居せずとも濟むやうに成つた。親類や友人の訪問も許された。が、アリヨウシヤとグルシエンカとの外には見舞ひに行く者もない。ラキチンはミチヤの方から斷つた。

アリヨウシヤが這入つて行つた時、ミチヤは病院の寢衣を着て、醋酸水を含ませた手拭を頭に乘せたまゝ寢臺の上に坐つて居た。裁判の日以來、彼は妙に考へ込んで、半時間も續いて默つて居ることが有る。何か自分の方から言ひ出せば、何時も心にも無いことを言ひ〳〵した。時として、アリヨウシヤに對しても苦しさうな顏をして居た。グルシエンカに會ふ方が一層氣樂らしい。尤も彼女に對しても滅多に物を言はなかつた。が、彼女が這入つて來るや否や、彼の顏は悅びに輝いた。

アリヨウシヤは默つて寢臺の側に腰掛けた。今日はミチヤの方で不安さうにアリヨウシヤを待つて居たが、自分の方から何とも言ひ出し得なかつた。彼はカチヤが承知して來て呉れるなぞとは殆ど考へも及ばないやうに思つて居るらしい。アリヨウシヤにはそれが解つて居た。

「モクロウの宿屋の親爺がね」と、ミチヤは不意に言ひ出した。「家中緣板も屋根裏も引剝して仕舞つたさうだよ。檢事の言つた千五百留布を搜し出さうとしたんだね。彼處から來る役人が左樣言つてたよ。」

「ねえ兄さん」と、アリヨウシヤは始めた。「あの女は來ますよ。今日か、二三日の中に、未だ何時といふことは言へませんがね。」

ミチヤは飛び上つた。何か言はうとしたが、默つて居た。女が何と言つたか、それが訊きたいらしい。が、訊くのを怖れて居るのだ。

「あの人はいろ〳〵言つた中にこんな事を言ひましたよ。逃亡のことに就いては、當方の良心が安まるやうに、私から言はなくちや成らない。其頃に成つてもイヴンが快く成らなけりや、自分でそれを取計らふ積りだと。」

「それは最う聞いたよ」と、ミチヤは考へながら言つた。

「で、グルシヤには其事を仰有いましたか」と、アリヨウシヤが訊いた。

「あゝ」と、ミチヤはおづ〳〵弟の顏を見ながら答へた「昨日其話をしたら、あの女は默つて居たよ。そして、只『遣らせて置くさ』と呟いた。あの女も今はカチヤが最う私のことなぞ思つて居ない、只イヴンを愛して居ると承知して居るからね。」

「左樣ですか」と、アリヨウシヤは訊き返した。

「うむ、未だ承知して居ないかも知れないが、今朝は遣つて來ないよ」とミチヤは遽てゝ言ひ出した。「俺(わし)もイヴンが兄弟の中で一番優れて居るといふことは知つて居る、あれは生きなくちや成らぬ。俺達は何うでも可いんだよ。」

「あの人は善い體格をして居ますから、萬々大丈夫ですよ」と、アリヨウシヤは心配相に言つた。

「左樣、大丈夫だらうか、カチヤは死ぬものと信じて居るだらうね。あの女も隨分悲しい目に耐へなくちや成らんよ。」沈默が續いた。

「アリヨウシヤ、俺は實にグルシヤを愛して居る」と、ミチヤは不意に涙聲で言つた。

「政府ぢやあの人を何うしても一緒に遣らないでせうね」と、アリヨウシヤは直に其言葉に隨いて言つた。

「いや、俺(わし)は別に言ひたいことが有るんだよ」と、ミチヤは續けた。「彼方へ遣られてからでも役人どもが俺を打つなら、俺はそれに服從しないよ。俺は何奴(どいつ)か殺すかも知れない。又それで罰に會ふだらうよ。そんな事で二十年間續くのさ。俺は終夜(よつぴて)此處に

寢て考へて居たがね。何うも俺には未だ覺悟が足りない。未だ諦め切れないよ。番人が荒い言葉でも俺に掛けやうものなら、俺はそれに耐へる力がないよ。グルシヤの爲なら俺は何でも忍ぶ……が、彼奴は迚も一緒に遣られないからね。」

アリヨウシヤは徐かに微笑した。「兄さん、私はそれに就いて考へたことが有りますよ。私は眞實のことを言ひますがね、貴方は未だ覺悟が足りない。そんな十字架は貴方に用が有りませんよ。貴方が阿父さんを殺して置いて、刑罰を厭はれるのなら、私は悲しみますよ。が、貴方は無罪だ。そんな十字架を忍ぶ必要はない。貴方は苦痛を忍んで、新らしい人間に成らうと仰有るがね、貴方が十字架を拒むといふだけで、一生貴方に大きな義務を感じさせるに充分ですよ。其感じさへ有りや、彼方(あちら)へ行くよりも貴方を一層新らしい人間にしますでせうよ。貴方は彼方へ行つても、それを忍ばない、後悔する、終ひには『私は償つた』と言ひ出すかも知れない。其點では、辯護士の言つたことが當つて居ますよ。で、若し貴方が逃亡した爲に他の人間が難儀をするなら、私は決して許しませんよ。が、護衛官もイヴンに言つたといふぢや有りません

か、旨くさへ造りや別に議論は有るまいよ。勿論、こんな場合でも賄賂を使ふのは善くないでせう。が、私はそれに就いて裁くことは出來ない。若しイヴンやカチャが私に賄賂を持つて行けと言つたら、私は屹度持つて行きますからね。私は眞實を語つて居るのです。で、私は貴方の行爲を裁くことは出來ない。が、私は斷じて貴方を罪有りとは爲ませんよ。で、私の心持はお解りでせう。」

「が、俺は自分を罪有りとする！」と、ミチャは叫んだ。「俺は遁げるよ。それは最うお前を別にして決定したよ。ミチャ・カラマゾフは遁げる外仕方がないぢやないか。が、私は自分を罪有りとするよ、一生自分の罪の爲めに祈るよ。何だかジェシュイツト教徒の言草のやうだね。左樣ぢやないか。」

「左樣です」と、アリヨウシヤは優しく微笑した。

「お前は毎も皆眞實のことを言つて、何も隱さないなら所好だよ」と、ミチャは嬉しそうに笑ひながら叫んだ。「で、其後を言ふがね、私は縱令金子と旅行券とを持つて亞米利加へ遁げても、俺は些とも嬉しいことはない。矢張西伯利亞へ流されると同じやう

な氣がするよ。俺は亞米利加が嫌ひだ。縱令グルシェンカと一緒に行つても嫌ひだ。あの女を見て呉れ、あの女は亞米利加人かい。あの女は露西亞人だ、骨の髓迄露西亞人だ。あの女は懷鄕病に罹るだらう。俺はあの女が私の爲めに苦しんで、俺の代りに十字架を負ふて居るのを見るのが辛いんだよ。あの女は何んな惡るい事をした？　俺は今から亞米利加を憎んで居る。縱令機械が立派で有らうと、彼奴等は皆俺とは違ふのだ、俺は露西亞が所好だ、露西亞の神樣が所好だ」と、彼は急に聲を顫はせながら叫んだ。彼の聲は涙に顫へて居る。「だから、俺は斯う決心したんだよ。俺はグルシヤと一緒に亞米利加へ着くが否や、人目に掛からない山の奥へ引き込んで、直に文典の稽古を始める積りだ。俺もグルシヤも二人ながらだよ。三年經つた頃には、二人ながら英吉利人のやうに英語を饒舌るやうに成るだらう。左樣成りや、亞米利加におさらばだ！二人は亞米利加人として、此の露西亞へ戻つて來る。心配するな、此町へは近寄らないよ。何處か片田舍に隱れる積りだ。其頃には、俺もあの女も變つて居る。醫者が顏に疣でも造つて呉れるだらう、其處が機械國の一得さね。でなけりや片眼拔き出

すか、髪を一尺も伸ばすさ。又俺も露西亞戀しさに頭が半白に成るだらうよ。左樣すりや、誰も氣が附かない、氣が附きや西伯利亞へ遣られる迄さ。兎に角俺は此國で働いて一生亞米利加人で通すよ。が、兎に角生れた國の土に成るのだ。これが俺の計劃だよ、お前は何う思ふかい。」

「好いでせう」と、アリョウシヤは逆らふまいと思つて言つた。再び一分間ばかり沈默が續いた。

「アリョウシヤ、私の懸念を救つて呉れよ」と、ミチヤは不意に叫んだ。「何うだ、あの女は本當に來るのかい、あの女は何と言つたのだい？」

「あの人は來ると言ひましたよ　今日來るか何うか解りませんがね、あの人も辛いのですよ」と、アリョウシヤはおづ〳〵兄の顏を眺めた。

「そりや辛からうよ。アリョウシヤ、俺は狂氣に成るやうな氣がする。グルシヤは俺を見張つて居る。俺は何の爲にカチヤを喚んだのだらう？カラマゾフ魂は頑固だな。」

「や、あの女が來た！」と、アリョウヤシが叫んだ。

其時カチヤは戸口に現はれた。一瞬間、彼女は呆然ミチヤを眺めながら立つて居た。彼は思はず突ッ立ち上つた。見る〳〵顏色が蒼く成つた。が、おづ〳〵した、辯解するやうな微笑が口の邊りに現はれた。そして、兩手をカチヤの前に差出した。それを見ると、彼女も思はず其手に飛び附いた。そして、殆ど力任せに寢臺の上に坐らせながら、自分も其側に坐つて、猶男の手を掴んだまゝ烈しく握り占めた。幾度か二人は物を言はうとしては止めたが、又默つて妙な微笑を含みながら、互に顏を見合せて居た。かうして二分間經つた。

「お前は私を宥して呉れたね？」と、ミチヤは到頭吶りながら言ひ出した。「ねえ、解つたかい、私はお前に賴んで居るのだよ。」

「それだから私は貴方が所好なんですよ」と、カチヤは言つた。「私が宥したとて、貴方には何にも成らない。貴方が宥して下さつたとて、私には矢張左樣だ。貴方が宥して下さつても下さらずとも、貴方は永久に私の胸の痛い場所だ、又貴方も其通りだ。それに違ひない……一と、彼女は息を繼いだ。「私は何をしに來たらう！」と、彼女

は又苛々しながら始めた。「こんなにして、貴方の足を抱いて手を握りに來たのか。記臆えて被坐しやいますか。私は好く莫斯科で、此手を固く握つて、貴方は私の神で有る、悦びで有る、私は狂氣のやうに貴方を愛して居ると言ひ〳〵しましたわね」と、彼女は苦しさうに呻いた。そして、急に男の手を唇へ壓し付けた。涙が女の眼から流れた。アリヨウシヤはまご〳〵しながら默つて立つて居た。こんな事に成らうとは、彼も思ひ設けなかつた。

「戀は終つた、ミチヤ！」と、カチヤは再び始めた。が、過去は私に尊い物ですよ。え〻、何時迄も左樣ですよ。で、一度は左樣成らうとしたことを、今一分間でも眞實にしませうね」と、彼女は嬉しさうに男の顏に見入つて、强ひて微笑しながら口籠つた。「貴方は外の女を愛する、私も外の男を愛する。併し私は永久に貴方を愛するんですよ、貴方も私を永久に愛するんですよ。解りましたか。私を愛して下さい、一生私を愛して下さい！」と、彼女は始ど威嚇するやうに聲を顫はせながら叫んだ。

「私はお前を愛して居る、そして……解つてるか、カチヤ」と、ミチヤは一言づ

つ深い息を吐きながら始めた。「五日前、あの同じ夜でも、私はお前を愛して居たよ……お前が倒れて連出れされた時だよ……一生！　左樣成るんだ、永久に左樣成るんだ……」

斯くて二人は互に狂氣のやうな言葉を囁き合つた、殆ど意味のない、恐らくは眞實でもない言葉を――が、其瞬間に於ては皆眞實で有つた。二人ながら暗闇裡に言つたことを信じて居た。

「カチヤ」と、ミチヤは不意に叫んだ。「お前は私が親爺を殺したと信じて居るかい。今信じて居ないことは解つて居る。が、あの時だよ……お前があんな立證をした時だよ……確に、確に、お前は信じて居なかつたのだ！」

「私はあの時でも信じて居なかつた、私は決して信じて居なかつた。私は貴方を憎んだ、一瞬間自分自身を說き伏せたのですよ。あの立證をして居る間は、私も自分を說き伏せて信じて居た。が、言つて仕舞つた時には、直に信ぜなく成つた。それを疑つて下さるな！　私は此處へ自分自身を罰する爲に來たのを忘れた」と、彼女は一瞬間

前の甘へた調子とは丸で違つた聲音で言つた。

「女よ、お前の負ふた荷は重いな」と、ミチヤは吾知らず言ひ放つた。

「最う歸らして下さい」と、女は囁いた。「又來ます。私には此上最う耐へられない。」

彼女は座から立上らうとして居た。が、不意に大きな叫聲を發して、後へたぢ〳〵とした。グルシェンカが不意に音も立てずに室の中へ這入つて來たのだ。誰も此女が來やうとは思つて居なかつた。カチヤは戸口へ矢のやうに駈け出した。が、グルシェンカの前迄行つた時、不意に立ち停つて、眞蒼に顏色を變へながら、殆ど囁くやうな低い聲で呻いた。

「私を宥し下さいな！」

グルシェンカは相手を睨めて居た。一瞬間を聲呑んだが、やがて復讐的な、毒の有る聲で答へた。「お前と私とは互に憎み合つて居るのだ！　二人ながら憎み合つて居るのだ！　互に宥すことが出來でもするやうに！　男を助けて戻せ、そしたら一生お前を崇拜して遣るよ。」

「お前はあの女を宥さないのか」と、ミチヤは狂氣のやうな聲で咎めた。

「心配なさるな、お前さんの爲にあの人を助けて上げるよ」と、カチヤは早口に叫んだ。そして室の外へ駈け出した。

「で、お前は何だな、あの女が自分でお前に詫びをしても宥さないのだな」と、ミチヤは再び苦々しげに叫んだ。

「ミチヤ、此女を批難することが出來ますか。貴方にはそんな權利は有りませんぞ」と、アリヨウシヤも熱中して叫んだ。

「あの女の傲慢な唇が言つたので、心から出たのではない」と、グルシェンカはさも忌はしさうな調子で言ひ出した。「あの女が貴方を助けて呉れるなら、私は何も彼も宥して遣りますよ……」

彼女は何物かを壓へるやうに言ひ止んだ。彼女は未だ吾に返ることが出來なかつた。後で解つたが、こんな事に出會ふとは知らずに、彼女は偶然這入つて來たのだ。

「アリヨウシヤ、あの女を追ひ掛けて呉れと、ミチヤは弟に叫んだ。「あの女に言つて

呉れ……私は知らない……此儘であの女を歸して呉れるな！」

「私は又夕方來ますよ」と、言ひながら、アリヨウシヤはカチヤの後を追ひ掛けた。彼は塀の外でカチヤに追附いた。彼女は足早に歩いて居た。が、アリヨウシヤが追附くや否や、口早に言つた。

「いえ、あの女の前では、私は自分を罰する氣には成りませんよ。私は極端迄自分を罰しやうと思つたから、あの女の宥恕を乞ふて見た。あの女は私を宥さない……私はあの女の其處が所好ですよ」と、彼女は不自然な聲で附け加へた。彼女の眼は愼吏に閃いた。

「兄はこんな事に成らうとは些とも知らなかつたのです」と、アリヨウシヤは呟いた。

「いえ、解つて居ますよ。そんな事は何うでも宜しい」と、彼女は相手を遮ぎつた。

「ねえ、私は今から葬式に行けないのですがね。葬だけは送つて置きました。未だ金子は有るだらうと思ひますが、要るなら、左樣言ふやうに言つて下さい。ぢや、此處でお別れしませう。貴方最う遲いのですよ。寺の鐘が鳴つて居るぢや有りませんか。

さ、何卒行つて上げて下さい！」

實際彼は遲かつた。皆彼を待つて居たが、餘り遲いので一人殘して置いて、花で覆はれた小さな柩を寺で舁いで行かうとして居た。其柩は憐れなイリヨウシヤの柩で有つた。彼はミチヤが宣告された二日後に死んだ。門の前でアリヨウシヤは子供達の叫聲に迎へられた。彼等は皆待ち倦んで居たが、到頭彼が來たのを見ると一勢に歡呼の聲を擧げた。皆で十二人居たが、一樣に本袋を下げて、手に石投げを持つて居た。彼等は皆アリヨウシヤの周りに寄つて來て、各自に手を繫ぎ合ひながら家の方へ駈け出した。

アリヨウシヤは不圖彼等を停めた。「皆がね、斯うして一緒に手を繫ぎながら生きて行くのだ。」

「ウラア！　カラマゾフ！」

――大正三年十一月十七日了――

大正四年四月二十五日印刷
大正四年五月一十二日發行

定價金九拾錢

發行者　安藤現慶

カラマゾフ兄弟

著者　森田草平

發行所　東京市本郷區元町二丁目二十五番地
日月社
振替(東京)二八九一四

印刷者　東京市京橋區新富町三丁目二番地　小泉重助

648
969

終